
カードファイト！！ ヴァンガード ～次元と未来を繋ぐ永久の絆～

天道

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カードファイト！！ ヴァンガード ～次元と未来を繋ぐ永久の絆～

【Nコード】

N5913Y

【作者名】

天道

【あらすじ】

先導アイチ、戸倉ミサキ、櫛トシキ、葛城カムイは人間界から惑星クレイに飛ばされてしまう。

そして、惑星クレイのユニット達と共に未来を守るための戦いが始まるのだった。

設定（前書き）

ヴァンガードのオリジナル小説となります。

珍しくクロスオーバーではありません（笑）

設定

このお話はカードファイト！！ ヴァンガードの長編小説になります。

アニメと漫画の要素を加えた設定が各所あるので、この小説のアイチ達は平行世界だと思っていただければ良いと思います。

それから、いくつか相違点があります。

- ・ 権を除くアイチ達はシャドウパラディンの存在をまだ知らない。
- ・ アイチは完全にPSYクオリアに目覚めていない（だが、この小説においてはPSYクオリアは全く役に立たないかもしれない）。
- ・ アイチとミサキはお互いに惹かれ合っている？

などなど、色々ありますが、それでも良ければ見てください。

第1話 それぞれのイメージ（前書き）

第1話はアイチ達の紹介になります。

ユニット達は第2話からの登場です。

第1話 それぞれのイメージ

『ヴァンガード』

それは、この世界で一番大流行しているカードゲームである。

そのヴァンガードのゲーム設定は地球とよく似た“惑星クレイ”を舞台としている。

惑星クレイはファンタジーの魔法だけではなく、科学技術が共に発展しており、現実世界（人間界）とは全く異なる文明が構築されている。

また、惑星クレイには神・ドラゴン・悪魔、または妖精といった存在がごく当たり前に生息している。

誰もが憧れる、夢物語で幻想的な世界。

もし、仮に誰かが考えたこの幻想の世界が本当に実在していたら…
…？

これは、人間界の先導者^{ヴァンガード}と惑星クレイの住人^{ユニット}との未来を守るための戦いの物語である。

カードファイト!! ヴァンガード
〈次元と未来を繋ぐ永久の絆〉

人間界の日本の東京にあるカードショップ『カードキャピタル』。

そこにてヴァンガードファイトが行われていた。

「スタンドアップ！ ザ・ヴァンガード!!」

伏せたカードを表にし、プレイヤーの分身である『ヴァンガード』
が姿を現す。

「僕は“ばーくがる”にライド！」

「俺様は“バトルライザー”にライド！」

短剣を口にくわえた銀色の犬と、赤と白を基調としたロボットがフ
ィールドに現れる。

ばーくがるにライドしているのは、可愛らしい容姿をした少し引つ込み思案だが心優しき少年“先導アイチ”。

バトルライザーにライドしたのは、アイチを兄と慕う口は悪いが根は優しい少年“葛城カムイ”。

「ふん……」

それを隣の席から観戦するのは、孤高のヴァンガードファイターの異名を持つ圧倒的な実力を持つ“權トシキ”。

「ふわぁ……今日は珍しくこの四人だけか……」

そして、欠伸をしながらぼーっとレジ席から観ているのは、カードキャピタルの店員で気が非常に強い銀髪の少女“戸倉ミサキ”。

この四人はカードキャピタルにてヴァンガードファイター四強で、代表チームの『Q4（クアドリ・フォリオ）』のメンバーである。

いつもは多くのヴァンガードファイター達で賑わっているカードキャピタルだが、今日は店内にこの四人しかない。

そして、時間が流れ、アイチとカムイのヴァンガードファイトに決着がつく。

「騎士王 アルフレッド”でヴァンガードにアタック!”

「くっ、防ぎきれない……ノーガードです。参りました……お兄さん」

カムイのダメージが6となり、アイチの勝利となる。

「ありがとうございます、カムイ君」

「いえ、見事なファイトでした、お兄さん！ でも、次は負けませんよ！」

「僕も負けないからね！」

二人は笑い合いながらカードを片付ける。

すると、アイチはおもむろにカードをテーブルに並び初めてじっとカード達のクランを見つめる。

「ん？ どうしたんですか？ お兄さん」

「ちょっとね……惑星クレイはどんな世界なんだろうと思って……」

「惑星クレイ？ どうして急にそんなことを？」

「子供っぽいかもしれないけど、一度でも良いから惑星クレイに行ってみたいなと思って……」

アイチは恥ずかしさで頬を赤く染めながら言うと、レジ席から出たミサキが話に加わる。

「まあ、誰でも一度は考える事よね……アンタはどう思うっ？」

ミサキは權に視線を移して聞いてみる。

「……下らないな。そんな夢は現実に起こるはずがない」

權は現実的に答える。

「で、でも、イメージするのは自由だよ！ もし、權くんが惑星クレイに行ったらどうする？」

「俺が……？」

アイチに問われ、權は天井を見上げ、数秒間考える。

そして、權は一瞬だけ凶悪な笑みを浮かべてその質問に答える。

「そうだな……俺のイメージを超える“かげろう”達の燃えるような激しい戦いを間近で見たい。そう、大地を焼き尽くし、敵を殲滅する戦いをな……」

「あ、あはは……」

「アンタらしいね……」

「ってか、怖過ぎるイメージだろ……」

權らしい答えにアイチ達は苦笑を浮かべる。

気を取り直して次はカムイが答える。

「俺様はもちろん、“ノヴァグラップラ”達の白熱の格闘バトルをずっと見てみたい！」

「うん、カムイ君らしいね」

「男の子はみんなそうだからね」

カムイの男の子らしい答えにアイチとミサキは微笑みながらホツとし、今度はミサキが答える。

「私は……“オラクルシンクタンク”で占いをやって欲しいかな……
…それと、みんなとお話がしたいかな？」

「素敵なイメージですね、ミサキさん」

「へえー、ちゃんと女の子らしいところもあるんだな」

「何か言った？」

カムイの失言にミサキは目を鋭くして怖い表情で睨みつける。

「い、ごめんなさい！ 何でもありません！！」

ミサキが恐ろしくて瞬時にアイチの後ろに構えて謝るカムイだった。

そして、最後にアイチが言う。

「僕は……“ロイヤルパラディン”のみんなにお礼が言いたいです」

「「お礼？」」

「……………」

アイチの答えに頭に疑問符を浮かべるミサキとカムイ、そして櫂。

「はい。僕がこのカードキャピタルで皆さんと出会えて本当に良かったと思っています。そのきっかけを作ってくれたこのロイヤルパラデインのみんなに一度でも良いから『ありがとう』ってお礼を言いたいです」

アイチにとってはヴァンガードは仲間達を繋ぐ大切な絆。

その答えにミサキとカムイは微笑み、櫂は小さく笑った。

「ふふっ……アイチらしいわね。でも、言い答えね」

「流石はお兄さんです！」

「ふん……」

「は、はい！　ありがとうございます！」

アイチの何気ないたった一言から始まったこの話。

しかし、この話が現実に取りかよふとはアイチ達はまだ知らなかった。

第2話 動き出す運命(前書き)

今回はブラスター・ブレードなどのユニット達が登場します。

第2話 動き出す運命

その夜。

アイチは自室のベッドですやすやと眠っていると、机の上においてデッキが突然淡い光の輝きを放つ。

更に、デッキのみならずロイヤルパラディンのカードが全て輝いてそのまま宙に浮いた。

カード達は舞うように飛んで寝ているアイチの周りをクルクルと回る。

そして、カード達が光の球体となってアイチの体の中に入っていた。

アイチの体が一瞬光ると、体から巨大な閃光が吐き出され、そのまま窓をすり抜けて空へと飛んで行った。

そして……惑星クレイに信仰と科学技術を融合させた正義と秩序を重んじる聖域国家があった。

国家の名は聖域連合“ユナイテッド・サンクチュアリ”。

そのユナイテッド・サンクチュアリに巨大な神社や神殿が合わさった場所があった。

それは信託魔法や未来予知、占術などの魔法や科学技術を駆使してコンサルティングや経済予測業務を行う巨大企業。

言わずもがな、その企業はオラクルシンクタンクである。

そのオラクルシンクタンクで働く銀髪の可愛らしい一人の少女が息を切らせて急いで走っていた。

「はっ、はっ、はっ……急が、ないと……！」

何かを焦っているようで、少女は大きな扉の前に到着すると、すぐにその大きな扉を開けた。

「失礼します、アマテラス様!!」

部屋に入ると、少女の目的の人物が資料と和菓子を手にとって椅子に座っていた。

「な、何じゃ!? ロゼンジよ、我はちゃんと仕事をしておるぞ!」

持っていた和菓子を慌てて隠し、驚いているのは、長い黒髪と身に包んだ豪華な和服が特徴の美女だった。

この美女こそオラクルシンクタンクの代表取締役の“CEO アマテラス”である。

そして、走って部屋に飛び込んで来た少女はオラクルシンクタンク屈指の天才占い師“ロゼンジ・メイガス”。

「アマテラス様……今すぐに、お伝えしたいことが……」

ロゼンジ・メイガスはアマテラスにあることを伝えるために走って来たのだ。

「取りあえず落ち着くのじゃ。ほれ、我がさつきいれたお茶を飲むのじゃ」

「あ、ありがとうございます……」

ロゼンジ・メイガスは渡されたお茶をグイッと一息に飲み干して大きく深呼吸する。

「はあ……ふうー……では、アマテラス様。本題に入ります」

「うむ。聞かせてくれ」

「はい。先程、私の頭の中に突然ある映像が浮かびました」

ロゼンジ・メイガスは予言だけではなく、直近の未来であれば頭の中に映像として知覚することが出来る。

「どんな未来が見えたのじゃ？」

アマテラスは固唾を呑んでロゼンジ・メイガスの言葉を待つ。

「私達の先導者……ヴァンガードがこのユナイテッド・サンクチュアリに降り立ちました」

ロゼンジ・メイガスの言葉にアマテラスは目を見開き、ガタツと椅子から立ち上がった。

「それは誠か!?!」

「はい。しかし、私達オラクルシンクタンクのヴァンガードだけではありません。同じくユナイテッド・サンクチュアリのロイヤルパラディン。“ドラゴン・エンパイア”のかげろう。“スター・ゲート”のノヴァグラップラーのヴァンガードも降り立っています」

「そうか……よし、ロゼンジよ。今すぐに戦闘教団のバトルシスターの何人かを引き連れて我らのヴァンガードの保護に向かうのじゃ！」

「はい！ あっ、ロイヤルパラディンのヴァンガードはどうなされますか？ 恐らく、私達のヴァンガードの近くにいると思われるかもしれませんが……」

「それなら心配ない。すぐに騎士王殿と連絡を取ってロイヤルパラディンから精鋭の騎士達を出すよう要請する。もし“奴ら”が現れたら騎士達と協力してヴァンガード達を必ず護るのじゃ」

「わかりました。それでは、すぐに向かいます！」

「頼むぞ、ロゼンジ！」

ロゼンジ・メイガスはアマテラスに一礼すると、部屋を飛び出してまた走る。

「ロイヤルパラディンの騎士王はともかく、ドラゴン・エンパイヤとスター・ゲートは耳を貸すかどうか……まあ、やるだけやってみるかの」

アマテラスはすぐに回線を開いてロイヤルパラディンの騎士王と連絡を取る。

同時刻、ユナイテッド・サンクチュアリに一際目立ってそびえ立つ城がある。

そこは、ユナイテッド・サンクチュアリを守護する人間、妖精（エルフ、フェアリー）、神（神族、エンジェル）で構成された正規軍・ロイヤルパラディンの本拠地である城である。

その城のとある執務室にて、一人の男がペンを器用に回しながら書類整理をしていた。

豪勢な机の隣には青と白の鎧と剣が置かれていた。

何を隠そう、この男が若くしてロイヤルパラディンを率いる最強の騎士にて、偉大なる騎士達の統率者“騎士王 アルフレッド”である。

すると、『ピピピ……』と突然外部からの連絡が入り、男性はペンを机に置いて連絡に出る。

「誰だ？　もしもし？」

『仕事中申し訳ないな、騎士王殿よ！』

連絡先がオラクルシンクタンク代表取締役のアマテラスにアルフレッドも驚く。

「一体どうなされたのですか？ アマテラス殿直々に連絡をくれるとは……」

『うむ、実はの。今すぐにお主に伝えることがあるのじゃ』

「伝えること？」

『よく聞くのじゃ。お主達ロイヤルパラディンのヴァンガードが近々ユニテッド・サンクチュアリに現れるのじゃ！』

「それは本当ですか!？」

『ロゼンジ・メイガスが見た未来の映像じゃ。間違えるわけがない！』

「わかりました。すぐに騎士団から精鋭騎士を派遣してヴァンガードの保護に向かいます」

『流石は騎士王。頭の回転が早い奴じゃ！ 今、ロゼンジ達がバトルシスターを連れて我らのヴァンガードの保護に向かっている。そちらも早急に頼むぞ』

「わかりました。それでは、失礼します」

『それじゃの！』

アマテラスは通信を切り、アルフレッドは椅子から立ち上がる。

(すぐに騎士達に召集をかけなければ……!)

アルフレッドは若干焦りながら置いてある鎧を身に纏う。

コンコン！ ガチャ！

「失礼します。騎士王、今度の模擬戦についてお話しが……」

ノックをしてアルフレッドの部屋に入ってきたのは、ロイヤルパラデインの精鋭騎士にしてユナイテッド・サンクチュアリの英雄“ブラスター・ブレード”である。

「ブラスター・ブレード！？ 全く、ナイスタイミング過ぎるぞ、お前は！！」

「……はい？」

ブラスター・ブレードはキョトンとし、目を丸くする。

「ブラスター・ブレード。模擬戦の話は後にして、今から緊急にして重要な任務を言い渡す」

アルフレッドの騎士王としての重みのある言葉にブラスター・ブレードはすぐさま跪いき、一つ頷いた。

「承知しました、騎士王。それで、その任務の内容とは？」

「それは、この地に訪れた我々のヴァンガードの保護だ」

「ヴァンガード！？ では、彼が遂に……！！？」

ブラスター・ブレードは一瞬信じられないと言わんばかりの表情をする。

「これは、オラクルシンクタンクからの確かな情報だ。今、彼女達もオラクルシンクタンクのヴァンガードの保護に向かっている。ブラスター・ブレードよ。部下達を引き連れて我らロイヤルパラディンのヴァンガードの保護を命ずる」

「はっ！ この命と剣にかけて、必ず我らのヴァンガードを御守りいたします！！」

ブラスター・ブレードは腰に差した、名を受け継いだ同じ勇気を力に変える剣を持って騎士王に言う。

「頼むぞ。アマテラス殿も恐らく危惧している敵の襲撃も予測できる。すぐに向かってくれ！」

「はっ！！」

ブラスター・ブレードは返事をする、アルフレッドに一礼をして執務室から出る。

そして、数人の部下と一匹の相棒を引き連れてブラスター・ブレードは城から出撃する。

(待っている、マイヴァンガード。すぐに行く！)

第3話 覚醒した力と出会い（前書き）

今回、アイチ君が頑張ります！

そしてブラスター・ブレード達との出会いです！

第3話 覚醒した力と出会い

ユナイテッド・サンクチュアリの郊外の野原にて少年が眠っていた。その少年は地球の自室で眠っていたはずのアイチだった。

アイチは頬を撫でる優しい風に意識が覚醒し、ゆっくりと目が覚める。

「ん……んっ……」

「あっ！ アイチ、起きた？」

「ミサキ、さん……？」

アイチの顔のすぐ近くにミサキの顔があった。

(どうしてミサキさんが……？ そう言えば、枕の感触がいつもより良いような……)

「ふふっ。私の膝枕、どうかな？」

少し意地悪そうな笑みを浮かぶミサキにアイチは顔が少しずつ真っ赤になる。

ミサキは女の子座りをして、自分の膝にアイチの頭を乗せていた。

「えっ？ えっ？ ええっ！？」

アイチは慌ててミサキの膝から頭を離した。

「ミサキさん、ごめんなさい！」

「どうして謝るの？ 寝ているアイチに勝手に膝枕をしてあげたのは私だから、謝らなくて良いんだよ。こういう時に言う言葉はありがとうじゃない？」

「えっ、あ、はい……ありがとうございます、ミサキさん……膝枕、凄く心地良かったです」

アイチは相変わらず顔を真っ赤にしながらミサキに礼を言い、ミサキは満足そうに微笑んで頷く。

そして、アイチは周りをキョロキョロと見渡す。

「ところで……ここはどこですか？」

「さあ？ 少なくとも、地球じゃなさそうよ」

「どうしてわかるんですか？」

「あれよ」

ミサキが指差した先をアイチが見る。

そこには、巨大な建物が幾つもそびえ立つ近未来的な国があった。

「あれは……もしかして……」

「ええ。私も信じられないけど……」

アイチとミサキは同時に頭に過ぎった答えを言う。

「ユナイテッド・サンクチュアリ」

自分の持つデッキの所属する国家がすぐ近くにあるのは普通に考えれば有り得ないことだが、アイチとミサキは直感でそれがユナイテッド・サンクチュアリだと分かった。

「これは夢かな……？」

「夢みたいだけど、現実みたいな感じがするよ……行こう、アイチ！」

ミサキはアイチの手を引いて走り出した。

「ミ、ミサキさん!？」

「早く早く！ 夢が覚めない内に早く行こう！」

普段のミサキは気怠そうにしているが、今のミサキは年相応の可愛らしい笑顔をしていて、アイチにはキラキラと見えている。

(ミサキさん……とっても可愛いです……!)

アイチはミサキにバレないように俯いて顔を先程より更に赤くする。

アイチとミサキは早速ユナイテッド・サンクチュアリに入ると、二人の目はキラキラと輝いた。

「す、凄い……！」

「ここが、ユナイテッド・サンクチュアリ……！」

聖域国家と呼ばれるユナイテッド・サンクチュアリは近未来的な建物が広がり、無数の空間ディスプレイが宙に浮いていてニュースや宣伝が流れていた。

道行く歩行者達の服装もかなり変わっており、ここがアイチとミサキの住んでいる世界とは違つと実感できる。

「ミサキさん、オラクルシンクタンクの本部に行きませんか？」

アイチの提案にミサキはぱあつと輝く。

「えっ！？ いいの？」

「はい。僕は後でも良いので先にミサキさんからどうぞ」

「ありがとう、アイチ！ ああつ、本当に楽しみだな……」

ミサキは手を組んでオラクルシンクタンク みんなに会えるのから楽しみにしていた。

「それじゃあ、まずは誰かにオラクルシンクタンクの本部の場所を聞きましようか」

「そうね。それと、ロイヤルパラディンの本拠地もね」

アイチとミサキは観光気分もとい、デート気分でユナイテッド・シンクチュアリを楽しもうとする。

しかし、この惑星クレイに呼ばれた意味をまだ知らないアイチとミサキに危機が迫る。

トガアアアアアン！！！！

突如、巨大な爆発音が鳴り、アイチとミサキは振り向いた。

「な、何ですか！？」

「爆発音……まさか、テロ！？」

そして、爆発の煙の中からおぞましい姿をした異形が現れる。

それは、凶悪な姿形の人型の化け物だったが、肉体の半分以上が機械に改造されたサイボーグでもあった。

「見つけたぞ……選ばれし先導者！！」

「生け捕りにしろ！　それが出来なければ殺せ！！」

異形は10体も存在し、目的はアイチとミサキだった。

「僕たちが狙い！？」

「逃げるよ、アイチ！」

ミサキはアイチの手を取って逃げようとする。

「逃がすか！　やれ、“ヘルビースト”！」

異形が叫ぶと、アイチとミサキの視線の先の地面が黒く変色して中からドロドロとした気色悪い液体を身に包んだ獣が現れた。

ヘルビーストは2体現れ、高速で駆けてアイチとミサキに襲いかかる。

「グルアアアア！」

「きゃっ!?!」

「ミサキさん!?!」

ミサキはヘルビーストに襲われ、腕を爪で引っかかれてそのまま後ろに倒れる。

アイチが慌ててミサキを受け止めるが、ミサキは苦痛の表情を浮かべていた。

「ミサキさん！ 大丈夫ですか!?!」

「あっ、がっ……」

体が震え苦しそうに呼吸していて、話すこともままならない。

「まさか、あのヘルビーストの爪に毒が!?!」

「その通り。ヘルビーストの持つ毒は死には至らないが、数時間は肉体に凄まじい苦痛を味わうことになる」

異形がヘルビーストを手懐けてゆっくり二人に近づく。

「さあ、ヴァンガードよ。我らに投降しろ」

「…………断る」

アイチは眼に怒りを込めながらミサキを片腕で抱きしめて、異形達を睨みつける。

「…………仕方ない。ヘルビースト！」

異形はヘルビーストを離し、アイチに襲わせる。

アイチはゆっくり眼を閉じ、空いている右手を握りしめて自分の胸へと持つて行く。

(お願い…………僕に…………力を…………！)

アイチの願いに反応し、体から青白い光の粒子が溢れる。

(ミサキさんを護るための力を僕に…………！)

その願いに応えるようにアイチの握った手に一枚のカードがあった。

アイチは目を開いてそのカードを高く掲げた。

「立ち上がれ、僕の分身！」

アイチは青白い巨大な光に包まれ、その光は天を貫く。

異形やヘルビースト達はその光に立ちすくんでしまう。

そして、アイチは光を払うように叫んだ。

「ライド！ ブラスター・ブレード！！」

光が払われ、中から現れたのは、ブラスター・ブレードの剣を右手ブレードに持ち、鎧を身に纏ったアイチだった。

左腕でミサキを抱き上げており、ミサキは苦痛で意識が失いそうな中、変身したアイチの姿に驚きを隠せない。

（アイチ……？）

対峙する異形達は目の前で起きた事態に焦りの表情を見せた。

「くっ！ 早くもヴァンガードの能力を目覚めさせてしまったか！
」

「だが、まだその能力を扱い切れてないはずだ！ 今の内に叩けば問題ない。ヘルビースト！！」

ヘルビーストは牙をギラリと見せて再びアイチに襲いかかる。

（イメージするんだ。ブラスター・ブレードみたいに！）

アイチは頭に浮かんだイメージを実現するかのように剣を巧みに片手で操り、襲ってきたヘルビースト達を切り裂いた。

「何だと！？」

異形達が驚き、アイチは剣を高く掲げて呟く。

「行くよ……勇気を力に変える剣、ブラスター・ブレード」

「よくやったぞ。これでヴァンガードを簡単に捕まえることが出来る」

異形は盾にした仲間を無造作に捨てる。

「くっ……!!」

アイチは歯を食いしばって無理矢理立ち上がり、剣を構え直す。

「今度こそお終いだ、ヴァンガード!!」

今度は異形達がアイチとミサキに襲いかかる。

「ロゼンジ・シールド!!」

突如、アイチとミサキの前に高密度の魔力で生成された巨大なひし形の防護シールドが現れ、異形達を弾いた。

「お待たせして申し訳ありません、ヴァンガードのお二方！ 私はオラクルシンクタンクのロゼンジ・メイガスです！」

アイチとミサキの前に現れたのは、ロゼンジ・メイガスだった。

その後ろに三人組のシスターがいた。

「私は戦闘教団の“バトルシスター もか”」

三人組のリーダーでミサキと同じように脚を見せる服装をしている
“もか”。

「私は“バトルシスター ここあ””。よろしくね」

服の下にナイフを常備している戦闘教団一のサディスティックな性格の“ここあ”。

「わ、わ、私は“バトルシスター しょこら”！」

気弱そうな姿とは裏腹に機関銃を軽々と持つ“しょこら”。

「オラクルシンクタンクの皆さん……来てくれたんですね……」

アイチは思わぬ援軍に安堵の笑みを浮かべる。

しかし、ロゼンジ・メイガスは首を横に振る。

「いいえ。私達だけではありませんよ。ロイヤルパラディンのヴァンガード様」

「えっ？」

アイチの後ろに複数の足音が近づき、アイチはゆっくり振り向いた。

そこにいた人物達にアイチは一瞬だけ目を疑ってしまった。

それは、アイチが今までずっと会いたがっていたロイヤルパラディンの騎士達だった。

「遅くなって申し訳ありません、マイヴァンガード。私はロイヤルパラディンの光剣、ブラスター・ブレードです」

騎士達の先頭にはアイチの象徴にして切り札的存在のブラスター・ブレードがいた。

「我は……“沈黙の騎士 ギャラティン”……」

ブラスター・ブレードの後ろには両目を布で隠した魂を感じ取る騎士“ギャラティン”。

「僕は“小さな賢者 マロン”です！」

後ろにはブラスター・ブレード達より二回り大きい巨人族の少年“マロン”。

「俺はロイヤルパラディンハイビースト部隊の“ういんがる”だ！」

そして、ブラスター・ブレードの相棒の戦闘犬“ういんがる”が前に出て来た。

「ブラスター・ブレード、みんな……」

アイチは嬉しさのあまり、目から涙が流れる。

ブラスター・ブレードは一つ頷くと、眼を細めて異形達を睨む。

「貴様等だな？ 我らのヴァンガードを狙う輩は。だが、もうこれ以上手出しはさせない！」

ブラスター・ブレードは剣を両手で構える。

そして、その身から溢れんばかりの氣に異形達に思わず後ろに下がってしまふ。

「ギアラティン、私と共に奴らを討つぞ！ ういんがるとマロンは後方支援とヴァンガード達を守れ！！！」

「承知……！！」

「おう！ やっちゃえ、ブラスター・ブレード！！！」

「はい！ お任せください！」

ブラスター・ブレードからの指示にギアラティンとマロンとういんがるは頷いて位置に着く。

ロゼンジ・メイガスもバトルシスター達に指示を出す。

「もか、ここあ、しょこら。ロイヤルパラディンの騎士様と協力して敵を倒してください」

「わかりました、ロゼンジ様」

「お任せあれ」

「は、はい!!」

バトルシスター達はブラスター・ブレードとギャラティンの隣に立つ。

すると、ロゼンジ・メイガスは手を伸ばしてミサキの傷に触れた。

「今、私の治癒魔法で傷と毒を癒やします」

ロゼンジ・メイガスは治癒魔法でミサキを苦しめる毒を消し、傷を癒やした。

「ミサキさん、よかった……」

苦しそうだったミサキの表情が穏やかになり、アイチも安心する。

そして、ブラスター・ブレードは剣を異形達に向ける。

「行くぞ!!」

ブラスター・ブレードが先陣を切って突撃し、ギャラティンやバトルシスター達が後に続く。

第4話 お酒と酒癖と本音（前書き）

取りあえず、これでストックは使い切りました。

今回は……タイトルの時点で不安が（笑）

第4話 お酒と酒癖と本音

それからブラスター・ブレード達は異形達を僅か数分で倒し、ユナイテッド・サンクチュアリに訪れた危機を退けた。

アイチとミサキはブラスター・ブレードやロゼンジ・メイガスがすぐに保護し、一体何が起きているのかを説明するため、ロイヤルパラディンの城に案内された。

城に設けられた一番大きな会議室に入ると、そこに驚くべき人物がいた。

「来たか。待っていたよ、マイヴァンガード」

「おお！ よかった、無事であつたか！」

ロイヤルパラディンとオラクルシンクタンクのトップ、騎士王 アルフレッドとCEO アマテラスである。

アルフレッドとアマテラスはアイチとミサキに近付いて握手する。

「ロイヤルパラディンの騎士王 アルフレッド。アルフレッドと呼んでくれ、マイヴァンガードよ」

「あつ、は、はい！ よろしく、アルフレッド！」

「アマテラスじゃ。我のことは好きに呼んでくれて構わぬぞ」

「う、うん！ 私は戸倉ミサキよ。ミサキって呼んでね」

お互いの挨拶を済ませると、アイチとミサキを席に座らせてアルフレッドとアマテラスが説明を始める。

「全ての事の始まりはオラクルシンクタンクの予言者達の予言から始まった」

「予言……?」

アルフレッドの出だしから既にアイチとミサキは疑問符を浮かべる。

「その予言はこうじゃ……」未来から悪しき者達現れる時、人間界から我らを導くの先導者が現れる。そして、世界の存亡をかけた大いなる戦が始まる』……とな」

アマテラスの言う予言にアイチとミサキはハツとする。

「もしかして、その先導者は……」

「私達……?」

アルフレッドとアマテラスは同時に頷く。

「しかし、あなた達二人だけではない」

「現在、お主ら以外に他で確認できたヴァンガードはかげろうとノヴァグラッパの二つじゃ」

「かげろうとノヴァグラッパと言えば……」

「あの二人しかいないよね……」

アイチとミサキの頭には当然チームメイトの二人が思い出される。

「アマテラス殿。取りあえず、これからどうするかの話し合いは明日にして今日は二人を休ませましょう」

「そうじゃな、騎士王殿。心の整理も必要じゃからな。ミサキ、一緒にオラクルシンクタンクに行くぞ！」

「えっ？ えっと、その……」

ずっとオラクルシンクタンクに行きたかったミサキだが、何故か渋った。

「ミサキさん、どうしたんですか？」

アイチがミサキの顔をのぞき込むと、ミサキはアイチから視線を反らした。

「な、何でもないよ！」

そのミサキの反応にアマテラスは瞬時に気づいた。

(ほほう……なるほどのお。ミサキはあの男に……)

アマテラスは思わず顔のニヤケが止まらず、着物の裾で口を隠してアルフレッドの方を見る。

「騎士王殿、すまぬが今日はそちらでミサキを預かってもらえぬか

？ 残念ながら今日は我が社はいつもより忙しいのでな」

「ええ、私達は構いません。責任を持ってあなた方のヴァンガードをお預かりします」

アマテラスの思惑を全く知らないアルフレッドは平然と答える。

「感謝するぞ、騎士王殿。と言うわけで、ミサキよ。ロゼンジを世話係として残すから今日はこっちで泊まってくれるかの？」

「えっ？ べ、別に構わないけど……」

そして、アマテラスはミサキに近付いて耳元で囁く。

「良いか、ミサキ。惚れた男を自分のモノにするコツは大胆じゃぞ。特にこの男は気が弱そうじゃから今夜に夜這いでもすれば一発オケーじゃー！」

アマテラスはグッドサインをしながらの爆弾発言に乙女心真っ盛りのミサキは顔が真っ赤になる。

「バ、バ、バカアアアアアアアッ！！」

「ゴブアッ！？」

ミサキは得意の蹴りでアマテラスを蹴り飛ばす。

「ミ、ミサキさああああああん！？」

「アマテラス殿おおおおおっ！？」

アイチとアルフレッドは突然の事態に目を見開いて驚愕する。

それもそうである。

大企業の社長が女子高生に蹴り飛ばされるなんて聞いたことも見たこともないのだから……。

その後、伸びているアマテラスはバトルシスター達に運ばれてオラクルシンクタンク本社に戻ったのだった。

そして、アイチとアルフレッドはミサキとアマテラスの間に何があったのか聞くのが怖かった。

聞いたらアマテラス同様に蹴り飛ばされると思ったからだ。

その夜、ロイヤルパラディンの城でヴァンガードのアイチとミサキの歓迎会が行われた。

広い食堂に多種多様にして個性豊かなロイヤルパラディンの騎士や剣士達、更には沢山のハイビースト達も参加して歓迎会は大賑わいだった。

歓迎会の主役のアイチはこの場にいるロイヤルパラディン全員に挨拶して回った。

今までも……そして、これからも共に戦っていくロイヤルパラディンの仲間達と絆を深めていきたいからだ。

アイチは挨拶を回り終えると、ジュースを持って一旦食堂を出て中庭に向かった。

既に日は落ち、ユナイテッド・サンクチュアリの夜空に星が広がっていた。

(本当に来たんだな、惑星クレイに……)

アイチはまだ夢の中にいるような気分だった。

「どうなされました？ ヴァンガードよ」

「あ、ブラスター・ブレード」

そこにアイチを探しにブラスター・ブレードが訪れた。

「あはは。ちょっと落ち着きたい気分だったからね」

「申し訳ありません。我が騎士団の者達はみんな、宴会が好物みたいなものですから」

「そうなんですか？」

「ええ。騎士王は特にお祭り騒ぎが好きで、何か良いことがある度にこうしてみんなで宴会をやるのですよ」

ブラスター・ブレードは自分の盟友の困った一面に苦笑しながらアイチの隣に立つ。

「へえー、何か意外ですね」

「幻滅なされましたか？ 誇り高き聖騎士団の実態をご覧になされて……」

「そんなことはありません！ 寧ろ、前よりもっとロイヤルパラディンのみんなが大好きになりました！！」

アイチは自分が本当にロイヤルパラディンが好きだという事をブラスター・ブレードに伝えるために満面の笑みを見せた。

「ありがとうございます。マイヴァンガード」

アイチの気持ちが伝わったブラスター・ブレードは微笑んだ。

すると、アイチは少し不機嫌な表情を見せた。

「あの、ブラスター・ブレード。そのヴァンガードって呼び方、止めてくれるかな……？」

「えっ？」

「さっき、挨拶する時にみんなにも言ったんだけど、僕のことをアイチって名前で呼んでくれるかな？ それから、敬語じゃなくて自

分の話しやすい言葉で喋ってくれないかな？」

「マイヴァンガード……」

「お願い、ブラスター・ブレード」

アイチは手を合わせてブラスター・ブレードに頼み込む。

「わかりました。では……ごほん！」

ブラスター・ブレードは咳払いをして敬語を止めて自分の言いやすい言語にする。

「改めて……これからよろしく頼む、アイチ」

「はい！ ブラスター・ブレード！」

アイチとブラスター・ブレードは握手して絆を深めた。

すると……。

「アイチ様〜！ ブラスター・ブレード様〜！」

ロゼンジ・メイガスがテテテと走ってきた。

「どうしたんですか？」

「た、大変です！ ミサキ様が大暴走しています……！」

「……はい……？」

アイチとブラスター・ブレードはその意味を理解出来ていなかった。取りあえず二人はロゼンジ・メイガスの案内で食堂に戻った。

そして、そこには信じられない光景が広がっていた。

「ふははははあ！ こんなもの！？ ユナイテッド・サンクチュアリを守護する聖騎士は！！！」

ワインボトルを片手に次々と騎士達を蹴り倒すミサキの姿があった。ミサキに蹴り倒されている騎士達の中にはロイヤルパラディンで名のある聖騎士が何人も含まれていた。

そして、一人、また一人とミサキに蹴り飛ばされて倒れていく騎士達の哀れすぎる姿……。

「バ、バカな……ロイヤルパラディンの騎士達が……」

「ロゼンジ・メイガスさん。一体何があったんですか……？」

「実は、騎士の皆様がミサキ様にアルコールの弱い果実酒を勧めたんです。アルコールが弱いなら大丈夫だろうとミサキ様も思い、一口飲んだら……」

後はもう聞く必要はなかった。

アイチ達はミサキの酒癖の悪さに呆然とするしかなかった。

しかし、さすがにこのままにしておくわけには行かないので、アイチが止めに行く。

「ミ、ミサキさん……」

「んう？ あ、アイチだあ！」

ミサキはアイチを見ると普段絶対に見られないような無垢な笑みを浮かべて足を下ろした。

「ねえ、アイチ！ このおしゃけおいしいよ！ 一緒にのもつよお！」

遂に呂律も可笑しくなりながらアイチに近づく。

「え、えっと……まだ僕は中学生ですから遠慮します……」

「むう！ 私のお酒が飲めないのかあ〜！」

「と、とにかく！ ミサキさんはもう飲んじゃダメです！」

アイチはミサキからワインボトルを奪い取り、そのままブラスター・

ブレードに投げ渡す。

「ああっ！ 何しゆるの、私のおしゃけえ〜！」

「ミサキさん、もう寝ましよう。部屋に連れて行きますから。ねっ
」？」

「むう〜〜っ！〜！」

ミサキは頬を膨らませながらアイチに連れて行かれた。

そして、ブラスター・ブレードとロゼンジ・メイガスは同時にため息を付いた。

「何とか収まったか……」

「ミサキ様にお酒を飲ませない方がよろしいですね。被害が尋常ではありません……」

「では、気を取り直して静かな場所でロゼンジ殿も一杯如何ですか？ 流石にここだと少々騒がしいですから」

ブラスター・ブレードはミサキが持っていた果実酒を見せる。

「はい、喜んで。ブラスター・ブレード様」

ロゼンジ・メイガスは若干頬を染めながら笑顔でその誘いを受けた。

一方、ミサキに用意された一室でアイチは疲れ果てていた。

「つ、疲れた……」

酔ったミサキを食堂から部屋まで連れて行くのに一苦労だった。

何故なら、突然暴れたり勝手にどこかに行こうとしたりとアイチを困らせた。

そして、やっとの思いで部屋に到着してベッドに眠らせたのだ。

「それじゃあ、お休みなさい。ミサキさん」

アイチは部屋から出ようとする。

しかし、

ガシッ！

「え？」

「行かないで……」

アイチはミサキに腕を掴まれて動けなくなる。

「ミサキさん……?」

「行かないで!」

「うわぁっ!?!」

そのままミサキに腕を引っ張られてアイチはベッドに引きずり込まれた。

そして、ミサキは両腕でしっかりとアイチの体をホールドして逃がさないようにする。

「ミサキさん、どうしたんですか! ……ミサキさん?」

アイチは暗くてよく見えなかったが、ミサキの目から小さく光るモノが流れるのが見えた。

「私、怖いんだ……」

「怖い……?」

「最初はユナイテッド・サンクチュアリに来て遊び気分だったけど、私達を狙ってあんな怪物達が襲ってきた……アイチやみんなのお陰で助かったけど、これからどうなるんだろうって、不安になるんだよ……」

強がって今さっきまで一切の弱い心を見せなかったミサキだが、ミサキも一人の少女……恐怖や不安は当然あるのだ。

「ミサキさん……」

アイチは無意識に手を伸ばしてミサキを自分の胸に抱き寄せた。

「アイチ……？」

「大丈夫です。ミサキさんは一人じゃありません。僕やロイヤルパ
ラディンとオラクルシンクタンクの皆さんがいます。必ず、僕がミ
サキさんを護りますから……」

「アイチ……ありがとう……」

ミサキの心から恐怖と不安が少し取り除かれ、そのままゆっくり眼
を閉じて意識を手放す。

そして、アイチはミサキを抱きしめる力を少しだけ強くし、自分も
眼を閉じて意識を手放した。

第5話 同盟作戦、開始！（前書き）

もうマイチとミサキさんがいちゃいちゃしすぎて申し訳ありません
（笑）

第5話 同盟作戦、開始！

翌朝、太陽の光が窓から差し込み、ミサキは目を覚ました。

「んう……朝……？」

まぶたを何回も開け閉めして、意識を覚醒させる。

すると……。

「アイチ……？」

自分の目の前には可愛らしい寝顔をしたアイチが眠っていた。

ミサキは叫びそうになったが、落ち着いて昨夜のことを思い出す。

（えっと……確か昨日は歓迎会でお酒をちよつと飲んで、それから……）

断片的に記憶が残っているため、何とか昨日の出来事を思い出す。

（アイチに迷惑をかけちゃったかな……よし）

ミサキは手で髪を後ろに持って行き、アイチに顔を近づけた。

チュツ。

ミサキの唇はアイチの頬に重なり、小さな音が部屋に響いた。

そして、アイチの頬から唇を離し、自分らしくない行動にミサキは顔を真っ赤にする。

「はぁ……顔洗お……」

ミサキはため息をついて、ベッドから降りよつとする。

「あれ……ミサキさん？」

「っ!？」

アイチも目を覚まし、ミサキは危うくベッドから落ちそうになった。

「ア、ア、アイチ!? お、おはよう!」

「あ、はい。おはようございます。眠れましたか？」

「う、うん。ま、まあ、アイチのお陰でね。それじゃあ、支度をしようか?」

「わかりました。じゃあ、僕は自分の部屋に戻りますね」

「わかった、後でね」

「はい」

アイチはミサキの部屋から退出する。

廊下を歩いていると、アイチは手で頬に触れる。

(ミサキさんの唇、柔らかかったな……)

実はミサキがキスしている時にアイチは半分起きていて、キスの感触を感じており、未だにほのかに残っている。

頬だが、初めての異性のキスに朝の間ずっとドキドキしているアイチだった。

その後、支度をして合流したアイチとミサキは食堂で朝食をとった。

数十人の騎士がミサキを見てビクビクして怖がっていたのは気のせいではなかった。

朝食を食べ終わると、二人はアルフレッドに呼ばれて執務室に向かった。

「やあ、おはよう。二人とも」

「おはようございます、アルフレッド」

「おはようー。それで、何のようなの？」

「うむ。これからどうすればいいのか話し合おうと思ってな」

アルフレッドはソファーにアイチとミサキを座らせ、カップにコーヒーを注いで二人に渡す。

「私達は未だに敵の正体を知らない。唯一分かっているのは、人間界から惑星クレイに召喚された君たちヴァンガードを貪欲に欲しがっていることだ」

「もしかして、權君やカムイ君も……」

「ああ。情報によると奴らに襲われたが、かげろつとノヴァグラップラーの戦士達が追いついたようだ」

「よかった……」

「とりあえず二人は無事みたいね……」

アイチとミサキは仲間が無事だと知ってとりあえず一安心する。

そして、アイチはアルフレッドにある提案をする。

「アルフレッド、僕に一つ考えがあります」

「考え？」

「はい。かげろつやノヴァグラップラーと同盟を組んだらどうですか？」

「なっ……!?!?」

アイチの提案にアルフレッドは驚愕して言葉を失う。

「予言で確かこう言っていましたよね？ 世界の存亡をかけた大いなる戦が始まるって……だったら僕達の敵は共通です。なら、同盟を組んで一緒に戦うのはどうですか？」

アイチの考えは道理にかなっているがアルフレッドは難しい表情を浮かべる。

「アイチ、君の考えは分かるが……かげろつとノヴァグラップラーとの同盟は非常に難しいぞ」

「だから、僕達ヴァンガードがいるんですよ！ 權君とカムイ君と協力して僕達がそれぞれの組織を繋ぐ架け橋になるんです！」

「うっ……」

アイチの熱意に押されるアルフレッド。

「ふおふおふお！ なかなか勇気と行動力の少年ではないか、騎士王よ！」

そこに酒と杯を持った老人が外から窓へ侵入する。

「バロン殿！」

老人の名は“大いなる賢者 バロン”。

神々の時代から世界の全てを見続けてきた最古参の巨人族の賢者で

ある。

「騎士王よ。この子達の秘めたる可能性に賭けてみたらどうかの？」

「バロン殿、しかし……」

バロンは部屋に入り、片目を開いてアイチとミサキをじっくりと見る。

「ほほう、なかなか良い眼をした子じやの。まるで、若き日の騎士王達を思い出すのお」

自慢の白鬚に触れながらバロンは懐かしむように呟く。

そして、アルフレッドを見つめて自分の意見を言う。

「騎士王。わしは長きに渡りこの世界を見てきたが一度も世界が一つになることはなかった。今こそ、この幼き子達の力を借りて世界を一つにする時じゃぞ！」

「バロン殿……わかりました。私は彼らの可能性を信じて賭けてみますー！」

バロンに説得され、アルフレッドは決意した。

「ふおふおふお！ そうかそうか。さて、それではワシはそろそろ退散するかの。早くしないとあのやかましいのが」

「失礼します！ こちらに賢者バロンが ああっ！ 見つけましたよ、お師匠様ー！」

執務室に入ってきたのは、自称バロンの一番弟子であるマロンである。

「げっ！ もう見つかってしもうたか……では、さらばじゃ、騎士王！ とおうー！」

バロンは入ってきたのは窓から飛び降りてマロンから逃走する。

「あつ！ お待ちください、お師匠様〜！」

マロンはバロンを追い掛けて窓から飛び降りる。

「ええい、わしはお前を弟子と認めておらんわ！ いい加減、誰か別の師を見つけて！」

「そんなことを言わないでくださいよ、お師匠様〜！」

バロンとマロンの巨人族師弟賢者（？）追いかけてはまだまだ続きそうだった。

嵐のように訪れて去った二人を見送ったアイチ達は取りあえず話し合いを続ける。

「では、まずはかげろうとノヴァグラップラで話しやすい方から攻めていこう」

「だったら、カムイのいるノヴァグラップラから先が良いんじゃない？ アイチを兄として慕っているんだし」

ミサキの提案にアイチは頷く。

「そうですね。カムイ君なら話をすぐに分かってくれて協力してくれそうですから」

「決まりだな。すぐにノヴァグラップラーの本拠地である“スター・ゲート”までの船を用意する。二人はブラスター・ブレードとロゼンジ・メイガス殿に今の事を話してくれ」

「はい！」

アイチとミサキは執務室から出ると、すぐにブラスター・ブレードとロゼンジ・メイガスに今の話を伝えた。

「そうか。騎士王が遂に決断したか……よし、今すぐに行動可能な者達を集める！」

「私もアマテラス様に連絡してバトルシスターを呼んでもらいます！」

こうして、未知なる敵に対抗するために今まで協力することのなかった巨大組織との同盟作戦が始まった。

ロイヤルパラディンからはブラスター・ブレード、沈黙の騎士ギヤラティン、ういんがる。

更に、ピンク色のハイビーストである“ふろろがる”が護衛に就く。

オラクルシンクタンクからはロゼンジ・メイガス、バトルシスター

もか、バトルシスター　ここあ、バトルシスター　しよこら。

そして、ミサキと最も思い出のあるユニットが護衛に就いた。

「ツクヨミ……」

それは、小さな可愛らしい少女の姿をした女神“三日月の女神”
ツクヨミ”である。

「ミサキ〜」

ツクヨミはテテテと走り出してミサキに抱きついた。

「会いたかったよ、ミサキ〜」

「私も会いたかったわ、ツクヨミ」

「これからは私がミサキを守るからね！ ミサキに手を出す奴がい
たらすぐに一拍子を呼んで最終形態になって倒すんだから！」

「頼もしいわ。ありがとう、ツクヨミ」

ミサキはツクヨミを優しく抱きしめる。

ツクヨミはミサキの亡くなった両親が生前残したデッキの切り札で
あり、ミサキにとっては両親との大切な思い出そのものである。

そのツクヨミと出会えてミサキは本当に嬉しいのだ。

（良かったですね、ミサキさん）

アイチは微笑ましい光景を見守る。

そして、護衛のメンバーが揃ったところでスター・ゲートまでの移動手段をアルフレッドが見せる。

「これがロイヤルパラディンの技術開発部が造り上げた飛行機。その名も……“ペンドラゴン”だ！」

地面が真っ二つに割れ、中から巨大な飛行機が出現した。

最新鋭の魔法と科学によって造られたロイヤルパラディンの技術開発部懇親の力作である。

アイチ達が関心と驚きの表情をすると、アルフレッドはアイチに何かを渡す。

それは綺麗な輝きを放つサファイアの指輪だった。

「御守りです。ある魔法が込められているので困った時に役に立ちます」

「ありがとうございます、アルフレッド」

アイチは魔法の指輪を右手の人差し指に填める。

「武運を祈っています」

アイチ達はアルフレッドと別れてペンドラゴンに乗り込む。

それぞれが席に座ると、自動的にエンジンが起動して動き出す。

ペンドラゴンは目的地を設定すれば自動で向かう人工知能が搭載されているのだ。

ブラスター・ブレードが目的地を設定する。

「目的地は最南の大陸、スター・ゲート」

目的地の座標が設定され、ペンドラゴンは上昇してそのままスター・ゲートまで出発し、ユナイテッド・サンクチュアリを離れる。

そして、ペンドラゴンが見えなくなるまで見送っていたアルフレッドはある言葉を呟く。

「そう言えば、見送ると言っていたアマテラス殿はどこに行かれたのだろうか……?」

アルフレッドは疑問を持ちながら執務室に戻る。

その答えがペンドラゴンの中にあるとは知らずに……。

第5話 同盟作戦、開始！（後書き）

と言うわけで、次回からスター・ゲートに向かい、カムイ君と再会します。

かげろうのドラゴン・エンパイヤはその後になりますので、權君はまだ出ません。

第6話 最南の皇帝（前書き）

今回から題してスター・ゲート編です。

遂にカムイ君の登場です！

第6話 最南の皇帝

アイチ達はカムイの再会とノヴァグラップラーの同盟を組むために惑星クレイ最南の大陸、スター・ゲートに訪れた。

ペンドラゴンをスター・ゲートにある森に隠すと、アイチ達はノヴァグラップラーのスタジオがあるスター・ゲートの中心都市に向かった。

「わあ、ここがスター・ゲート」

「凄い、まるでSF映画の世界ね」

アイチとミサキはユニテッド・サンクチュアリとはまた違ったSF映画さながらの近未来都市に驚きと感動を得ていた。

ブラスター・ブレード達も初めて訪れる都市で同じ心境だった。

「なかなか面白い都市じゃの〜」

「……………えっ?」

後ろから聞き慣れた声が聞こえ、アイチ達が振り向くと、そこには動きやすい和服を見に包んだアマテラスが珍しそうに周りを見ていた。

「アマテラス様!? どうしてあなた様がここにいるんですか!？」

ロゼンジ・メイガスが非常に焦って困った表情でアマテラスに問い

つめる。

「我は生まれてこの方、ユナイテッド・サンクチュアリから出たことがないのじゃ。良い機会じゃから、ミサキ達の護衛を含めて見聞を広めておこうと思つての。こつそりペンドラゴンに入って隠れていたのじゃ」

アマテラスは扇子を広げて笑みを浮かべた。

そんなアマテラスの態度にロゼンジ・メイガスは沸々と何かがこみ上げてくる。

「この……大馬鹿社長……！」

バコーン！

ロゼンジ・メイガスは所持している杖でアマテラスの頭を思いっきり叩いた。

「い、痛い！ なっ、何をするのじゃ、ロゼンジよ!？」

アマテラスは叩かれた頭を手で押さえてロゼンジ・メイガスを睨みつけるが、逆にロゼンジ・メイガスが鋭い眼孔で睨み返した。

「アマテラス様！ あなたは自分のお立場をわかっておられるのですか!？ あなたはオラクルシンクタンクの社長なのですよ! その社長がこんな自分勝手なことをして許されると思つのですか!？ 今頃社内ではあなたがいなくなつて大騒ぎですよ!！」

ロゼンジ・メイガスはアマテラスの勝手な行動に激怒して説教をし

始めた。

「うっ、だって、だって……」

「だってじゃありません！ だいたいあなたは自分が社長だと自覚して」

「はいはい、そこでストップよ」

ミサキがアマテラスとロゼンジ・メイガスの間に入る。

「ミサキ様……」

「ロゼンジ、気持ちは分かるけどもう良いんじゃない？」

「ですが……」

「ロゼンジ殿、それ以上アマテラス殿を怒られては可哀想です。その辺にしておいたら如何ですか？」

ブラスター・ブレードも加わり、ロゼンジ・メイガスはため息をついて遂に折れる。

「はあ……わかりました。アマテラス様、ヴァンガード様達の護衛として同行するのはわかりましたが、すぐに本社に連絡してください。まずはそれからです」

「う、うむ。わ、わかったのじゃ……」

アマテラスは目尻に涙を浮かべながらコクコクと頷いた。

まるで、母親に叱られた娘みたいな光景だった。

(これじゃあ、どっちが上か分からないじゃないの……しっかりしなさいね、アマテラス)

オラクルシンクタンクの神の一柱であるツクヨミは苦笑を浮かべながら、やれやれと首を横に小さく振る。

それからすぐにアマテラスはオラクルシンクタンク本社に連絡して社員に無事だという事を伝えて、ノヴァグラップラーのスタジオムへと向かう。

アマテラスは惑星クレイの限られた人しか使えないブラックカードを取り出してスタジオムの高級チケットを購入した。

流星は大企業の社長だけあって、お金は余るほど所持しているのだった。

「さて、まずはカムイ君を探さないですかね」

「そうだけど……どうやって?」

「それなら私に考えがあるわ!」

「ふろろがる?」

ふろろがるが何か考えがあるらしく、全員の視線が向けられる。

「アイチ達ヴァンガードは私達惑星クレイの住人とは全く違う匂い

を体から出しているのよ。それと同じ匂いを私と、ういんがるが探せばきつと見つかるわ!」

「ふーん、上手くいくのかよ?」

ういんがるが言つと、ふるつがるが声を強めて言つ。

「やるしかないでしょ! あんたも誇り高きロイヤルパラディンのハイビーストなら協力しなさい!」

「わ、わかったよ! それじゃあ……あつ、見つかった」

「早つ!?!?!?」

意外にもあつさりカムイの匂いを嗅ぎ付けた。

「クンクン。本当ね……皆さん、付いて来てください」

ふるつがるも匂いを嗅ぎ付け、ういんがると一緒にその匂いを追つ。

匂いを追つとそこはノヴァグラップラーの上級戦士達の部屋が集うエリアだった。

ノヴァグラップラーにとっては重要なエリアなので、当然警備員に止められる。

「ここから先は関係者以外、立ち入り禁止だ!」

「お客様、スタジアムにお戻り下さい!」

警備員はアイチ達を追い返そうとするが、ブラスター・ブレードとアマテラスが前に出る。

「失礼、申し訳ないがノヴァグラップラーの皇帝殿に伝えてはくれないか？」

「ロイヤルパラディンとオラクルシンクタンクのヴァンガードがノヴァグラップラーのヴァンガードに会いに来た、とな」

「そう簡単にカイザー様に伝えるなど……ヴァンガード？ はっ！
？ 待て、あなた方はまさか！？」

「ユナイテッド・サンクチュアリの英雄ブラスター・ブレード殿とオラクルシンクタンクの社長アマテラス殿！？ しょ、少々お待ちください！」

二人がユナイテッド・サンクチュアリの大物人物だと知ると、警備員二人は急いで連絡を取った。

数分後、奥から小さな影が走ってくる。

「アイチお兄さん！ ミサキさん！！！」

その小さく元気な姿はアイチやミサキと同じく、惑星クレイに選ばれたノヴァグラップラーのヴァンガード、カムイである。

「カムイ君！」

「カムイ！」

「良かった、二人は無事で！」

「カムイ君も無事で良かったね」

「再会早々悪いけど、あなたに協力してもらいたいことがあるんだけど、良いかな？」

アイチとミサキは同盟の話カムイにすると、カムイは親指を立ててグッドサインをみせる。

「オツケーです！ そう言うことなら喜んで俺様も協力します！！」

「ありがとう、カムイ君」

「それじゃあ、ノヴァグラップラーの皇帝に会わせてますね。付いてきてください」

カムイの案内で廊下の奥を進むと、数々のノヴァグラップラーの戦士の姿が彫られた巨大な扉があった。

扉を開くと、そこには一人のバトロイドがいた。

「カムイよ。客人の出迎え、ご苦労である」

真紅の鎧を身に纏う六本腕の鬼神にしてノヴァグラップラーの皇帝“アシユラ・カイザー”である。

「お初にお目にかかれる客人殿。俺様はアシユラ・カイザー。このノヴァグラップラーの頂点に君臨する皇帝だ」

「アシユラ・カイザーよ。最近の経済状況はどうじゃ？ まあ、聞かなくてもわかるかの」

アマテラスが不敵な笑みを浮かべると、アシユラ・カイザーはケラケラと笑い飛ばす。

「あなたのお陰で毎日客が溢れかえって売上上々だぞ、アマテラス。だが、まさかあなたが来るとは想定外だったかな」

「社長として見聞を広める為じゃ」

「なるほど。それで、今日は何のようだ？ 見たところ、ロイヤルパラディンの名のある騎士を二人も連れてきているとなると、何か重要な話らしいな」

アシユラ・カイザーはブラスター・ブレードとギヤラティンを横目で睨みながら言う。

「まあ、お主にちょっとした話があるだけじゃ。悪い話ではないぞ」

「ふむ。お前がそう言うなら聞いてやるぞ」

アシユラ・カイザーは偉そうな態度を取るが、悪人ではないので、素直に同盟の話聞く。

「なるほど、同盟か……確かに、カムイに襲ってきた敵は俺が今までに闘ったことのない奴だった。しかも、そっちの予言では大いなる戦が始まると出ている。予測しづらいこれからのことを悪くはない話だな」

アシュラ・カイザーはうんうんと頷き、同盟に同意的な態度を見せる。

だが、アシュラ・カイザーはブラスター・ブレードとギヤラティンを見ると、ニヤリと少々不気味な笑みを浮かべながら立ち上がる。

そして、手を広げると部屋の壁に掛けられた六つの武器がアシュラ・カイザーの元に集まった。

「ブルアアアアアアアアアアアッ！！！！」

アシュラ・カイザーは全力でブラスター・ブレードとギヤラティンに切りかかる。

「ギヤラティン！！」

「はっ！！」

ブラスター・ブレードとギヤラティンは鞘から剣を抜き、アシュラ・カイザーの攻撃を防ぐ。

「ロゼンジ！！」

「ロゼンジ・シールド！！」

アマテラスが叫ぶと、ロゼンジ・メイガスが防護シールドを展開する。

「早く、私の後ろに！！」

ミサキは防護シールドに向かうが、アイチとカムイはその場で立ち止まってアシユラ・カイザーに向けて抗議する。

「おい！ アシユラ・カイザー！ てめえ、何でいきなりブラスタ
ー・ブレード達に攻撃するんだ！！」

「そうですね！ あなたは同盟に同意するつもりは無いんですか！
？」

「ふん！ 俺様はロイヤルパラディンに同盟するだけの力を確かめ
たいだけだ！ 弱ければ同盟の意味が全くないからな！」

「そう言うことか……ならば！」

「我々の力を……証明するのみ！」

ブラスター・ブレードとギャラティンは全身に力を込めてアシユラ・
カイザーの武器を押し返す。

「グオツ！？」

「ピンポイントバースト！」

ブラスター・ブレードの剣が左右に展開され、一筋の光線が射出さ
れる。

光線はアシユラ・カイザーの短剣に直撃すると、粉々に粉碎する。

「やるな！ ユナイテッド・サンクチュアリの英雄！！ だが、ま
だ俺様はこの程度では敗れん。行くぞ！」

「ういんがる、ふるうがる、後方支援だ！」
フースト

「おうよ！ グルアアアアアッ！！」

「わかりました！ ワオオオオオン！！」

ういんがるとふるうがるは雄叫びを上げると、ブラスター・ブレードとギヤラティンに力を支援する。

アシユラ・カイザーは五つの武器にエネルギーをチャージして振り上げる。

「ならば、俺様の最強技でケリをつけてやる！ 百撃必殺！！」

ノヴァグラップラーの皇帝アシユラ・カイザーの必殺技が発動しようとしたその時だった。

キュイイイイーン！！！！

アイチの指輪が強烈な輝きを放ち、床に魔法の文字と科学の式が融合した陣が配置された。

「アルフレッドから貰った指輪が！？」

そして、陣は大きく広がると、中から何かが現れて飛び出した。

「グレートソードアタック！！！！」

斬撃が飛び、アシユラ・カイザーに直撃する。

「オバアアアアアア！？」

斬撃をまともに喰らい、ぶっ飛ばされるように壁に激突する。

「失礼。私の信頼する騎士達が危機に陥り、つい出てきて剣を振るってしまった」

「アルフレッド！？」

陣から現れたのはユナイテッド・サンクチュアリにいるはずのアルフレッドだった。

そして、アルフレッドが跨っているのは、燃えるような獅子のたてがみを持つ青い毛の名馬にして幻獣と呼ばれる騎士王の愛馬“ライオンメイン・スタリオン”。

「グオオオオ……なるほど、貴様が歴代最強と謡われたロイヤルパラディンの騎士王か……」

壁に激突されたアシユラ・カイザーは不意打ちを喰らいながらも立ち上がった。

「お初にお目にかかれます。ノヴァグラップラーの皇帝アシユラ・カイザー殿。今までの話は全てアイチの指輪を通して全て聞いていました。そこで、私から一つ提案があります」

「提案だと……？ 言ってみる！」

アルフレッドはにっこりと微笑む。

「はい。ノヴァグラップラーのバトルシステムの一つ、タッグバトルでこの話の決着をつけませんか？」

タッグバトル。

それは、二人一組でタッグを組んで闘う数あるノヴァグラップラーのバトルシステムの一つである。

「タッグバトル？ 貴様は誰と組むのだ？」

「はい。私のパートナーは……私の最も信頼する最高の騎士、ブラスター・ブレードです！」

「えっ！？ ア、アルフレッド！？」

ブラスター・ブレードは敬語を忘れて素に戻って驚いた。

そして数日後、ノヴァグラップラーの歴史に残る素晴らしい闘いが行われる事になるのだった……。

第6話 最南の皇帝（後書き）

次回、アルフレッド&ブラスター・ブレードのタッグでアシュラ・カイザーに挑みます！

ちなみに、アシュラ・カイザーのパートナーは……お楽しみにしてください！

第7話 聖騎士団VS格闘技集団(前書き)

やっと投稿です。

少しずつこの小説のカップリングが分かってきます(笑)

第7話 聖騎士団VS格闘技集団

アルフレッドの提案でブラスター・ブレードとタッグを組んで、タッグバトルでノヴァグラップラーの皇帝アシユラ・カイザーに挑むことになった。

アルフレッド達が勝ったら、ロイヤルパラディンとノヴァグラップラーが同盟を組むことをアシユラ・カイザーは了承し、二日後にスタジアムで勝負することになった。

その夜、アイチ達はアマテラスが用意したスター・ゲートーの高級ホテルに宿泊した。

ホテルの一室でパーティーを行い、ワイワイガヤガヤと楽しむ中、ブラスター・ブレードは一人でテラスに向かい、スター・ゲートの夜景を眺めていた。

「どうした？ 辛気臭い顔なんかして」

そこに酒とグラスを持ってきたアルフレッドが訪ねる。

「……誰の所為だと思っている」

「はははっ。まあ、怒るなよ」

アルフレッドはブラスター・ブレードにグラスを渡して酒を注ぐ。

「アイチに渡した指輪はな、ロイヤルパラディンの城を繋ぐ転移魔法と通信魔法の術式が込められていてな。魔法水晶からお前とギヤ

ラティンがピンチになるのを見て居ても立ってもいられなかつて、すぐにライオンメインを呼んで『俺、参上!』みたいな感じでな登場してみたわけだ」

「ったく……相変わらずカッコイイ登場をするよな、お前は」

ブラスター・ブレードはアルフレッドから酒を取って、グラスに注いだ。

そして、二人は乾杯でグラスを軽くぶつけて酒を飲んだ。

今、この場にいるのは騎士王と騎士ではなく、お互いに信頼する親友同士の二人だった。

「しかし、アルフレッド。本当にタッグバトルのパートナーは俺で良かったのか？」

「何を今更？ 俺のパートナーは昔からお前だけだよ。そして、これからもな」

「だが……相手はノヴァグラップラー最強の皇帝だぞ？ アシユラ・カイザーのパートナーも絶対に強敵だ。それを考えると」

「とりゃあ」

「パン！」

「痛っ!?!」

アルフレッドはブラスター・ブレードのでこにデコピンをする。

「何言っただよ。俺達は小さい頃から兄弟同然に育ってきた親友だろ？」

「アルフレッド……」

「それに、昔から一緒に戦ってきた俺達のコンビネーションは最強だ。違うか？ 相棒」

アルフレッドは全ての不安を風払うかのような安心できる笑みを浮かべ、拳を向ける。

その笑みにブラスター・ブレードの不安が消え、アルフレッドの拳に自分の拳をぶつける。

そして、そのままハイタッチをして固い握手をする。

「わかった。必ず勝とうぜ、相棒」

「ああ。俺の背中をお前に任せるぜ、相棒」

ブラスター・ブレードとアルフレッドは互いに明後日の戦いへの決意を固める。

入れ替わりの形でブラスター・ブレードは部屋に戻り、アルフレッドはそのままテラスにいる。

「ふむふむ。話は聞かせて貰ったぞ、騎士王殿」

一体どこから現れたのか、グラスを持ったアマテラスがいつの間

かアルフレッドの隣にいた。

「あはは、アマテラス殿に聞かれてしまいましたか。それにしても……まさか、あなたがペンドラゴンに乗っているとは驚きでしたよ」

「まあ、気にするでないぞ。それよりも騎士王殿」

「はい？ 何でしょうか？」

「必ずアシュラ・カイザーに勝つのじゃぞ。あのバトルバカを叩きのめすのじゃ！」

「ぶっ！ー！」

アシュラ・カイザーを『バトルバカ』と称したアマテラスにアルフレッドは思わず吹いた。

「あはは……わかりました、アマテラス殿。我が剣にかけて、必ず勝利します」

「うむ！ ところで……一つ良いかな？」

「何ですか？」

「そろそろお互い敬語とか止めないか？ 何だかんだで、我々の付き合いはかなり長いからの」

今まで敬語で話していた二人だったが、アマテラスが敬語を止めるように提案する。

もっとも、アマテラスはノーブルでかなりの長寿のため、口調は今まで通りだが。

「よろしいのですか？」

「うむ、許すぞ」

「では……アマテラス……で、良いかな？」

アルフレッドが敬語を止めて話しやすい言葉にすると、アマテラスは満足した表情で頷く。

「うむ。良いぞ、アルフレッド。それから……明後日のタッグバトル、頑張るのじゃぞ」

「ああ。任せてくれ」

二人はお互いのグラスに酒を注いで乾杯をする。

一方、アイチとミサキは別室で少々口論をしていた。

「アイチ、考え直して。幾ら何でも危険だよ！」

「ミサキさん……でも僕はブラスター・ブレードとアルフレッドと一緒に闘いたいです！」

さて、何故二人が口論をしているかということ、それはタッグバトルに関係していた。

アシュラ・カイザーが話し合いの時にある提案をしていた。

それは、ロイヤルパラディンとノヴァグランプラーのヴァンガードがタッグバトルの際に対戦者のどちらかに憑依して闘うものだった。アイチとミサキはついさっきまで知らなかったが、惑星クレイに選ばれたヴァンガード達は二つの能力を得ている。

一つ目は、自分の所有するデッキのクランのユニットの誰かに変身出来ること。

アイチがミサキを護るときにブラスター・ブレードの姿に変身したのもこの能力である。

変身したユニットの能力を100%そのまま使用することが出来るが、逆に弱点としては慣れてないと体力と精神力を大幅に消費してしまう。

二つ目は、対象のユニットに自らが憑依してそのユニットの持つ力を何倍にも増幅させ、秘められた力を覚醒させることができる。

アシュラ・カイザーはこの二つ目の能力をアイチとカムイが使用し、ロイヤルパラディンとノヴァグランプラーのそれぞれのユニットのどちらかに憑依して共に闘わせようとしているのだ。

カムイは是非闘いたいと自らが志願し、アイチもそれに賛同して志願しようとしたが、ミサキに現在止められている。

「何もアイチも一緒に闘うことは無いだろ!? それに、ノヴァグ
ラップラーのバトルはかなり危ないって聞いたことがある……もし、
アイチが大怪我をしたら……」

当たり前であるが、これはカードゲームのヴァンガードファイトで
はなく、正真正銘本物の闘いである。

当然、怪我をすることも十分に有り得るため、ミサキは必死でアイ
チを止める。

「アイチもカムイもアシュラ・カイザーに乗せられているだけだ!
いい加減目を覚まして!」

「……ミサキさん」

アイチは右手をミサキの頬に触れさせる。

ミサキはドキッと心臓の鼓動が早くなる。

「聞いてください。元はと言えば、僕がこの同盟の話提案したん
ですから、僕も闘わなければならぬと思っんです。ミサキさん、
僕を信じてください」

「アイチ……」

「お願いします」

アイチの瞳には強い意志が込められていた。

その強い意志をミサキは止めることは出来ないと理解した。

「……わかった。私はもう止めないよ。だけど、無茶して大怪我しちゃダメだ。それだけは約束して」

「はい！ それじゃあ、ブラスター・ブレードに話してきます！」

アイチはすぐさま部屋を出てブラスター・ブレードのところに向かう。

「全く……男は無茶をするんだから……」

残されたミサキはソファーに座り込んでため息をつく。

それから二日後、約束のタッグバトルが始まるうとする。

スタジアムには今回の対決を聞いてスター・ゲートからたくさんのお客様が集まっている。

控え室ではアイチとブラスター・ブレードとアルフレッドが時間まで待機していた。

「頑張ろうね。ブラスター・ブレード、アルフレッド」

「ああ、共に全力を尽くすぞ」

「俺達は最高のチームだ。必ず勝てる！」

「うん。じゃあ、行きましょう！」

三人は控え室から出ると、ミサキ達が待っており、それぞれがアイチ達エールを送る。

ミサキからアイチへ。

「アイチ、約束……守って。無茶だけは絶対に止めてね」

「はい。行ってきます、ミサキさん」

ロゼンジ・メイガスとういんがるからブラスター・ブレードに。

「ブラスター・ブレード様、御武運を祈っております」

「負けるんじゃないぞ、ブラスター・ブレード！」

「ロゼンジ殿、ういんがる。ありがとう、行ってきます」

アマテラスからアルフレッドに。

「頑張るのじゃ、アルフレッドよ」

「ああ。ん？ どうした、ライオンメイン」

すると、一緒に闘うことが出来ないアルフレッドの愛馬ライオンメイン・スタリオンはアルフレッドに頬擦りをして自分の気持ちを伝える。

『大きな怪我をせずに必ず勝って戻ってきてください、主』

「ライオンメイン……ありがとう。必ず勝ってくるからな」

アルフレッドはライオンメイン・スタリオンの獅子のたてがみを優しく撫でる

エールを送り終わると、アイチとブラスター・ブレードはお互いを見つめて握手をする。

「行くよ、ブラスター・ブレード」

「ああ。いつでも準備完了だ」

「うん。それじゃあ……ライド」

アイチの体は青白い光の粒子となり、ブラスター・ブレードの中に入る。

ブラスター・ブレードは一瞬だけ光ると、兜から青い前髪が出て、瞳がオーロラのように不思議な色になる。

《成功みたいだね》

ブラスター・ブレードの頭に直接アイチが語りかける。

「そうだな。不思議と体が軽い……これがヴァンガードの力か」

準備が完了し、アイチとブラスター・ブレードとアルフレッドはミサキ達と別れてその場を後にする。

遂にタッグバトルのスペシャルマッチのスタートが目前となり、スタジアムの観客の興奮は時間と共に上がってくる。

ノヴァグラップラーの実況者である“叫んで踊れる実況 シャウト”は選手入場の実況をする。

「ノヴァグラップルファンの皆様、お待たせしました！！ 遂に待ちに待ったタッグバトルのスペシャルマッチ！ このノヴァグラップラーの歴史に残る最高のバトルが始まります！ それでは選手入場です！！ まず始めに、我らがノヴァグラップラー最強の機械皇帝、アシユラ・カイザー！！！」

六本の腕に六つの武器を携え、皇帝としての空気を纏いながらアシ

ユラ・カイザーが威風堂々とスタジアムに入場する。

「そのアシュラ・カイザーとタッグを組むのは、煌めく黄金の機兵、ゴールド・ルチル!!!」

紺碧の装甲に双剣を携えたノヴァグラップラーの無敗闘士“ゴールド・ルチル”がアシュラ・カイザーの後に続いてゆつくりとスタジアムに入る。

《ゴールド・ルチル。一緒に頑張ろうな!》

「ああ。ユナイトッド・サンクチュアリの英雄ブラスター・ブレイド……闘うのが楽しみだ!」

ゴールド・ルチルの中にカムイが憑依している。

理由はアイチとブラスター・ブレイドと闘うためにアシュラ・カイザーではなく、ゴールド・ルチルを選んだのだ。

「この夢のノヴァグラップラー史上最高タッグと戦うのはこの二人だ!」

ノヴァグラップラーのタッグチームと闘うロイヤルパラディンのタッグチームが入場する。

「ユナイトッド・サンクチュアリを守護する聖騎士団ロイヤルパラディンに君臨する若き騎士王、アルフレッド!!!」

アルフレッドはアシュラ・カイザーと同じく、王としての空気を纏いながら威風堂々と歩いていく。

「そして、英雄と謡われ、この惑星クレイにその名を轟かせた聖域の光剣士、ブラスター・ブレード……！」

アルフレッドの横にブラスター・ブレードが共に歩いていく。

それぞれの思いが交錯し、ロイヤルパラディンとノヴァグラップラーの闘いが始まる。

第7話 聖騎士団VS格闘技集団（後書き）

次回、いよいよタッグバトルスタートです。

ちなみに今回の組み合わせは騎士王降臨とトリアルアルデッキのそれぞれの目玉から対戦相手を考えてみました。

第8話 人間（ヒューマン）の可能性（前書き）

遂にロイヤルパラディンVSノヴァグラップラーの開幕です。

第8話 人間（ヒューマン）の可能性

ロイヤルパラディンとノヴァグラップラーのタッグバトルの両選手が揃い、シャウトは高らかに宣言する。

「それでは、両選手武器を構えて下さい！」

ブラスター・ブレードとアルフレッドは鞘から剣を抜き、ゴールド・ルチルは鞘から峰が鋸のように細かい刃の双剣“ガルーダブレード”を抜く。

四人は武器を構え、アルフレッドはアシュラ・カイザー、ブラスター・ブレードはゴールド・ルチルと対峙する。

「それでは、バトル……スタート……！」

ゴングがスタジアムに鳴り響き、四人は同時に動く。

「ブラスター・ブレード、そちらの戦士は任せた。早く倒してこっちの援護を頼むぞ」

「無茶を言う！ その言葉、そっくりそのまま返すぞ……！」

アルフレッドとブラスター・ブレードは小さく笑いながら剣を構えて走り出す。

「ゴールド・ルチル、ユナイテッド・サンクチュアリを代表するこの二人を倒して勝利の美酒を楽しむぞ……！」

「ええ、皇帝。ですが、私は勝利の美酒より彼と闘うことが何よりの美酒だ！」

ゴールド・ルチルは体勢を低くし、足に力を込めて一気に加速してブラスター・ブレードに近づく。

「私の名はゴールド・ルチル！ ブラスター・ブレードよ、いざ尋常に勝負！！」

《行きますよ、アイチお兄さん！》

「望むところ！ ブラスター・ブレード、全力でお相手致す！！」

《うん。負けないよ、カムイ君！》

ブラスター・ブレードとゴールド・ルチルは同時に剣と双剣を振り上げ、右足を強く踏み込んで同時に振り下ろす。

ガキーン！！！！

「くっ……！！」

「ぐおっ……！！」

三つの刃が交差して火花が散り、金属がぶつかる音が二人の耳を突き抜ける。

二人はそのまま腕に力を込めて剣を押し合うが、ヴァンガードをその身に宿して強化された二人の力はほぼ互角だった。

仕方なく二人はお互いの剣を弾いて距離を取る。

「強い……あの一撃でわかる。ノヴァグラップラーにこれほどの剣の使い手がいたとは……」

ブラスター・ブレードはゴールド・ルチルの剣士としての実力の高さに僅かな驚きと恐怖を抱く。

《だけど、僕達は負けないよ。ね、ブラスター・ブレード》

「そうだな、アイチ」

ブラスター・ブレードは剣を両手から右手持ちに変えて後ろに持って行き、剣を地面と水平にして平手突き構えをする。

「アイチ。少し速く動くが、我慢してくれ！」

アイチに忠告した直後、ブラスター・ブレードは全力で走り出してゴールド・ルチルに突撃する。

「突きか！ だが!!」

ブラスター・ブレードが平手突きをゴールド・ルチルは体を回転させながら紙一重で避ける。

「その程度の攻撃では私を討つことは叶わぬぞ、ブラスター・ブレード！」

回転した遠心力を利用しながらガルーダブレードを斜めに振り下ろす。

しかし、

「ふう………」

ブラスター・ブレードは突きを止め、そのまま体勢を低くして空いている左手を地面につき、左腕をくの字に曲げて逆立ちのするように体を逆に立たせる。

「せいっ、はっー!!」

左腕をバネのように一気に伸ばして体を高く跳ばす。

「何だと!?!」

《嘘お!?!》

予想だにしなかった動きにゴールド・ルチルとカムイは驚き、ガルドブレードは何もない空を切る。

「うおおおっ!」

跳んだブラスター・ブレードは体にかかる重力で地面に落ちながら大振りで剣を思いつ切り振り下ろす。

ギユルイン!!

「ぐむうっ!?!」

剣はゴールド・ルチルの紺碧の装甲を切り裂いたかに思えたが、装

甲は予想以上に堅く、傷一つ付いてない。

しかし、装甲に覆われているゴールド・ルチルは斬撃の代わりに強い衝撃が体に伝わって一瞬だけ怯んだ。

(装甲が堅いなら零距离でぶち抜くしかない！)

ブラスター・ブレードは剣を左右に展開して中央の刀身をゴールド・ルチルの装甲にピタツとくつつける。

「ピンポイントバースト・ゼロブレイク!!!」

刃から光線が放たれ、それが砲撃のようにゴールド・ルチルを撃ち抜く。

「ぐおっ!?!」

ゴールド・ルチルはピンポイントバーストの強い威力により壁に激突する。

「やるな! ブラスター・ブレードよ!!!」

激突した壁からゴールド・ルチルが瞬時に復活して現れる。

だが、復活したと言っても堅固な装甲にヒビが入っている。

「私の自慢の装甲をここまで壊したのはお前が初めてだ!!!」

「なら、今度こそその鎧を壊してやる」

「だが私にも譲れないプライドがある。仕方ない……切り札を使わせてもらう。お前なら惜しくないからな」

「切り札……!?!」

ブラスター・ブレードはゴールド・ルチルの動きを警戒して一度後ろに下がって距離を取る。

すると、アイチが何かに気づいた。

《ブラスター・ブレード！ 体中に何かキラキラ光る物があるよ!》

「光る、物……?」

ブラスター・ブレードは両目で自分の鎧を軽く見た。

そこには黄金の粒子が付着しており、光を吸収して少しずつ大きくなっている。

「これは……ゴールド・ルチルの双剣から放たれる粒子?」

ガルーダブレードから僅かだが刃から黄金の粒子が放たれるのを目視する。

「その通りだ。さあ、爆ぜよ！ パーティカルブラスト!!」

「何!?!」

ブラスター・ブレードの体に纏わり付いていた黄金の粒子が一気に膨れ上がり、巨大な閃光となって爆発する。

ドカアアアアアアアッ!!!

「がはっ!!!」

爆発物と化した黄金の粒子にブラスター・ブレードは宙に打ち上げられ、そのまま体が地面に叩きつけられる。

「くっ……があ……」

《ブラスター・ブレード……大丈夫……?》

「正、直……辛い、な……アイチは……?」

《僕もブラスター・ブレード程じゃないけど……体が熱くて痛い……》

ユニットに憑依したヴァンガードは、ダメージを受けたユニットの数割をその身に受けることになるのだ。

ブラスター・ブレードは鎧とその下に着ているアンダースーツでダメージを抑えられているが、アイチの体に症状の軽い火傷を負っている。

しかし、それでも二人の受けたダメージは大きい。

このままでは立ち上がって立つことも出来ない。

痛みで頭が真っ白になりかけたその時だった。

「アイチ　　ッ！！！！」

「ブラスター・ブレード様　　ッ！！！！」

アイチとブラスター・ブレードを呼ぶ二つの高い声が耳に届いた。

《ミサキ、さん……？》

「ロゼンジ殿……？」

真っ白になった二人の意識はすぐに覚醒し顔を横に曲げながら声のする方を見る。

観客席の一番前でミサキとロゼンジ・メイガスは目に涙を浮かべ、

身を乗り出しそうな勢いで叫んだ。

「負けないで……負けないで、アイチ!!」

「ブラスター・ブレード様、頑張って……頑張って!!」

ミサキとロゼンジ・メイガスの必死の声援にアイチとブラスター・ブレードの心に勇気を与えて、立ち上がる力が体に流れてくる。

《ブラスター・ブレード……!!》

「ああ……女の子に涙を流させるなんて、騎士失格だな。その涙を……笑顔にするために!!」

アイチとブラスター・ブレードの心は一つとなり、剣を杖代わりにして立ち上がる。

《必ず……僕達は勝ってみせる!!》

「まだまだ……まだ俺は倒れないぞ、ゴールド・ルチル!!」

ブラスター・ブレードとアイチは剣を再び構え、ゴールド・ルチルとカムイに対峙する。

一方、アルフレッドとアシュラ・カイザーの闘いでは……。

「やっと起きたか。休憩は短めにしろよな」

ブラスター・ブレードが復活するとアルフレッドはため息をつきながら、アシュラ・カイザーの六つの武器による怒涛の攻撃をアルフレッドは華麗に避ける。

「まさか、ゴールド・ルチルのパーティカルブラストを喰らって立ち上がるとは……貴様といいブラスター・ブレードといい、ヒューマンとはいえ侮れないな」

「アシュラ・カイザー殿。ブラスター・ブレードを……否、私達ロイヤルパラディンを甘く見てもらっては困りますよ」

アルフレッドは剣でアシュラ・カイザーの武器を全て弾き返し、一旦距離を離す。

「私達ロイヤルパラディンの半数はヒューマンによって結成されています。しかし、私は考えるのです。ヒューマンには無限の可能性が有ると」

「無限の可能性、だと……？」

「そして、私達騎士は大切な何かを守るためなら、今よりもっと強くなれる」

アルフレッドのヒューマンと騎士の可能性をアシュラ・カイザーに

言い放った直後、

「アルフレッド、頑張るのじゃぞー!!」

観客席からアマテラスがアルフレッドに声援を送っている。

アルフレッドは小さく笑みを浮かべると、剣を握り直してアシュラ・カイザーに向ける。

「行きますよ、アシュラ・カイザー殿。私もブラスター・ブレードやアイチと同じく簡単には倒れませんからね！」

「ふん！ 小賢しい……俺様達バトロイドの力を貴様に見せつけてやるわー!!」

ロイヤルパラディンの騎士とノヴァグラップラーのバトロイドとの戦いに遂に決着の時が近づく。

第8話 人間（ヒューマン）の可能性（後書き）

今回は二話連続投稿しましたので、次回に続きます。

第9話 ベストパートナー（前書き）

ノヴァグラップラーとの闘いが遂に決着です！

第9話 ベストパートナー

再び立ち上がったアイチとブラスター・ブレード。

自らの切り札を使って倒したと思ったゴールド・ルチルは啞然とする。

「まさか、あれを喰らって立ち上がるとは……」

《流石はアイチお兄さんだ!》

ゴールド・ルチルの中にいるカムイは嬉しそうに言う。

「なるほど。お前が兄と慕うヴァンガードか……面白い。最後まで全力で相手をしよう!」

ゴールド・ルチルも嬉しそうにして、ガルーダブレードを構え直す。

「行くぞ、アイチ!」

《うん、いつでも良いよ!》

ブラスター・ブレードは再びゴールド・ルチルに向かって走り出す。

しかし、ブラスター・ブレードは先ほどとはまるで別人のような動きをする。

(なっ!?!? スピードが増している!?!)

あっという間にゴールド・ルチルの間合いに入って剣を振るう。

「うおおおおおっ！！」

《はあああああっ！！》

ブラスター・ブレードの動きが非常に速く、剣による荒々しい連続の攻撃をする。

あまりの疾風怒涛の猛攻に、ゴールド・ルチルは双剣で防御するしかなかった。

「うおおおおおっ、せいやっ！！」

ブラスター・ブレードはゴールド・ルチルのガルーダブレードを打ち上げると、そのまま胸の辺りに蹴りを打ち込んだ。

「ごがつ！？」

ゴールド・ルチルの装甲に入っていたヒビが更に広がり、膝を付く。

対してブラスター・ブレードは攻撃を終えた瞬間、無理に動かした代償として体に激痛が走る。

「ぐっつ……」

しかし、ブラスター・ブレードは足に力を入れて倒れないように踏ん張る。

「どつやら、お互いの限界も近いようだな……」

ブラスター・ブレードは苦笑を浮かべる。

「ああ。そうだな……ブラスター・ブレードよ」

ゴルド・ルチルは立ち上がり、ブラスター・ブレードを睨みつける。

「お互い、ダメージも大きい。ならば、次の一撃で決めないか？」

言うなれば、自分の最強の一撃で勝負しようと言っている。

「良いだろう。これで……最後だ！」

ブラスター・ブレードは同意すると自身の持つ剣“ブラスターブレード”は刀身が左右に分かれる。

「この一撃に俺の全てを込める！」

ゴルド・ルチルの持つガルーダブレードから大量の黄金の粒子を放つ。

「輝け、ブラスターブレード……！」

ブラスターブレードは刀身から巨大な光を放出し、それは美しい光の刃と化した。

その光はブラスター・ブレードとアイチの心にある“勇気”を変換させたモノである。

「震えよ、ガルーダブレード!!!」

黄金の粒子がガルーダブレード全体に付着し、黄金の双剣へと姿を変えた。

光の剣と黄金の双剣がスタジアムにいる者全てを圧倒させる。

そして、二人は同時に攻撃してその力をぶつけ合う。

「バーストバスタアアアッ!!!」

「ゴールドクロススラッシュ!!!」

光の剣が振り下ろされ、黄金の十字型の斬撃が飛ぶ。

「ウオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

《はああああああああああああ!!!》

「ウラアアアアアアアアアアアア!!!」

《おりゃあああああああああああ!!!》

ブラスター・ブレードとアイチ、ゴールド・ルチルとカムイの叫び声がスタジアムに響く。

そして、光の剣と黄金の斬撃が弾け合って衝撃波が生まれ、ブラスター・ブレードとゴールド・ルチルを吹き飛ばす。

「ぐあっ!?!」

「どおっ!?!」

衝撃波に吹き飛ばされた二人はスタジアムの壁に激突し、二人は全く動かなくなってしまう。

壁に激突した衝撃で体に大きなダメージを受け、ブラスター・ブレードは気絶し、ゴールド・ルチルは機能を停止してしまう。

「おおっと! ゴールド・ルチルとブラスター・ブレードが同時に戦闘不能になってしまった! この二人の戦闘は引き分けとなるのか!?!」

実況のシャウトの説明にアルフレッドとアシュラ・カイザーは驚く。

「おいおい……早く倒して援護してくれって言ったじゃないか、相棒……」

相変わらず無茶を言うアルフレッドだった。

「ゴールド・ルチルと引き分けか……まあ、良い。俺様が貴様を倒せばそれで問題ないな!」

アシュラ・カイザーは六つの武器にエネルギーを込めてアルフレッドに近付きながら六つの腕を振り上げる。

「百撃必殺! カイザー・バスター!」

アシュラ・カイザーの六つの武器に百連撃の攻撃がアルフレッドに襲いかかる。

だが、しかし。

「残念ですが、あなたの必殺技は私には通りませんよ」

アルフレッドはアシユラ・カイザーの懐に潜り込んで百連撃のカイザー・バスターを回避する。

「何!？」

「私はヒューマンですからあなたに比べたら体は非常に小さい。ですから、懐に潜り込みやすいのです」

アルフレッドはロイヤルパラディン最強の騎士。

速力と機動力がヒューマンの中でもトップクラスの身体能力を持ち合わせているため、アシユラ・カイザーのカイザー・バスターを回避できたのだ。

「しまっ
」

「グレートソードアタック!!!」

アルフレッドは零距离で剣で薙払い、アシユラ・カイザーに魔力の斬撃を撃ち込む。

巨体のアシユラ・カイザーをぶっ飛ばし、アルフレッドは追撃の斬撃を撃ち込もうと再び剣を構え直したその時だった。

グサッ!!

「があっ!?!? ぐあああああっ!?!?」

アルフレッドの左足に突如激痛が襲いかかり、悲鳴を上げた。

アルフレッドの左脚の太ももが切れており、そこから大量の血が流れる。

そして、短剣が地面に刺さっており、刃にアルフレッドの血が付着していた。

「ふふふ……ただ攻撃を受けるだけじゃないかな。一矢報いさせてもらったぞ!」

その短剣は紛れもなくアシュラ・カイザーの物で、アルフレッドのグレートソードアタックを受けた瞬間に投げたのだ。

「くっ……」

(まさか左脚を狙うとは……アシュラ・カイザー、恐ろしい男だ……)

剣士にとって左脚は重要な部分。

そこを怪我したアルフレッドは満足に動いて剣を振ることが出来ない。

「騎士王よ、これで終わりだ！」

アシユラ・カイザーは立ち上がり、五つとなった武器で百連撃を与える。

(ここまでか……)

アルフレッドは諦めた表情を浮かべて目を閉じた。

「アルフレッド、剣を借りるぞ！」

「なっ!?!」

突然剣を取られ、アルフレッドの前に誰かが立つ。

「ブラスター・ブレード!?!」

それは、ゴールド・ルチルとの相打ちで戦闘不能になったはずのブラスター・ブレードだった。

ブラスター・ブレードはアルフレッドのグレートソードと自身のブラスターブレードを両手に持ち、アシュラ・カイザーに立ち向かう。

「英雄よ、騎士王ごと葬ってやるわ！ 百撃必殺！ カイザー・バスター！！！！」

「うおおおおおおおおおおおっ！！！！」

アシュラ・カイザーの百連撃攻撃をブラスター・ブレードは双剣を高速に操って防ぐ。

しかし、百連撃攻撃を完全に防ぎきることは出来ず、ブラスター・ブレードの鎧が破壊され、体に酷い切り傷が生まれる。

だが、ブラスター・ブレードは絶対に倒れない。

自分の後ろにいる騎士王を……相棒を……そして、掛け替えない親友を守るためにブラスター・ブレードはアシュラ・カイザーに立ち向かう。

「はあああああああああああああっ！！！！」

そして、体がボロボロになりながらブラスター・ブレードはアシュラ・カイザーの攻撃からアルフレッドを守り抜いた。

ブラスター・ブレードはブラスターブレードの刀身を左右に展開させて前に突き出す。

「ピンポイントバーストオオオツ!!」

光線をアシユラ・カイザーに向けて発射する。

「ゴバア!？」

光線が顔に直撃し、アシユラ・カイザーは後ろに倒れる。

「ブラスター・ブレード……お前……」

アルフレッドは呆然としてブラスター・ブレードを見る。

「全く……騎士王ともあろうお前が無様な格好を見せるな!」

《アルフレッド、大丈夫……?》

ブラスター・ブレードは借りたグレートソードを押し付けるように返す。

「俺がこんなボロボロになってもこうやって来たんだ! 脚をちよつと怪我したぐらいで、もう立てないとは言わせないぞ、アルフレッド……!」

ブラスター・ブレードはアルフレッドに活を入れる。

「ふっ……ふはははは! そうだったな……ありがとう。ブラスター・ブレード……!」

アルフレッドは左脚から来る痛みを完全に無視して立ち上がる。

「そうそう……それでこそロイヤルパラディンの騎士王だ。これでアマテラス殿もますますお前に惹かれるんじゃないか？」

「ばっ！？ なっ、何を言っただお前は！？」

《えっ！？ そうなの、アルフレッド！？》

ブラスター・ブレードの爆弾発言にアイチは驚く。

「俺にはバレバレなんだよ。この年上のお姉さん好きが」

「お前だって年上好きじゃないか！ ロゼンジ殿に」

「アシユラ・カイザーの前にお前を斬るぞ？」

ブラスター・ブレードは鬼の形相でアルフレッドを睨み付ける。

「くっ、こうなったら、どっちが先に相手を射止めるか勝負だ！」

「何でそうなる！？」

アルフレッドが変な提案を出してブラスター・ブレードがツッコム。

「貴様等あああああああつ！ 俺様を無視するんじゃないやねえええええええええつ！！」

「ん？」

アシユラ・カイザーが怒号を挙げながら復活する。

《ブラスター・ブレード、アルフレッド、一緒にアシュラ・カイザーを倒そう!!》

「ああ、一気に叩く!!」

「俺達のを一つにするんだ!!」

ブラスター・ブレードはブラスターブレードに勇気の光を、アルフレッドはグレートソードに数少ない魔力を注ぐ。

「これが最後の一撃……!!」

「外すなよ、ブラスター・ブレード!!」

「そっちもな。アルフレッド!!」

全ての力を剣に込め、勝利への一撃を放つ!

「ツインソード……オーバードライブ!!!」

二人の剣から光の斬撃が飛び、それが一つの大きな光の斬撃となる。

光の斬撃は巨体のアシュラ・カイザーよりも大きく、アシュラ・カイザーは反撃出来ぬまま光の斬撃に飲み込まれた。

「ガアアアアアアアアアアアアアア!!!」

アシュラ・カイザーは絶叫をあげ、光が止むと同時に倒れる。

「っ……遂に決着うっうっうっ！ 長い激闘の末、ノヴァグループ
ラー最強タッグのアシユラ・カイザーとゴールド・ルチルを倒した
のは……ロイヤルパラディン最強タッグのアルフレッドとブラスタ
ー・ブレードタッグだあああああっ！！！」

シャウトの実況による、勝利報告に観客の興奮が最高潮に達し、声
援がスタジアム中に響き渡った。

ブラスター・ブレードは左脚を怪我したアルフレッドの為に肩を貸
し、二人は観客に向かって手を振りながら控え室へと戻る。

第9話 ベストパートナー（後書き）

次回からはバトルとは打って変わって甘々な展開が続きます（笑）

第10話 闘いの後の新たな戦い！？（前書き）

今回から甘々デート編（仮）が始まります（笑）。

權君登場のかげろっ編はまだ先になります、すいません！

第10話 闘いの後の新たな戦い!?

ブラスター・ブレードとアルフレッドが控え室に戻ると、三人の女性が迎える。

「ブラスター・ブレード様！ 大丈夫ですか!？」

「アルフレッドよ、左脚は無事か!？」

ロゼンジ・メイガスとアマテラスが二人に駆け寄る。

そして、ミサキがブラスター・ブレードの中のアイチに話しかける。

「アイチ、大丈夫!? アイチ!！」

すると、ブラスター・ブレードの体が一瞬光ると同時に青白い無数の粒子が飛び出てミサキの前で集まり、アイチとなる。

「ミサキ、さん……」

アイチは疲れと怪我から意識が朦朧としてしまい、そのままミサキに倒れ込む。

「アイチ!」

「ミサキ様、すぐに三人をベッドに寝かせましょう!」

ロゼンジ・メイガスの指示で、三人をベッドに寝かせると、すぐに三人の治療を始める。

しかし、治癒魔法を使えるのはロゼンジ・メイガスしか居ないので、まずは左脚を怪我したアルフレッドである。

下手をすれば左脚がもう動かなくなるかもしれない事態だったので、すぐに治癒魔法で斬られた場所を完全にくっつけて後遺症を残らないようにした。

「これでよし！ アマテラス様、後はお願いします！」

「任せるのじゃ！」

「ア、アマテラス……私はもう大丈夫ですから……」

「怪我人は黙ってるのじゃ！」

アマテラスはアルフレッドを黙らせて看病をする。

「お次は……」

「ロゼンジ殿、私よりアイチをお願いします」

ブラスター・ブレードは大怪我している自分よりアイチの治癒を頼んだ。

「で、ですが……」

ロゼンジ・メイガスが困った表情をしているとミサキはある事を思いつく。

(そうだ……私もヴァンガードなら！)

ミサキは自分の胸に手を置いてゆっくり目を閉じた。

「ライド！ ロゼンジ・メイガス！！」

声を強めて言うと、ミサキはピンク色の光に包まれた。

すると、ミサキは今着ている高校の制服の代わりに、ロゼンジ・メイガスのひし形に彩られた法衣を身に包んだ。

「ミサキ様……？」

「私がロゼンジ・メイガスになれば治癒魔法を使えるよね？ ロゼンジ、アイチは私が見るからあなたはブラスター・ブレードをお願い」

「あつ、は、はい！ それじゃあ、ブラスター・ブレード様。失礼します……」

ロゼンジ・メイガスはブラスター・ブレードに治癒魔法をかける。

ミサキはアイチにゆっくり近づいた。

「ど、どうかな……？」

ミサキはアイチに今の姿の感想を尋ねる。

「ど、どじって……」

アイチは今のミサキの姿に目のやり場に非常に困った。

ロゼンジ・メイガスの法衣はとても露出度が高い。

両腕に腹と背中、更には脚まで肌をさらしており、本当に露出度が高い法衣だった。

それに、元々ミサキとロゼンジ・メイガスは顔がよく似ていて同じ銀髪であるため、とても似合っている。

「そ、その……とても可愛らしくて、似合っていると思いますよ……」

「ほ、本当か……？」

「え、ええ……」

アイチとミサキは顔を真っ赤にしながら話をする。

「じゃ、じゃあ……治療魔法をするね？」

ミサキはアイチの体の火傷した部分に触れて治療魔法をかける。

治療魔法はみるみるうちにアイチの火傷を治し、綺麗な肌に戻した。

「ありがとうございます、ミサキさん」

「他に火傷したところは無い？　綺麗な肌なんだから全部治さなくちゃ」

ミサキはグイツとアイチに寄りかかるように近付いて火傷を探す。

アイチは露出度の高い服で密着してくるミサキに、顔全体が熱くなり真っ赤に染まる。

「だ、だ、大丈夫ですから、ミサキさん！」

アイチは片手で顔を隠しながらミサキを退かそうとする。

「あつ、暴れるな！ 危ないでしょ！？」

ミサキは退かそうとして半分暴れているアイチを押さえようとする。

激しく動いて応戦する二人。

すると、ミサキの法衣に不具合が生じる。

プチン！

「あつ！？」

「えっ？」

突然、ミサキの胸を覆っている法衣の金具が外れた。

パサツ……………。

そして、布が床に落ちて……………ミサキの豊かな胸が露わになる。

「ふわぁ……………」

「キャ……キャアアアアアアアアッ！！！！」

ミサキは絶叫しながら両腕で露わになった胸を隠す。

「アルフレッド、見るでない！！」

ブスッ！！

「ギヤアアアアアアアアアアアッ?!?!?!?!」

アマテラスはアルフレッドの両目を指で潰す。

「目が……目があああああああつ！！！！」

両目に激痛を与えられ、視力を奪われたアルフレッドは両目を手で押さえながら悲鳴を上げる。

「ブ、ブラスター・ブレード様！ 見てはいけません！！」

対するロゼンジ・メイガスは動けないブラスター・ブレードの顔を掴んで自分の胸に持って行き、強く抱きしめた。

「ムゴオッ（ロゼンジ殿）！？」

ブラスター・ブレードはロゼンジ・メイガスのミサキに負けない豊かな胸の谷間に顔を押し当てられる。

それにより、ブラスター・ブレードはまともに話すことが出来ず、それどころかロゼンジ・メイガスの胸の谷間に顔を押しつけられて

呼吸すらままならない。

そして、ミサキの胸を目の前で見てしまったアイチは、顔がトマトのように真っ赤に染まり、脳が処理落ちしてしまう。

「ふにゃあ……」

アイチはベッドに倒れ込んで気絶してしまう。

ガチャ！

「失礼しまーす、お兄さん！ 大丈夫、です……か……？」

そこにカムイが控え室に入り、カオスになったこの状況に呆然とする。

「えっと……一体、何が……？」

このカオスの状況が収まるまでカムイは待つしかなかった。

約10分後、ようやくアイチやミサキ達は落ち着きを取り戻し、訪れたカムイの話を聞く。

「えっと、アシュラ・カイザーからの伝言です。『約束通り、俺達ノヴァグループはお前達ロイヤルパレードと同盟を組む。何か合ったときは共に助け合おう』。だって！ 良かったですね、お兄さん！」

アシュラ・カイザーからの同盟を承諾する伝言にアイチ達は安心と喜びの表情を浮かべた。

「ただ、同盟のことをノヴァグループ全員に正式に発表するにはアシュラ・カイザーは修理が終わってからになりそうです。修理は明日で終わるから、明後日の発表にはアルフレッドとブラスター・ブレードに来て欲しいって言ってましたよ」

「わかった、明後日の発表には喜んで行こう」

アルフレッドは頷いてアシュラ・カイザーの要望に承知する。

「それから、お兄さん！ 同盟発表が終わったら、俺も一緒に連れて行ってくれますか？ 俺、お兄さんやミサキさんと一緒に行きたいです！」

これからアイチ達と行動を共にしたいと頼むカムイ。

アイチとミサキは微笑んですぐに頷いた。

「うん。もちろんだよ、カムイ君！」

「私達チームQ4は誰も欠けるわけにはいかないからね。みんなと一緒に行くよ！」

「やったあ！ それじゃあ、俺はその事をアシユラ・カイザーに話に行きます！ みんな、お大事に！」

カムイは元気よく控え室を出て行ってアシユラ・カイザーの元に向かった。

アマテラスは立ち上がると、背筋を伸ばしてみんなに言う。

「さて、みんなの治療も終わったことだし、ホテルに戻るとするかの」

そして、アイチ達はホテルに戻り、闘いを終えた三人の戦士はベッドに横たわって闘いの疲れを癒した。

その夜。

完全に心身ともに回復したアイチとブラスター・ブレードはアルフレッドに召集された。

「二人に集まってもらったのは他でもない。明日は何もないフリーだ。そこで！」

「「そこで？」」

「今から俺達が片思い(?)をしている女性に明日、デートに誘って距離を縮めるのだ!!!」

アルフレッドは一体どこから持ってきたわからないホワイトボードを出現させ、『聖騎士デート大作戦!』とマジックペンでささっと書き上げた。

「デート大作戦って、アルフレッド……」

「僕、デートしたこと無いんですけど……」

「心配するな、アイチ。俺もブラスター・ブレードもデートをしたことがない。確か人間界では、『三人寄れば文殊の知恵』と言うことわざがあったな。きつと何とかなる!!!」

アルフレッドの言っていることはまともにも聞こえるが、その自信はどこから来るのか不思議でたまらなかった。

その後、アイチとブラスター・ブレードはアルフレッドに付き合いながら片思いをする年上の女性達のためにデートプランを考え、その日のうちにデートに誘いに行く。

「あ、あの、ミサキさん!」

「あ、アイチ? どうしたの?」

まず始めにアイチから戦陣を切ってミサキを誘う。

「え、えっと……ミサキさん、明日……僕と……」

アイチは勇気を振り絞ってミサキを誘おうとする。

しかし、

「アイチ。明日、私とデートして」

「はい！ って、ええっ!?!」

アイチが誘う前にミサキが言ってしまい、アイチは思わず返事をし
てしまった。

「ちゃんとエスコートしてね、可愛い騎士さん」

ミサキはアイチに片目を閉じてウイングを送ると、そのまま軽い足
取りで部屋に戻った。

陰からアイチを見守っていたブラスター・ブレードとアルフレッド
は少々啞然とする。

「まさかミサキが先にデートに誘うとは……」

「まあ、結果オーライだから良しとしよう。さあ、次は」

「ブラスター・ブレード様、そんな所で何をなさっているんですか？」

「アルフレッドよ、何をしているのじゃ？」

「っ！っ！？！？！」

ブラスター・ブレードとアルフレッドが振り向くと、ロゼンジ・メイガスとアマテラスが不思議そうに見ていた。

「な、何でもありませんよ！」

（どうする、アルフレッド！）

「え、ええ。ブラスター・ブレードの言う通りです」

（仕方ない！ 少々計画が狂ったが今デートに誘うしかない！）

ブラスター・ブレードとアルフレッドはアイコンタクトで意志を伝えあい、ロゼンジ・メイガスとアマテラスをデートに誘おうとする。

だが、それよりも早く……。

「ブラスター・ブレード様、もし良ければ……明日、私と一緒に街へ出かけませんか？」

「アルフレッドよ！ 明日、私の買い物に付き合っのじゃ！ 嫌だとは言わせぬからの……！」

ロゼンジ・メイガスとアマテラスが先にデートに誘ってきた。

「えっ！？ あ、は、はい！ 喜んで！」

「わかりました！ 喜んで買い物に付き合わせてもらいます！」

ブラスター・ブレードとアルフレッドは反射的に了解すると、ロゼンジ・メイガスとアマテラスは笑みを浮かべた。

「ありがとうございます。明日、楽しみにしていますからね」

「ふふふ、買い物に付き合った最後に褒美を捧げるから、楽しみに待つのじゃぞ」

ロゼンジ・メイガスとアマテラスはそう言い残すと、先ほどのミサキのように部屋に軽い足取りで部屋に戻る。

「……あれ？」

残された男三人は首を傾げてその場に立ち竦む。

実は、ミサキとロゼンジ・メイガスとアマテラスの女性陣三人も男性陣のようにデート作戦を考えていたのだ。

題して……『年下の可愛い騎士達を必ずゲットしよう大作戦!』である。

そして、明日一日は大波乱のデートとなるのだった……。

第10話 闘いの後の新たな戦い!?(後書き)

次回はアイチ×ミサキ、ブラスター・ブレード×ロゼンジ・メイガスのダブルデートです。

初々しく甘々なデートをお楽しみに(笑)

第11話 似た者同士のダブルデート（前編）（前書き）

甘々にするつもりがある宇宙人のせいで阻まれてしまいました。

ちょっと公式のコラボネタが入っています。

第11話 似た者同士のダブルデート（前編）

翌朝、アイチとブラスター・ブレードはホテルのロビーでソファア
に座って待っていた。

待ち合わせの相手は昨日デートに誘うはずが、逆に誘われてしまっ
たミサキとロゼンジ・メイガスである。

朝食の時にミサキとロゼンジ・メイガスの提案で、四人で一緒に出
掛けることになり、ダブルデートをすることになったのだ。

ロビーで女性二人を待つアイチとブラスター・ブレードは少しオシ
ヤレをしていた。

アイチは青を基調とした少し大人っぽい服装で、ブラスター・ブレ
ードは聖騎士の鎧とアンダースーツではなく、黒のワイシャツとズ
ボンに上着を着ている。

ちなみにこの服はあまり服を持ち合わせていないアイチ達の為にア
マテラスが用意したものである。

そして……。

「アイチ、ごめん。待った？」

「ブラスター・ブレード様、お待たせしました」

準備を終えたミサキとロゼンジ・メイガスが訪れる。

ミサキとロゼンジ・メイガスは容姿が似ていて姉妹みたいなので、アマテラスはあえて服装を別々にしないで似た服装をチョイスした。

ミサキは白い清楚なワンピースに青のジャケットを羽織り、ロゼンジ・メイガスは薄いピンク色のワンピースに白のジャケットを羽織った可愛らしい姉妹のような服装だった。

その時、アイチとブラスター・ブレードは思った。

((可愛い……))

と、思わず見取れてしまうほどである。

「それじゃあ、行こうか。アイチ」

「行きましょう、ブラスター・ブレード様」

ミサキとロゼンジ・メイガスはアイチとブラスター・ブレードの手を引っ張ってホテルのロビーから街へ出る。

ダブルデートを始める4人の後を三つの影が追いかける。

「一つ目はブラスター・ブレードの相棒、ういんがる。

二つ目はふるつがる。

そして、三つ目はういんがるの上に跨って乗っているツクヨミである。

「なあ、ツクヨミ……本当に尾行するのかよ？」

「せっかくのデートを盗み見るのはちょっと……」

「イヤ！ ミサキがご執心のアイチって奴をこのデートで見極めるんだから！」

ツクヨミはアイチがミサキの相手に相応しいかどうか見極めるためにデートを尾行するのだ。

「ほら、早く行って！ ワンちゃん達！」

「はいはい……」

ツクヨミはういんがるの長い耳を引っ張り、二匹は仕方なくデートを尾行するのだった。

アイチ達はスター・ゲートで店が多く並ぶメインストリートに向かった。

そこで、まず洋服を見に行く。

最初はミサキとロゼンジ・メイガスの服を選んでいたのだが……。

「あ、あの……ミサキさん、ロゼンジさん……」

試着室のカーテンの間からアイチが恥ずかしがりながら顔を出す。

「アイチ、着替え終わった？」

「アイチ様、早く見せてください」

「うつつ……は、はい……」

カーテンを開けると、そこにはヒラヒラのスカートに可愛らしいハートが描かれたTシャツを着たアイチがいた。

ミサキとロゼンジ・メイガスに是非着て欲しいとせがまれて、仕方なく着たアイチだが、違和感は全くなく、完全に美少女である。

「ふわぁ……凄く可愛いよ、アイチ」

「アイチ様、よくお似合いですよ」

アイチの美少女姿にうっとりとするミサキとロゼンジ・メイガス。

「……なるほど、これが有名な男の娘と言っちゃつか……」

女装から免れたブラスター・ブレードはアイチの男の娘の一面に憐れみと納得を覚えるのだった。

「……可愛いわね、アイチって……」

遠くから双眼鏡で見たツクヨミはアイチの可愛いさに目をぱちくりさせる。

「だけど、男からしたらかなり屈辱的だぜ……」

「仕方ないわよ。アイチはあの綺麗なお母さん似なんだから」

ういんがるとふるうがるはカードから見たことがある、アイチの母を思い浮かべる。

アイチ達はその後、様々なショップを渡り歩くと、まさかのヴァンガードのカードショップを発見してしまった。

「惑星クレイにもヴァンガードがあったんですね……」

「ちょっと入ってみる？」

ブラスター・ブレードもロゼンジ・メイガスも興味を持ったので、4人で店の中に入る。

店にはスター・ゲートに住む宇宙人の子ども達がヴァンガードファイトをしていた。

しかも、驚くことに見たことのないクランを使用しており、アイチとミサキは戦ってみたくなった。

すると、アイチとミサキの手からロイヤルパラディンとオラクルシンクタンクのデッキが現れる。

「ミサキさん、やってみます？」

「うん。ロゼンジ、良いかな？」

「ええ。私達は見えていますから良いですよ」

「二人のファイトを見学させてもらおうよ」

ロゼンジ・メイガスとブラスター・ブレードから許可をもらい、アイチとミサキは早速誰かとファイトしようと思っている席を探す。すると……。

「ケロケロリ！ その少年、我輩とヴァンガードファイトをするであります！」

小さな緑色のカエルに似た可愛い（？）宇宙人にアイチはヴァンガードファイトを誘われた。

「えっ？ 僕とですか？ 良いですよ」

「我輩はケロロ軍曹であります！」

カエルの宇宙人“ケロロ軍曹”は敬礼をする。

「僕は先導アイチです。よろしくお願いします」

「よろしくであります！ では……」

アイチとケロロはテーブルにファーストヴァンガードをセットする。

「スタンドアップ！ ザ・ヴァンガード！」

アイチはばーくがる、ケロロはバトルライザーにライドする。

ケロロはノヴァグラップラーはディメンジョンポリスの混合デッキを使用している。

そして、ケロロがヴァンガードをグレード2にライドする時、驚くセリフを言う。

「行くでありますよ！ 立ち上がれ、我輩の分身！ ライド！ “ブラスター・ケロロ” ！！」

「……えっ???’’?’’」

アイチ達は目を丸くしてブラスター・ケロロのカードを見る。

それは、目の前にいるケロロがブラスター・ブレードの剣を持ち、鎧を身に纏った姿だった。

「どうでありますか？ 我輩のブラスター・ケロロは！」

「は、はあ……?」

「ブラスター・ケロロでヴァンガードにアタックであります！ ブラスター・ケロロは自分の手札が相手より多ければパワーを+3000であります！」

「ノーガードです」

「ドライブチェック。ゲット、クリティカルトリガーであります！」

アイチのヴァンガードはブラスター・ケロロの攻撃を受け、山札の上から2枚のカードがダメージゾーンに置かれ、アイチのターンになる。

「それじゃあ、僕も……立ち上がれ、僕の分身！」

「ケロ？」

「ライド！ ブラスター・ブレード！」

アイチのヴァンガードは本家本物のブラスター・ブレードにライドする。

「ケロオーツ！？ ほ、本物のブラスター・ブレードでありますか！？」

「ブラスター・ブレードのカウンターブラスト！ ヴァンガードにライドした時、相手のリアガード一体を退却させます。ピンポイントバースト！」

ケロロのフィールドのリアガードが一体退却する。

「ま、まずいであります！」

「行くよ、ケロロ君！」

「つつ、ま、負けないであります！」

アイチとケロロのファイトは白熱した。

そして、

「ダメージが6枚……負けたであります」

「ありがとうございます」

結果、アイチが勝利し、ケロロはガクツとうなだれる。

「アイチ殿は強いでありますな。もし良ければ、ブラスター・ブレードのカードを見せてくれないですか？」

「良いですよ。なら、僕もブラスター・ケロロを見せてくれませんか？」

「もちろんであります！」

アイチとケロロはブラスター・ブレードとブラスター・ケロロをお互いに渡して眺める。

「カツコイイでありますな。ブラスター・ブレードは……ん？」

ケロロはブラスター・ブレードのカードとヴァンガードファイトを見ている男を見比べる。

「あれ……もしかして、あなたは！？ ブラ　むっっ！？」

ケロロは目の前にいる本物のブラスター・ブレードに口を塞がれた。

「しいーっ……あまり大声を出さないでくれるかな？」

ここで騒がれると色々面倒な事になりそうなので、ブラスター・ブレードはアイチとケロロを連れて店から出て人気の無いところへ行く。

「あなたは本物のブラスター・ブレードでありますか!？」

ケロロは目を輝かせながらブラスター・ブレードを見つめる。

「今は剣と鎧は無いけど、俺は真正銘のブラスター・ブレードだよ」

「か、感動であります! あ、あの……一つお願いがあります」

「お願い? 何かな？」

「サ、サインをください!」

ケロロは色紙とサインペンを取り出してお願いします。

「サインか……書いたこと無いから下手かもしれないけど……」

ブラスター・ブレードはケロロから色紙とサインペンを受け取り、サイン色紙らしく自分の名前を書いてケロロに渡す。

「これでいいかな？」

「ケロー！　ありがとうございます！　それから、アイチ殿。カードは返すであります」

「うん。じゃあ、僕も返すね」

アイチとケローはそれぞれのカードを持ち主に返し、ケローは敬礼をする。

「それじゃあ、我輩は仲間達の元へ帰るであります」

「うん。またね、ケロー君」

「さよならであります！」

ケローは手を振って走り出し、アイチ達と別れる。

「ブラスター・ブレード、ミサキさんとロゼンジさんの所に戻ろうか」

「そうだな。それにしても、あの宇宙人の少年とはまた合いそうな気がするな」

「僕もだよ。またケロー君とヴァンガードファイトをしたいな」

そう言うと、アイチとブラスター・ブレードはカードショップに再び入り、ロゼンジ・メイガスと一緒にミサキのファイトを見る。

ミサキが見事白星を上げると、4人はカードショップを出てデートの続きをする。

.

第11話 似た者同士のダブルデート（前編）（後書き）

今回はこんなのでスイマセン。。。；)

次回こそは甘々のデート回にします！

第12話 似た者同士のダブルデート（中編）（前書き）

今回はとにかく甘くしてみました！

ブラスター・ブレード×ロゼンジ・メイガスです。

第12話 似た者同士のダブルデート（中編）

ダブルデートでショッピングを楽しんだ四人は夕暮れ時にちょっとオシャレなレストランで早めの夕食をとった。

夕食を食べ終え、四人はレストランから出ると、空は夜になって黒く染まり、月が昇っている。

「それじゃあ、また後で」

「今日中にはホテルに戻るから」

「二人とも、気をつけるんだぞ」

「お気をつけて」

アイチとミサキ、ブラスター・ブレードとロゼンジ・メイガスはその場で別れて後は別々で夜のデートを楽しむのだった。

ブラスター・ブレードとロゼンジ・メイガスはアイチとミサキを見届けると、反対側に向かって歩く。

「ロゼンジ殿。少し落ち着ける場所で休みませんか？」

「はい。わかりました」

そう言うと、ブラスター・ブレードとロゼンジ・メイガスは人気の無い近くの公園のベンチに座る。

ロゼンジ・メイガスはブラスター・ブレードに顔を向けると、笑顔で頭を下げた。

「ブラスター・ブレード様、今日はありがとうございました。凄く楽しかったです」

「いえ、私も楽しかったですよ、ロゼンジ殿」

二人は今日のダブルデートのお礼を述べる。

すると、ブラスター・ブレードは夜空の月を眺めて呟く。

「そう言えば……ロゼンジ殿に始めて会った日もこんな月でしたね……」

「あら？ そうでしたっけ……？」

「私はよく覚えていますよ。あの日は騎士王になったばかりのアルフレッドが重要な書状を私に預け、真夜中にオラクルシンクタンクのアマテラス殿に届ける時でした……」

ブラスター・ブレードはその日のことを鮮明に覚えている。

「まったく、アルフレッドの奴……こんな真夜中に手紙を届けさせるなんて。しかも相手はオラクルシンクタンクのトップ、CEOアマテラス……迷惑じゃないのか？」

ブラスター・ブレードは愚痴を呟きながら夜のユナイテッド・サンクチュアリの街を歩いていった。

「ま、明日は休みだから、とつとつこれを届けて寮に戻って寝るかな」

そうこう言っている内にオラクルシンクタンクの本社の入り口に到着し、ブラスター・ブレードは気を引き締めて入ろうとする。

すると、

「あの、こんな夜遅くにどちら様ですか？」

後ろから声をかけられ、ブラスター・ブレードはとつさに振り向いた。

そこに居たのは、魔法の杖を携え、ひし形の多用した法衣を纏った銀髪の可愛らしい少女だった。

「エルフの魔術師……？」

エルフの魔術師の少女は月明かりに照らされ、ブラスター・ブレードの目には美しく見えた。

「もしかして、あなたはロイヤルパラディンのブラスター・ブレイ

ド様ですか？」

「はい。私はロイヤルパラディンの聖騎士が一人、ブラスター・ブレードです。騎士王からの急ぎの手紙をオラクルシンクタンクのCEOアマテラス殿にお渡しに参りました」

ブラスター・ブレードは礼儀正しい騎士の口調にしてここに来た理由を伝える。

「始めまして。私はこのオラクルシンクタンクの魔術師が一人、ロゼンジ・メイガスです。今からアマテラス様の社長室に行くので、ご一緒に如何ですか？」

「はい。よろしく申し上げます」

ブラスター・ブレードはエルフの魔術師であるロゼンジ・メイガスの後に続き、アマテラスに手紙を渡しに行く。

手紙をアマテラスに渡すと、ロゼンジ・メイガスは入り口でブラスター・ブレード見送る。

「お疲れさまでした、ブラスター・ブレード様」

「いえ、これも仕事ですので」

「良かったら、ここに来た記念に私があなたの未来を占ってあげましょうか？」

「オラクルシンクタンクで名高い天才占い師が？ 是非お願いします」

「わかりました。では……」

ロゼンジ・メイガスは目を閉じて、杖の柄で軽く地面を叩く。

魔法陣がロゼンジ・メイガスとブラスター・ブレードの足下に現れ、オラクルシンクタンクに伝わる占術魔法を発動する。

占術魔法により、ロゼンジ・メイガスの脳裏にブラスター・ブレードの断片的で虚ろな未来が映る。

ロゼンジ・メイガスはゆっくり目を開けて、ブラスター・ブレードに未来を告げる。

「あなたはこれから何度も辛い戦いをするようになります。しかし、あなたは信じ合える仲間と共にその戦いを乗り越えられます。それと……」

ロゼンジ・メイガスは突然、頬を朱色に染めた。

「どうしました？」

「う、運命の人について……聞きたいですか？」

「運命の人……それは、私と生涯を共に生きる女性……妻のことで
すか……？」

「は、はい……」

頷くロゼンジ・メイガスにブラスター・ブレードは小さく苦笑を浮

かべる。

「そうですね……まあ、気になりますから一応お願いします」

ロゼンジ・メイガスはゆっくりとブラスター・ブレードの運命の女性を告げる。

「その女性は……エルフで……」

「エルフ？」

「そして、ぎ、銀髪の魔術師です……」

「……………え?????」

「し、失礼します！　ブラスター・ブレード様！　またお会いしましょう！」

ロゼンジ・メイガスは焦りながらブラスター・ブレードに一礼して走りながら会社に戻る。

「ロゼンジ・メイガスか……」

ブラスター・ブレードは頬を指でかきながら月を見上げる。

昔話を聞いて、ロゼンジ・メイガスは耳まで顔を真っ赤にした。

「そ、そんな事もありましたね……………」

「ちなみに…………あの占いは本当だったんですか…………？ 未だにちょっと信じられなくて……………」

「私は自分で占ったことを正直に話します。占術魔術を使う者として、嘘は付きません！」

ロゼンジ・メイガスは声を強めて自分の誇りをブラスター・ブレードに伝える。

「す、すいません…………じゃあ、その占いが本当なら……………」

「えっ？ キャッ！」

ブラスター・ブレードはロゼンジ・メイガスの腰に手を回して抱き寄せる。

「ブ、ブラスター・ブレード様……………？」

「私はあの日以来、あなた以外でエルフの魔術師を見たことはありません。つまり……………」

そこから先はブラスター・ブレードが言う必要はなかった。

ロゼンジ・メイガスは人差し指でブラスター・ブレードの唇を閉じた。

「私は……小さい頃に占術魔法で自分自身の運命の人を占いました。その人は誰よりも勇気を持っていて、誰かを護るために戦う人。私が彼を始めて見たのはあなたが剣の名前を受け継いだ時でした。でも……」

ロゼンジ・メイガスは手を組んで自分の胸に持って行く。

「英雄と呼ばれる彼では私は釣り合わないと思い、密かに想いを抱きながら諦めかけていました。しかし、あの日の夜に私と彼は出会いました……」

その時から二人は頻発に会うようになり、ロゼンジ・メイガスの諦めかけた想いが再び芽生えて膨らんだ。

「今ならちゃんとと言えます……ブラスター・ブレード様。私は」

ロゼンジ・メイガスは自身の心にある勇気を奮い立たせる。

「私は……あなたを愛しています。ブラスター・ブレード」

ずっと想い続けたロゼンジ・メイガスの告白。

対するブラスター・ブレードは心を乱さず、冷静に自分の想いをロゼンジ・メイガスに伝える。

「ロゼンジ殿。いや、ロゼンジ・メイガス。俺は始めて会った時からずっとお前に惹かれていた」

ブラスター・ブレードはロゼンジ・メイガスの頬に両手を添える。

そして、自分の唇を優しく、甘くロゼンジ・メイガスの唇に重ねる。たった数秒間のキスだが、二人にはそれが何分にも感じ、ゆっくりと唇を離し、ブラスター・ブレードはロゼンジ・メイガスを見つめる。

「俺もあなたを愛している。ずっと、俺の側にいてくれ」

お互いの口から出された愛の告白。

ロゼンジ・メイガスはブラスター・ブレードに抱きつき、耳元で言

う。

「はい……私はずっと、あなたの側で愛し続けます」

「ありがとうございます……」

ブラスター・ブレードは両腕でロゼンジ・メイガスを優しく抱きしめた。

運命によって巡り会えたヒューマンの騎士とエルフの魔術師。

その愛は大いなる禁忌なのかもしれない。

だが、この二人の愛はやがてユナイテッド・サンクチュアリの未来を守る新たな光を生み出すこととなる。

第12話 似た者同士のダブルデート（中編）（後書き）

アイチ×ミサキは次回です。

こちらも甘さを追求しますので！

第13話 似た者同士のダブルデート（後編）（前書き）

アイチ×ミサキさんの甘々小説です。

まだまだスター・ゲート編は続きます。

第13話 似た者同士のダブルデート（後編）

ブラスター・ブレードとロゼンジ・メイガスと別れたアイチとミサキはスター・ゲートの街に点灯されたイルミネーションを楽しみながら歩いていった。

「イルミネーション、綺麗ですね」

「うん。とても不思議な光……スター・ゲートの技術で造られたみたいだね」

「あつ、ミサキさん。そのベンチで休みませんか？」

「そうだね。ちょっと休もうか」

二人は近くにあったベンチに座り、様々な色の光に変化するイルミネーションを楽しむ。

アイチは横目でミサキを見る。

イルミネーションを見るのに夢中になっているミサキにアイチは拳を作る。

（い、言うんだ。ミサキさんに、僕の想いを！）

「あ、あの、ミサキさん！」

「ん？ どうしたの？ アイチ」

「僕……ミサキさんに伝えたい気持ちがあるんです！」

真剣な眼で自分を見つめてくるアイチにミサキはドキッと心臓の鼓動が激しく高まる。

「な、何……？」

これから聞くかも知れないその言葉をミサキは緊張しながらアイチの言葉を待つ。

「僕は始めてミサキさんに会った時……気の強いちょっと怖いお姉さんだと思いました……」

普段のミサキならここですぐに怒っているだろうが、緊張していてそれどころではなかった。

「でも、ミサキさんと一緒にヴァンガードファイトをしたり、お話をしていく内に……僕はミサキの優しいところ、可愛いところをたくさん知りました」

可愛いと言われ、ミサキは頬を赤く染める。

アイチも頬を赤く染めながら自分から見たミサキに対する想いを紡いでいく。

「僕はだんだん、頭の中がミサキさんで埋め尽くされていくんです」

「アイチ……」

そして、アイチはギュッと目を閉じて大声で自分の秘めた想いをミサキに伝える。

「僕は……ミサキさんが好き、大好きです！！僕はまだ弱いけど、必ず強くなってミサキさんをずっと、ずっと護っていきます！！」

告白したアイチは未だに眼を閉じながらミサキの返事をじっと待つ。

すると、ミサキはアイチを優しく抱きしめて耳元で囁く。

「アイチ……あなたの気持ちは伝わったよ。私も……アイチが大好きだよ。でも……」

「でも、何ですか……？」

アイチはミサキの表情を見ることは出来ないが、悲しい表情をしているのは何となくわかっていた。

「私は両親が亡くなってからずっと何かを失うのを恐れていたんだ。だから……私が大好きなら約束して」

「は、はい。どんな約束ですか？」

「絶対に……私より先に死なないでね。もしアイチが先に死んだら絶対に許さないんだから……」

大切な何かを失うことの恐ろしさを一番理解しているミサキ。

アイチは抱きしめているミサキを離してジッと見つめる。

「約束します。僕は絶対にミサキさんより先に死にません。ミサキさんを……幸せにします!!」

アイチは自分の覚悟をミサキに伝えようと、アイチは自分の唇をミサキの唇へと重ねた。

ミサキは突然のキスに驚いたが、抵抗は一切しないでアイチと唇を甘く激しく重ねる。

「んう……ふわう……ミサキ、さあん……」

「んちゅ……むう……アイ、チ……」

二人は唇の間から舌を入れて絡み合わせるディープキスへと発展させる。

そして、お互いの唇と舌を離すと、唾液の銀色の糸が繋いでプツンと切れる。

「ミサキさん……」

中学生には刺激の強すぎるディープキスに意識がトロンとなってしまふアイチにミサキは自分の胸に抱き寄せた。

そして、ミサキは何故か余裕で不敵な笑みを浮かべながらアイチを離さないように抱きしめる。

「アイチ。あんたは私と一緒に寝て、私の胸を見たわよね？」

「えっ？ そ、そうですけど……」

どちらもミサキの責任が半分ほどあるが、事実である。

「だから、責任は取ってもらおうからね」

「責任……？」

「そう……アイチは私だけのモノ。私の嫁になってもらおうよ」

「えっ？ 嫁って……僕は男だから婿なんじゃ……」

「アイチは女の子みたいに可愛いから私の嫁でいいのよ それに、アイチに拒否権は無いからね」

ミサキはアイチの頬や額、そして首もとにキスをたくさん落として

自分のモノだという証を刻んでいく。

「ひゃあ……あうっ……」

「ふふふっ。アイチ、可愛い……」

喘いでいるアイチにミサキは興奮していく。

そんな時だった。

「ごんにゃろおおおおおおおっ！……」

「えっ？」「」

夜空を見上げると、怒りに燃え上がっていた神々しい光を放つツクヨミの最終形態“満月の女神 ツクヨミ”がいた。

「ツ、ツクヨミ！？」

「しかも満月の女神に！？」

「に、逃げる……アイチ……」

「早くしないとツクヨミに殺されるわ……」

そこにボロボロになったういんがるとふるつがるがやって来た。

言わずもがな、ツクヨミを止めようとしてこつなつたのだ。

「二人とも、大丈夫!？」

「あんたは……男なのになんで女みたいなのよ!?!」

ツクヨミの首にかけてある夜の闇を払い去る神器“月影の勾玉”が聖なる光を放つ。

「月影の勾玉!?!」

その光はアイチだけに向けられ、降り注がれる。

(あれだけは防がなきゃ危ない!)

「ライド! 閃光の盾 イゾルデ!?!」

アイチはロイヤルパライインの守備を担当している呪装を施した巨大な盾を持つ女性騎士、イゾルデにライドする。

イゾルデに変身したアイチはあらゆる力の攻撃から守る閃光の盾を起動し、ツクヨミの月影の勾玉の光を防ぎきる。

だが、それが逆にツクヨミを怒らせることになる。

「今度は女の子騎士かあああああああああつ！……！」

「ツクヨミ止めなさい……！」

ミサキが叫んでツクヨミを叱りつける。

「どうして私のアイチを傷つけようとするの？ 答えて、ツクヨミ……！」

「私は……ミサキの幸せを願いたい。だけど、ミサキが選んだその男は全然男らしくないじゃない！ 寧ろ女の子みたいだし！ だから許せないのよ！ ミサキを守るぐらい強くてカッコイイ男じゃないと認められないのよ……！」

「そんな事はない！ アイチは……優しく可愛いところがあるけれど、強くてカッコイイところもあるんだから……！」

「だったら……先導アイチ！ 私と勝負しなさい！」

ツクヨミは剣の宝具をアイチに向ける。

しかし、アイチは首を横に振ってイゾルデの変身を解いた。

「お断りします」

「なっ！？ 何ですよ！ 私と戦うのが怖いの！？」

「違います。僕はミサキさんの大切な人と戦いたくありません。でも、これだけは約束します」

「約束？」

「僕は……大好きなミサキさんを必ず護ります！ 例えどんな事があっても必ず護ります！！」

アイチはミサキの手を握ってツクヨミに宣言する。

「先導アイチ……」

強い意志と力が秘められた瞳にツクヨミは宝具を下ろす。

そして、ツクヨミの体が一瞬光ると、身に纏った神器と宝具が消えて三日月の女神 ツクヨミとなる。

ツクヨミの後ろに光の神に付き従う聖なる御使いの蒼い鷹“神鷹一拍子”が現れる。

「先導アイチ、あなたの覚悟は伝わったわ。私もミサキを守るけど……あなたは必ずミサキを護ってね。約束よ」

「はい。約束します！」

それは、ミサキを大切に想う二人の約束。

仲直りをした二人にミサキは優しく微笑んだ。

その後、アイチとミサキはポロポロになったういんがるとふるつがるを抱き上げ、ツクヨミは一拍子の背中に乗ってホテルへと戻る。

アイチとミサキはお互いの手の指を絡ませる恋人繋ぎをしながら二

人は歩いていく。

第13話 似た者同士のダブルデート（後編）（後書き）

どうでしたか？

アイチとミサキさんの甘々話は？

今回はアルフレッドとアマテラス様のデートです！

もしかしたらR18の小説を書くかもしれません（笑）

第14話 騎士王とCEOの甘々デート？（前書き）

今回はアルフレッドとアマテラス様のデートです！

こちらは別の意味で甘いのでコーヒーの用意を（笑）

第14話 騎士王とCEOの甘々デート？

騎士王 アルフレッド。

ユナイテッド・サンクチュアリの正規軍、ロイヤルパラディンを統べる王で歴代最強の騎士と謳われている。

CEO アマテラス。

大企業オラクルシンクタンクの代表取締役で、類稀な経営力・統率力と見る者を圧倒するカリスマ性を合わせ持っている。

このユナイテッド・サンクチュアリを代表する、または象徴するとも言える二人がスター・ゲートでデートをすることになった。

ホテルの前でアルフレッドはいつもの鎧とアンダースーツの代わりに黒のスーツを着用してアマテラスを待つ。

（初めてだな。女性とデートするのは……しかも相手は超ビックのオラクルシンクタンク社長のアマテラス。まあ、俺もロイヤルパラディンの騎士王だけだな）

そんなことを考えている内に、

「アルフレッド〜！ 待たせたの〜！」

アマテラスは手を振りながらアルフレッドの元へ走ってくる。

服装は和服ではなく、ドレス風の黒のワンピースだった。

綺麗な長い黒髪のアマテラスに良く似合い、またいつもと違う雰囲気を出していた。

「どっじゃ？ アルフレッド！」

アマテラスはアルフレッドに服を褒めてもらいたくて、クルツと一回転する。

その際にアマテラスの黒髪とワンピースのスカートがふわっと浮き上がる。

「あ、ああ……とっても似合っていて綺麗だよ……！」

「そうかの！？ 嬉しいのじゃ！」

アマテラスはアルフレッドの腕に抱きつく。

その際にアマテラスの柔らかいモノがアルフレッドの腕に感触が伝わる。

「そ、それじゃあ、行こうか？」

「うむ！」

若干緊張しているアルフレッドとどこ機嫌なアマテラスはデートを開始する。

二人のデートを五つの影が追いかける。

まずその内の三つはバトルシスターのもか、ここあ、しよこらの三人である。

「アマテラス様、綺麗です……」

「アルフレッド様もなかなかだね」

「は、はわわ！ 見つかりませんように！」

ちなみにここあに関してはナイフではなく、カメラを構えている。

「何故……我がこんな事を……？」

もう一つの影はギャラティンである。

バトルシスターの三人に無理やり連れてこられたのである。

そして、最後の五つ目は……。

『アルフレッド……』

心配そうにアルフレッドを見つめる愛馬ライオンメイン・スタリオ

ンである。

主の初デートを心配して見に来たのだ。

そんな四人と一頭は騎士王とCEOのデートを尾行する。

アルフレッドとアマテラスは街でショッピングを楽しんでいると、美味しそうなクレープ屋を見つけた。

「アルフレッド！ あそこのクレープを食べるぞ！」

「クレープか……良いな、食べようか」

二人はクレープ屋でアイスが入ったクレープを二つ注文する。

アルフレッドは無難にバニラアイスを選び、アマテラスは抹茶アイスを選んだ。

アマテラスは抹茶アイス入りのクレープに目を輝かせ、口いっぱい頬張った。

「はむっ！ ん〜っ！ アイスの冷たさとクレープの温かさが

程よく合わさって最高のじゃ〜！」

ほっぺたが落ちそうなくらいのクレープの美味しさにアマテラスはうっとりした表情を浮かべる。

「そう言えば、アマテラスは抹茶とか和菓子とかが好きだったな」

「うむ、抹茶と和菓子は私の大好物！ 今度ユナイテッド・サンクチュアリの美味しい和菓子店をアルフレッドに紹介するぞ」

「楽しみにしているよ。それとアイスが頬に付いているよ」

「何！？ どごじじゃ？」

「ごごじだよ」

アルフレッドは指でアマテラスの頬についたアイスをすくい、そのまま舐める。

「んっ。抹茶アイス、美味しいな」

「っ！？ ズ、ズルのじゃ！ アルフレッド、お主のクレープを一口寄越すのじゃ！」

アマテラスは顔を真っ赤にしてアルフレッドに向けて変な怒りを向ける。

「どづしてそうなるんだ？ まあ、別に良いけど……はい、あーん」

アルフレッドはクレープをアマテラスの口に持って行く。

「あ、あーん……はむっ。モグモグ……うん、美味しいのじゃー！」

アマテラスは口を開いてクレープを一口食べる。

「じゃあ、俺も……パクッ」

アルフレッドも口を開けてアマテラスのクレープを一口食べる。

「ああっ！？ 何をするのじゃ、アルフレッド！」

「んー 美味しいな」

「返すのじゃ！ 我の抹茶アイスを返すのじゃー！」

「はいはい。ほら、もう一口あげるから」

「むうっ……仕方ないの。あーん、はむっ！」

アマテラスはアルフレッドのクレープをもう一口食べる。

そして、アマテラスは自分のクレープをアルフレッドに向ける。

「アルフレッド、食べるのじゃー！」

「ん？ それじゃあ、いただきます」

二人はお互いのクレープを甘く食べさせ合う。

「「「「……甘い、甘過ぎる……」「「「「

デートを尾行している四人はクレープからの甘い展開に口から砂糖を吐きそうになる。

「あの……アマテラス様と騎士王様は恋人同士じゃありませんよね……？」

「それなのに……あの二人はバカップル？」

「み、見ているこっちが恥ずかしいです……」

特にもか、ここあ、しょこらは二人の甘々空間に既に撃沈している。

「あんな騎士王様の姿は始めて見た……よっぽどアマテラス様とのデートが楽しいようだな……」

『アルフレッド、幸せそう……アマテラスとお似合い』

ギョラティンはうんうんと頷き、ライオンメイン・スタリオンは安心したような表情をしてデートを見守る。

だが、そのデートを邪魔する無粋な“エンジェル天使”が現れる。

「やっと見つけましたよ、社長!!」

「御主人様、心配いたしましたよ!!」

「ん?」

ちょうどクレープを食べ終わったアルフレッドとアマテラスは疑問符を浮かべながら振り向く。

それは眼鏡をかけた容姿端麗な秘書と執事で、オラクルシンクタンクの間人だった。

「社長。今すぐに社にお戻りください。社員一同社長のお帰りをお待ちしております」

秘書の名は“セレクター・エンジェル”。

彼女はアマテラスの秘書のエンジェルである。

有能な秘書でアマテラスを影から支えている。

だが、たまに仕事をサボってユナイテッド・サンクチュアリの街に出掛けてしまおうアマテラスを頑張って捕まえる苦労人でもあるのだ。「御主人様、お帰りください。社に私のお手製菓子を用意しておりますので」

執事の名は“フェイスフル・エンジェル”。

オラクルシンクタンク社のアマテラスに仕える腕利きの執事である。元は社の動向を視察するために訪れた隣国の監察官だったが、アマテラスの器量に感銘を受け離反、以後は専属執事となった。

事務・雑務・戦闘などあらゆる面において多様な才能を持っている。

アマテラスは二人の登場に嫌な表情を浮かべる。

「げっ！？ セレクター！ フェイスフル！！」

「お二方、どうしてスター・ゲートに？」

「これはこれは騎士王様。社長がご迷惑をお掛けしました」

セレクター・エンジェルはアルフレッドに向かって礼儀正しく頭を下げる。

「社長を我が社に連れ戻すために私とフェイスフルが参りました。さあ、社長。オラクルシンクタンク社に戻りますよ」

「絶対に嫌じゃー！！」

アマテラスはアルフレッドの後ろに隠れる。

「我はアルフレッドと甘々デートをしているのじゃ！ セレクター
ー、邪魔するでない！！」

「なっ！？ 騎士王様とデート！？ ど、どうして騎士王様とそ
ような関係になったか知りませんが……社長、我が儘を言っ
てはいけません！」

「嫌じゃ嫌じゃ！ 絶対に帰らん！！」

アルフレッドよりかなり年上のはずのアマテラスが小さな子供のよ
うに我が儘を言って駄々をこねる。

見るに耐えかねないアルフレッドはため息を付いて助け舟を出す。

「セレクターー殿。私達は明日にノヴァグループと同盟を発表
します。そしたらアマテラスを含めて全員ですぐにユナイテッド・
サンクチュアリに帰りますので今日はアマテラスを見逃してくれま
せんか？」

「おおっ！ ナイスじゃ、アルフレッド！」

明日必ずアマテラスをオラクルシンクタンクに返すアルフレッドの
約束に話の分かる人ならここで了承してくれるだろう。

だが……。

「ふふふ……なるほど……そう言うことですね……」

フェイスフル・エンジェルは不気味な笑いを浮かべ、背中に闇のオ
ーラを纏う。

「セレクターリー……私に良い考えがあります」

「考え？ 言ってみて」

「はい。要するに……今ここで騎士王を抹殺して御主人様を連れて
帰ればいいのですよ」

「……はい???'」

アルフレッドとアマテラスは耳を疑って目をぱちくりさせる。

フェイスフル・エンジェルの考えにセレクターリー・エンジェルも不
気味な笑みを浮かべる。

「なるほどね。フェイスフルが騎士王様を押さえている間に私が社
長を捕まえて社に連れ戻す……良い考えだわ」

「それでは……」

フェイスフル・エンジェルは燕尾服から無数のフォークとナイフを
取り出して指の間に挟む。

「我が愛しの御主人様をたぶらかす騎士王め、覚悟しろ!!」

フェイスフル・エンジェルはヤバい目を輝かせながらフォークとナ
イフを鋭く投げ飛ばす。

「ちよっ、まっ、どわあああああああっ!?!」

アルフレッドはアマテラスを抱きかかえてナイフとフォークを回避する。

「騎士王! 貴様、アマテラス様を抱きかかえて逃げるな! 自分一人だけで私に殺される!!」

「お前の言ってる意味が分からないわ!」

「ど、どうするのじゃ、アルフレッド! このままじゃ二人に捕まってしまうぞ!」

「くっ、せめて剣があれば……!」

ピンチなその時だった。

『アルフレッドオオオオオオオオオツ!?!!』

土煙を上げながらライオンメイン・スタリオンが駆けてくる。

「ライオンメイン!?!」

『邪魔だ、エンジェル共!?!』

ライオンメイン・スタリオンはセレクトアリー・エンジェルとフェイスフル・エンジェルを蹴り飛ばす。

「キャアアアアアアアアアッ!?!」

「ノオオオオオオオオオオツ!?」

蹴り飛ばされた二人のエンジェルは宙に打ち上げられる。

人間界にはこんなことわざがある…… 『人の恋路を邪魔する奴は馬に蹴られて死んじまえ』と。

しかし、二人はエンジェルなので耐久力はかなり高く、そう簡単には死なない。

すぐに復活して戻ってくるだろう。

「ライオンメイン、お前どうして……」

『そんな事より、あのエンジェル達が追っかけてくる前に俺に乗ってここから離れるぞ。俺がいればどこでも逃げられるからな』

「おお、それは頼もしいの。さすがはアルフレッドの愛馬じゃ」

アマテラスはライオンメイン・スタリオンのたてがみを優しく撫で、ライオンメイン・スタリオンは気持ちよさそうな表情をしてアマテラスに頬擦りをする。

アルフレッドはライオンメイン・スタリオンの背に乗ると、アマテラスに向けて手を伸ばす。

「我が姫君。共に行きましょう」

物語の騎士が姫に送るような台詞を言うアルフレッドにアマテラス

は優しい笑みを浮かべて自らの手を伸ばす。

「我をどこへでも連れて行ってくれ、騎士様」

お互いの手を握り、アルフレッドはアマテラスを引き上げてライオンメイン・スタリオンに乗せる。

「しっかり掴まってるよ」

「うむ！」

アルフレッドが手を前に出すと、手綱がライオンメイン・スタリオンに装着される。

「はあっ！」

手綱を操り、ライオンメイン・スタリオンを走らせ、追っ手のエンジェル二人から逃げながら、アルフレッドとアマテラスはデートを再開させるのだった。

第15話 結ばれた想いと心（前書き）

今回でデートとスター・ゲート編の終了です。

第15話 結ばれた想いと心

オラクルシンクタンク社からアマテラスを連れ戻しに来たセレクタリー・エンジェルとフェイスフル・エンジェルの追跡から逃れながら、アルフレッドとアマテラスはデートを楽しんでいる。

ショッピング、ゲームセンター、映画……時間の許す限り二人はライオンメイン・スタリオンに乗って色々な場所を巡った。

そして、楽しい時間は早く過ぎ、時刻は既に夜となっていた。

「アルフレッド、最後にあそこに行くぞ！」

「わかった、行こう。ライオンメイン！」

アルフレッドとアマテラスはライオンメイン・スタリオンを走らせて向かったのは山の上にある展望台である。

ライオンメイン・スタリオンは名馬と言われており、山をあっという間に駆け上って僅か数分で頂上の展望台に到着した。

「到着じゃー！ おおっ……アルフレッド、見るのじゃー！」

「これは……凄く綺麗な夜景だな……」

ライオンメイン・スタリオンから降りたアマテラスとアルフレッドの目に映ったのは、展望台から見下ろしたスター・ゲートの見事な夜景だった。

鮮やかな光が夜のスター・ゲートの街を彩り、誰もがうつとりする程の美しい光景だった。

「アルフレッド、今日は感謝するのじゃ！ 最高のデートだったぞ
！」

「こちらこそ楽しかったよ。おっと、忘れない内に……はい」

アルフレッドは小さな黒い箱を取り出してアマテラスに渡す。

「何じゃ？ これは？」

「開けてみて」

「うむ」

アマテラスは恐る恐る開けると、箱の中には小さな蝶々のピアスが二つ入っていた。

「これ……アルフレッドが我にか……？」

「もちろん。今は夜だからちょっと見えにくいけど、その蝶はピンクダイヤモンドを削って造られたピアスだよ。付けて見せてくれるか？」

「う、うむ……」

アマテラスは両耳にいつも付けている金のピアスを外して、蝶々のピアスを付ける。

夜景から僅かに来る光がピンクダイヤモンドで出来た蝶々のピアスに反射してキラキラと輝いている。

「ど、どうじゃ……？」

「ああ。凄く似合っているよ、アマテラス」

「うっっ……」

突然、アマテラスは俯いてしまった。

いつもなら元気よく返事をしたりするが、アルフレッドにピアスをプレゼントされてから様子が明らかにおかしかった。

「どうしたんだ？　もしかして、プレゼントが気に入らなかったのか……？」

アルフレッドは少々不安な表情を浮かべるが、アマテラスは首を左右に振る。

「ち、違うのじゃ。ただ、初めてなのじゃ」

「何がだ？」

「お、男からの贈り物は……だから、嬉しすぎて……気が狂いそうなのじゃ……」

アマテラスの純情な心に自身の顔が真っ赤になっており、今が夜で顔がアルフレッドによく見えてなかったのが幸이었다。

「の、のお……アルフレッド」

「ん？ 何だ？」

「素敵なプレゼント、ありがとうなのじゃ。だから……我も今からアルフレッドにプレゼントをあげるのじゃ。受け取ってくれるか？」

「ああ。もちろんだよ」

「で、では、一時だけ目を閉じてくれるか？ 少し準備をするから

……」

「わかった」

アルフレッドは目を閉じてアマテラスの言葉を待った。

そして、数秒後。

「……よし。アルフレッド……！」

アマテラスは準備が出来たらしく、大声でアルフレッドを呼んだ。

「はい、アマテラス」

アルフレッドは目を閉じたまま返事をした。

「我は……我はアルフレッドの事が大好きじゃ！ 愛しているのじや！！！」

「……………え？」

アルフレッドは一瞬耳を疑い、思わず目を開けてしまった。

次の瞬間、アマテラスの顔が目の前にあり、自分の唇に柔らかいものが触れた。

言わずもがな、アマテラスはアルフレッドにキスをしたのだった。

（アマテラス……………）

アルフレッドは驚いたが、キスをしたままアマテラスを優しく抱きしめた。

二人は初めてのキスに少しだけ戸惑っていたが、鼻でゆっくり息を

し、時々キスの向きを変えながらお互いの唇をゆっくりと甘く重ね続けた。

そして、二人はお互いの唇をゆっくり離した。

「アマテラス……」

「アルフレッド……プレゼントはその……我自身じゃ」

「えっ？ それって……」

「つまり……我を嫁として貰ってくれないかの……？」

要するに遠まわしに結婚してくれとプロポーズをしている。

「アマテラスが俺の嫁か……」

「い、嫌ならいいのじゃ！ 我はノーブルでお主の何百倍も長生きしておる年増じゃし、やっぱり同じヒューマン同士で」

「俺と結婚してくれ、アマテラス」

アマテラスの言葉を遮り、アルフレッドはプロポーズする。

「へ……？？」

「ノーブルとかヒューマンとか、そんなのは関係ない。俺もアマテラスを愛している。だから、俺の妻になってくれ」

真剣な眼差しで見つめてくるアルフレッドにアマテラスは目に涙を

浮かべる。

「アルフレッド……はい！」

アマテラスはOKの返事を出してアルフレッドに抱きついた。

「愛しておるぞ、アルフレッド……」

「俺もだよ。愛している、アマテラス……」

二人はもう離さないと言わんばかりに互いを強く抱きしめた。

（愛する女と一緒になれたか。良かったな、アルフレッド……これはロイヤルパラディンで盛大に祝わなくちゃな）

二人を見守っていたライオンメイン・スタリオンは空を見上げた。

（我らロイヤルパラディンの神、ソウルセイバー・ドラゴン様。どうか……我が主、アルフレッドとその妻アマテラスにあなた様の祝福をお願い致します……）

ライオンメイン・スタリオンは二人の未来の為に聖域の守護竜にして騎士達の神“ソウルセイバー・ドラゴン”に祈りを捧げた。

翌朝、アシュラ・カイザーとの約束の日となり、アイチ達はスタジアムに向かった。

しかし、肝心のアルフレッドがまだ来ておらず、アマテラスも含めて昨日の夜ホテルに帰っていなかった。

スタジアムの外でブラスター・ブレードはアルフレッドを待っていた。

「全く、同盟の発表にロイヤルパラディンの代表が居ないなんて……」

ブラスター・ブレードは呆れていると、向こうから土煙が上がってこちらに向かってくる。

「やっと来たか……」

ブラスター・ブレードが呟くと、ライオンメイン・スタリオンに乗ったアルフレッドとアマテラスがやって来た。

「すまない、遅くなった！」

「全く。遅刻だぞ、アルフレッド」

「ああ。行こう、ブラスター・ブレード」

「了解」

「アルフレッド〜!」

アマテラスが笑顔で手を振ると、アルフレッドは軽く手を振ってブラスター・ブレードと共にスタジアムに行く。

アルフレッドを見送ったアマテラスはライオンメイン・スタリオンから降りる。

「行こうかの、ライオンメイン」

ライオンメイン・スタリオンは軽く頷き、ロゼンジ・メイガス達の元へ向かった。

アルフレッドとブラスター・ブレードがスタジアムに入ると、フィールドにアシュラ・カイザーを中心にノヴァグラップラーの戦士達が集結していた。

アシュラ・カイザーは前に出てアルフレッドに話しかける。

「騎士王よ。戦士達に同盟の話をしたが、やはり賛否両論だった」

「わかっています。そればかりは仕方ないことです」

「だが、俺様はこの同盟は未来の為に必要な事だと思い始めた」
アシユラ・カイザーは手を差し出す。

「はい。共に未来の為に全力を尽くしましょう」

アルフレッドはアシユラ・カイザーの手を取り、握手を交わす。

ユナイテッド・サンクチュアリの聖騎士団ロイヤルパラディンとスター・ゲートの格闘技集団ノヴァグラップレーが同盟を組んだ瞬間だった。

無事に目的を達成したアイチ達は一旦ユナイテッド・サンクチュアリへ帰ることにする。

特にアマテラスに関しては一度オラクルシンクタンク社に戻らないと、今度こそセレクター・エンジェルの逆鱗に触れて、何が起きるかわからないので……。

ノヴァグラップレーのヴァンガードのカムイも一緒に行くことになっているので、護衛にゴールド・ルチルが付くことになった。

一同はペンドラゴンに乗り、ユナイテッド・サンクチュアリへと帰るのだった。

第15話 結ばれた想いと心（後書き）

次回からはかげろふ編になります。

やっと權君の出る新章突入です。

第16話 聖域の守護竜

スター・ゲートからユナイテッド・サンクチュアリに戻ったアイチ達。

アルフレッドとアマテラスはロイヤルパラディンとオラクルシンクタンクにそれぞれ戻った。

アマテラスは未来の夫のアルフレッドと一時の別れを惜しんだが、アルフレッドの説得により渋々オラクルシンクタンク社へ戻った。

アルフレッドも数日間空けていたロイヤルパラディンで仕事に専念する。

ブラスター・ブレードとロゼンジ・メイガスは引き続きアイチとミサキの護衛を担当し、ギャラティンやバトルシスター達はそれぞれの仕事場に戻った。

そして、ユナイテッド・サンクチュアリに始めて来たカムイは目を輝かせていた。

「すっげー！　ここがユナイテッド・サンクチュアリか！」

「流星は聖域連合と呼ばれるだけあって素晴らしいところだ」

護衛のゴールド・ルチルも感心していた。

「ゴールド・ルチル。良ければ今度他のロイヤルパラディンの騎士達と模擬戦をしてみないか？」

「本当か？ ブラスター・ブレードよ」

「ああ。きつとみんなも喜んで相手をするよ」

「楽しみだな。聖騎士達との模擬戦は」

ノヴァグラップルバトルを経て、ヒューマンとバトロイドの壁を越えてすっかり打ち解け合ったブラスター・ブレードとゴールド・ルチルだった。

すると、ロイヤルパラディンの拠点の城から一匹のハイビーストが出て来た。

そのハイビーストは犬型で、深い青色のサイボーグだった。

「君は……ぼーんがる？」

アイチがその名前を呼ぶと、犬型ハイビーストはアイチの前でお座りをした。

その犬型ハイビーストの正体はロイヤルパラディンのハイビースト部隊の内の一体“ぼーんがる”である。

「どうしたの？」

アイチは腰を下ろしてぼーんがるの体を両手で撫でる。

「クウン……」

ぼーんがるは気持ちよさそうな顔をしてアイチに頬擦りをする。

「ははっ、くすぐったいよ」

アイチは微笑むと、城から一人の少女が走ってくる。

「見つけたわよ、ぼーんがる!!」

それは、露出度の高い服に見事な赤い髪をサイドポニーに纏めた可愛らしい少女だった。

その少女はロイヤルパラディンのハイビーストの世話係であるハイドッグブリーダーの一人“ハイドッグブリーダー アカネ”である。

アカネはぼーんがるの周りに、アイチとブラスター・ブレードの存在に驚いて慌てた。

「先導アイチにブラスター・ブレード!? ぼーんがる、あなた何かしたの!？」

「違いますよ。ただ、ぼーんがるが突然僕の前にやって来ただけですから」

「そうですか……全く、急にどこかに行っちゃうんだから……」

アカネは腰を下ろし、目を閉じてぼーんがると心を通わせる。

「……そう。先導アイチをあの場合に連れて行きたいのね」

心を通わせたアカネはぼーんがるの気持ちを受け取った。

「良いわ、ぼーんがる。一緒に行ってあげて」

アカネはぼーんがるを一撫ですると、アイチに視線を向ける。

「先導アイチ。ぼーんがると一緒に“守護竜神殿”に行ってくれない？」

「守護竜、神殿……？」

「ぼーんがるはあなたをそこに一緒に行って欲しいの」

「えっと、わかりました。取りあえず行ってみます」

「ぼーんがるの事、よろしくね」

「は、はい」

アカネはぼーんがるをアイチに託すと、その場を後にして仕事に戻った。

アイチはブラスター・ブレードに守護竜神殿の事を聞く。

「ブラスター・ブレード。守護竜神殿って、何？」

「守護竜神殿……それは、このユナイテッド・サンクチュアリで一番古く、国宝に認定されている建造物の事だ。案内するよ」

ブラスター・ブレードの案内で城から少し離れた丘に石で出来た巨大な建造物がそびえ立つ。

アイチ達は神聖な空気が漂う神殿に足を踏み入れた。

中に入った瞬間、アイチは目を見開いて呟く。

「ソウルセイバー・ドラゴン……」

神殿内の中央にユナイトッド・サンクチュアリを守護する聖なる竜“ソウルセイバー・ドラゴン”の見事な石像が置かれていた。

そして、奥には巨大な壁画が描かれていた。

古のロイヤルパラディンの騎士達が闇の勢力と戦いを繰り広げている壁画だった。

そして、太陽のように眩く温かい光で騎士達の傷を癒しているソウルセイバー・ドラゴンの姿も描かれていた。

「守護竜……そうか、ここはソウルセイバー・ドラゴンを奉る神殿だったんだ……」

アイチが納得したように呟くと、ミサキは何かを見つける。

「壁画に文章が刻まれている……何て書いてあるの？」

それは不思議な形をした見たことのない文字だった。

「ミサキ様、私が読んで差し上げましょうか？」

ロゼンジ・メイガスが名乗りを上げた。

「ロゼンジ、この文字を読めるの？」

「はい。これは古に使われた文字です。幼い頃に習いましたから読めます」

「それじゃあ、お願い」

ロゼンジ・メイガスは頷いて古の文章を読み上げる。

「はい。この壁画の文章にはこう書かれています。“悪しき力により天空が覆われる時、暗雲を切り裂く一条の光が聖域に舞い降りる”。これは、ユナイテッド・サンクチュアリに古くから伝わるソウルセイバー・ドラゴン様が降臨なされる時の伝承です」

読み上げると、プラスター・ブレードは懐かしそうに見る。

「そう言えば、この伝承通りに一度ソウルセイバー・ドラゴンが降臨なされたな……」

「え？ そうなの？」

アイチが思わず尋ねてしまった。

「結構昔の戦いでな。ソウルセイバー・ドラゴンの聖なる光“ホーリー・チャージング・ロアー”は本当に温かくて心地よい光だった。傷を癒し、挫けそうになった俺達の心の勇気を奮い立たせてくれた。まさしく俺達ロイヤルパラディンにとっては女神だったよ」

ブラスター・ブレードの話を聞き、アイチは羨ましくなった。

「会ってみたいな……ソウルセイバー・ドラゴンに」

アイチが心の底から願ったその時。

「ウォオオオーン！」

ぽーんがるが天に向かって突き通るように綺麗な声音で雄叫びを上げた。

「ぽーんがる……？」

すると、突然アイチの目の前が真っ白になった。

「っ！？」

アイチは意識がグラツと揺らぎ、どこかに飛ばされそうな感覚になる。

(何、これ……)

気が付くとアイチは周囲が雲に覆われ、上を向くと青空が広がる世

界に居た。

(空の上………天空?)

アイチは呆然と天空を見渡す。

『先導アイチ………』

(えっ!?)

声をかけられて、アイチが振り向いた先にいたのは、

(ソウルセイバー・ドラゴン………?)

そこに居たのは、アイチがつい先ほど会いたがっていたソウルセイバー・ドラゴンだった。

惑星クレイに存在する全てのドラゴンの中で一番美しく、女性のように豊かな胸囲とくびれた腰………正しくユナイテッド・サンクチュアリを守護する女神竜と呼ぶに相応しい本当に美しいドラゴンである。

『先導アイチ。このユナイテッド・サンクチュア리를………いいえ。

この惑星クレイを護る為に共に戦ってくださいか?』

(は、はい! 僕一人じゃ力不足かもしれないけど、大切な仲間達と一緒に戦います!)

アイチの勇気ある答えにソウルセイバー・ドラゴンは微笑む。

『ありがとう、先導アイチ。もし、あなたが望むならば私も戦地に参り、共に戦いましょう』

(ありがとうございます、ソウルセイバー・ドラゴン！)

『しかし、私を呼び出すには私の力の一部を秘めた獣の存在が必要です。それを忘れずに』

ソウルセイバー・ドラゴンは体から聖なる光を発し、アイチを包み込んだ。

「アイチ！ アイチ！！」

(ミサキさん……？)

アイチは意識を覚まして目を開けると、ミサキの顔が目の前にあった。

「ミサキさん……僕、どうしたんですか……？」

「覚えてない？ 急にアイチが気を失って倒れて……」

今、アイチとミサキが居るのは守護竜神殿の外にある草原だった。少し離れた場所にブラスター・ブレードとロゼンジ・メイガスがくっついて座って話しており、カムイとゴールド・ルチルは寝っ転がって昼寝をしている。

「そうだったんですか……あれ？　もしかして、ミサキさん……」

アイチの後頭部に感じたことのある柔らかい感触がある。

「膝枕だよ。もう少し休んでて良いからね」

ミサキは優しい笑みを浮かべてアイチの頭を撫でる。

「は、はい……」

アイチは目線を反らしてもう少し心地いい膝枕の感触を楽しむ。

目線を反らした先にぼーんがるが自分の隣に伏せて眠っており、アイチは手を伸ばして頭を撫でた。

（ぼーんがる。君がソウルセイバー・ドラゴンと会わせてくれたんだね。ありがとう……）

アイチ達はそこでゆっくりとまったりとした時間を過ごした。

そして、数日後にチームQ4最後の一人、權トシキに会うために“ドラゴン・エンパイア”に向かうのだった。

.

第16話 聖域の守護竜（後書き）

次回、やっと權トシキの登場です！

いやー、長かった……。

第17話 帝国の暴竜（前書き）

タイトル通り、かげろふの指揮官登場です。

そして皆さんが待ちに待ったあの人も登場します。

第17話 帝国の暴竜

アイチとソウルセイバー・ドラゴンの出会いから数日後。

アイチ達はチームQ4最後の一人にしてかけろうのヴァンガード、
權トシキに会うためにドラゴン・エンパイヤに向かう。

しかし、問題があった。

ロイヤルパラディンとかげろうは、古から幾つもの戦争を繰り返して戦い続けた宿敵同士。

よって、今回のドラゴン・エンパイヤに向かうロイヤルパラディンの聖騎士をかけるように刺激を与えないように極力少なくする必要がある。

そこで、今回のアイチの護衛はブラスター・ブレード一人となる。

オラクルシンクタンクからは、ドラゴン・エンパイヤと対等に交渉が出来るアマテラス（今度はちゃんと許可等を取ってある）、ロゼンジ・メイガス、ツクヨミが付き添う。

そして、カムイとゴールド・ルチルも共に行く。

出発する前日、アルフレッドはブラスター・ブレードに不思議な腕輪を渡す。

「何だこれは？」

「技術開発部に造らせた科学魔法具だ。その腕輪に武器と鎧とアンダースーツを収容する事が出来る。必要な時に着ている服と瞬時に交換して戦闘態勢を取ることが出来るわけだ」

「へえー……なかなか便利な腕輪だな」

「ドラゴン・エンパイヤに行く時に鎧を着ていたら、かげろふの戦士にすぐにロイヤルパラディンの騎士とバレてしまうからな」

「わかった。適当な私服を着て行くよ」

ブラスター・ブレードは腕輪を左手首に付ける。

「何かあったらまたアイチの指輪の転移魔法から俺が再び参上するからな」

「出来ればお前が参上せずに事を速やかに終わらせたいな……」

「うーん。そこは俺の嫁さんの交渉次第だな……」

俺の嫁と言い、ブラスター・ブレードは首を傾げたがすぐに納得した。

「ああ……アマテラス殿の事が……そんなにラブラブだったら早くみんなに報告したらどうだ？」

きっとロイヤルパラディンだけでなく、ユナイテッド・サンクチュアリ中が驚愕すること間違いなしである。

「ま、追々な」

アルフレッドはもう少し秘密にしていたいようだった。

「それじゃあ、俺は愛しのアマテラスの所に行くからお前は早く休めよ」

「お前こそ、アマテラス殿と程ほどにな。アマテラス殿が腰を痛めて出発が翌日に延期するなんて御免だからな」

「……………ああ、そうだな」

数秒遅れてアルフレッドはコクンと頷く。

「おい……………お前、どれだけアマテラス殿とヤルつもりだったんだよ……………この変態騎士王め。少しは自重しろ」

ブラスター・ブレードはギロリとアルフレッドを睨み付け、新たな騎士王の称号を与えた。

「……………さらばだ」

アルフレッドはブラスター・ブレードから逃げるように立ち去ってアマテラスの元へ直行した。

翌朝、アイチ達はペンドラゴンに乗り込んでドラゴン・エンパイヤに向かう。

メンバーの中でアマテラスが一番元気そうに見えたのは気のせいではなかった。

惑星クレイ最大級の大陵、ドラゴン・エンパイヤに降り、かげろうの戦士たちが住まう街にたどり着く。

そこは巨大な城壁に囲まれた場所で門から通らないとならない。

「止まれ、貴様等何者だ！」

さっそく門番に足止めを食らい、アマテラスが前に出る。

「我はオラクルシンクタンク社長のアマテラスじゃ。この門を通してもらうぞ」

「オラクルシンクタンク！？ 貴様等、ユナイテッド・サンクチュアリの人間か！？」

「如何にも。早く通すのじゃ」

「そうはいかない！ 貴様等をここで捕まえてやる。衛兵、衛兵！」

門番は衛兵を呼んでアイチ達を囲んだ。

「いきなりピンチだね……」

ミサキは額に手を当ててため息を付く。

「ブラスター・ブレード、いける？」

「アイチと私でなら何とかなる」

アイチとブラスター・ブレードは小声で門番と衛兵を倒す作戦を練る。

しかし、アマテラスとツクヨミが二人を制するように前に出る。

「ここは我らに任せるのじゃ。ツクヨミ、準備は良いか？」

「うん、一拍子！」

ツクヨミは一拍子を呼んで背中に乗って、一つになって満月の女神に変身する。

アマテラスは両手に丸い鏡を出現させて大事そうに持つ。

「八咫鏡」

「月影の勾玉」

二人が呟くと、二人の持つ神器が聖なる光を放つ。

「とっ、捕らえるー！」

門番の一人が言って一斉に襲いかかるが、既に遅かった。

「神気解放波」

八咫鏡と月影の勾玉から波動の衝撃波が発生して門番と衛兵達を全て吹き飛ばした。

今、アマテラスとツクヨミがやったのは“神気”と呼ばれるノープルだけが持つ魔力とは別の“神の力”を衝撃波として放ったのだ。

結果、不思議な力を目の当たりにした門番と衛兵達は恐れて動けなくなつた。

「まあ、こんなもんじゃろ。みんな、早くかけろっこの指揮官殿に会いに行くぞー」

そう言うと、アマテラスはアイチ達を引き連れて堂々と門の中に入つていった。

赤と黒の不気味な雰囲気が彩る城下町を抜け、石で作られた古城に向かう。

当然、門番は衛兵が居たので、アマテラスとツクヨミの神気解放波でまた吹き飛ばして古城に乗り込む。

「アマテラスさんって、結構大胆だね……」

「流石はアルフレッドの嫁と言ったところか……」

アイチとブラスター・ブレードはアマテラスの大胆さに呆然としな

がら付いていく。

そして、アイチ達は古城の中心らしい大広間にたどり着くと、そこには巨大な影があった。

「ふん……来たな、ユナイテッド・サンクチュアリの侵入者め」

その巨体はアイチ達が知る者だった。

「ドラゴニック・オーバーロード……」

巨大にして凶悪な姿をした真紅の竜“ドラゴニック・オーバーロード”。

軍事国家の航空攻撃部隊・かげろうの指揮官。

神速の機動力で戦果を挙げ、戦場では「真紅の死神」「黙示録の風」と呼ばれるほど恐れられている。

「久しいの。指揮官殿」

「ふん……来たな、ババアが」

「誰がババアじゃ!？」

「我より倍以上も年上だからババアがお似合いだ」

「貴様……八咫鏡で焼き尽くして灰にしてやるつか？」

「やれるものならやってみろ、ババア」

会って早々アマテラスとドラゴニック・オーバーロードは一触即発状態。

取りあえず、そんな状態を打破するためにアイチが前に出た。

「あ、あの！ ドラゴニック・オーバーロードさん！」

「誰だ、貴様は？」

「僕はロイヤルパラディンのヴァンガード、先導アイチです！」

「ロイヤル、パラディンだと……？」

ドラゴニック・オーバーロードは眉をピクツと動かす。

「突然の訪問、申し訳ありません。今日は話があつてここに来ました！」

「ほう……話か。言ってみよ」

「はい！」

アイチはドラゴニック・オーバーロードに同盟の話をする。

だがしかし。

「断る」

ドラゴニック・オーバーロードは同盟の話在即答で断った。

「それは……ロイヤルパラディンが嫌いだからですか？」

「ふん。小僧、わかっているな。我らは太古の昔よりロイヤルパラディンと争っていた。今更仲良く同盟なんか片腹痛いわ」

「……それで良いんですか？」

「何だと？」

「それでかげろうが滅んでも良いんですか？」

「小僧、何を言っている？」

ドラゴニック・オーバードは鋭い眼光でアイチを睨みつける。

「確かにロイヤルパラディンとかげろうは昔から争っていたのかも
しれません。でも、いつまでも争っていたらダメなんです。正体不
明の未知の敵と一緒に立ち向かわなきゃ未来は無いと思います」

「黙れ……」

ドラゴニック・オーバードは機嫌を悪くし、腰に携えた剣を引き抜く。

「貴様のような小僧が分かったような口を利くな！！」

ドラゴニック・オーバードはアイチを威圧して剣を振り下ろした。

アイチは威圧されて全く動けずにその場に立ったままだった。

「アイチ!!!!!!」

ミサキが大声で叫ぶ。

「くっ！ 来い、ブラスターブレード!!」

「ゴールド・ルチル、お兄さんを!!」

「分かっている！ ガルダブレード!!」

ブラスター・ブレードは腕輪からブラスターブレードを取り出し、カムイの命を受けてゴールド・ルチルはガルダブレードを鞘から抜く。

急いでアイチの元へ走るが、間に合うかどうか五分五分だった。

「エターナル・フレイム!!!!!!」

その時、真紅の炎がドラゴニック・オーバーロードを襲い、ぶっ飛ばしてアイチへの攻撃を中断させた。

全員が振り向いた先にはもう一人のドラゴニック・オーバーロードが居た。

「まさか……」

「危なかったな、アイチ」

もう一人のドラゴニック・オーバーロードから懐かしい声が響くと、一瞬だけ光り、その真の姿が現れる。

「俺が来たからには、これ以上仲間には手は出させないぜ」

「權君!!」

チームQ4最後の一人にしてかげろうのヴァンガード、權トシキ。

不敵な笑みを浮かべての登場だった。

更に……。

「おい待てよ、權!!」

權の昔からの友人“三和タイシ”が慌てて走ってくる。

「三和さん！」

「おつ、結構集まってるな。行こうぜ、權」

「ああ」

權と三和はアイチ達の元に行く。

ミサキとカムイはアイチの元に行つて、權と三和を迎える。

「權だけじゃなく三和も惑星クレイに来ていたんだね」

「まったく、カッコイイ登場をしゃがつて」

「騒ぎを聞きつけてな。急いできて正確だった」

「それにしても……おい、バーローのとつあん！！」

三和はドラゴニック・オーバーロードを「バーローのとつあん」と呼び、ドラゴニック・オーバーロードは瞬時に立ち上がる。

「誰がバーローのとつあんだ！？」

「そんな事より、オーバーロード！ 貴様、アイチを殺す気か！？」

權は怒りを露わにするとドラゴニック・オーバーロードは何の悪びれもなく剣をアイチに向ける。

「ロイヤルパラディンの身内を葬って何が悪い？　そこにいるブラスター・ブレードも共に焼き尽くしてやるわ！」

ブラスター・ブレードの存在を気付かれ、すぐに腕輪から鎧とアンダースーツを呼び出して装着する。

櫛は再びドラゴニック・オーバーロードに変身してアイチを守ろうとする。

「あんた達、ちょっと下がっていなさい……」

ゾクッ!?

突然、ブラスター・ブレードと櫛は背筋に寒気が走り、ゆっくり後ろを振り向いた。

「ミ、ミサキ殿……?」

「戸倉……?」

そこにいたのは殺気を体中に纏ったミサキだった。

眼光を恐ろしく光らせ、長い銀髪をゆらゆらとなびかせている。

「私のアイチを殺そうとしたあのクズを許さない……私が潰す」

「ミ、ミサキさん、落ち着いてください!」

「アイチ、少し待っていてね。すぐに片づけるから」

もはやアイチの言葉さえミサキには届かなかった。

ブラスター・ブレードと權は邪魔したら危ないと判断し、大人しく下がる。

「おいおい、カムイよ。ミサキちゃんどうしたんだよ？ 私のアイチって……」

「お兄さんとミサキさんはつい先日恋人同士になったんだよ……」

「マジで!?!」

「それでか、戸倉がマジ切れしたのは……」

そして、ミサキは前に出てドラゴニック・オーバーロードをギロリと睨みつける。

「あんたを潰してやるよ。ドラゴニック・オーバーロード……」

「小娘が……容赦はせぬぞ!」

オラクルシンクタンクのヴァンガード・戸倉ミサキとかけろつこの指揮官・ドラゴニック・オーバーロードの戦いが始まるのだった。

第17話 帝国の暴竜（後書き）

次回、まさかのミサキVSドラゴニック・オーバーロード!?

恋する乙女は国土無双と誰かが言っていましたな（笑）

第18話 乙女(阿修羅)VS暴竜(前書き)

ミサキさんVSドラゴニック・オーバーロードです(笑)

ミサキ無双にご期待ください(爆)

第18話 乙女（阿修羅）VS暴竜

ミサキとドラゴニック・オーバーロードの戦いが開幕する。

「ライド、バトルシスター めーぷる」

ミサキは戦闘教団バトルシスターの一人に変身する。

シスターの黒い服ではなく、動きやすい水色を基調とした服で手には巨大な斧“バトルアックス”が握られていた。

「来なさいよ、トカゲ野郎」

ミサキ開いている手で来い来いとドラゴニック・オーバーロードを挑発する。

「ふん！ 言われずとも一撃で仕留めてやる！」

ドラゴニック・オーバーロードは剣を勢い良く振り下ろした。

「ミサキさん！」

アイチが叫ぶが、ミサキは笑っていた。

「せーの！...」

ミサキはバトルアックスを両手で構え、体を回転しながら振り回した。

「にゃあああああつ！」

奇声を発しながら振り回したバトルアックスでドラゴニック・オーバーロードの剣を弾いた。

「なっ!？」

剣はドラゴニック・オーバーロードの手を離れて、飛んでいく。

くるくると回転しながら壁に突き刺さり、ドラゴニック・オーバーロードは啞然とする。

バトルシスター　めーぶるはオラクルシンクタンク有数の怪力の持ち主で、バトルアックスで全てを叩き潰す豪快な戦法をとるのだ。

床に無事に着地したミサキはアイチに笑顔で答える。

「なーに？　アイチ」

「え、えっと……頑張ってください！」

「うん、任せてね」

アイチにパワー(?)を貰い、元気になったミサキはドラゴニック・オーバーロードを見る。

「さて、覚悟はいいかい？」

「小娘……やるではないか。だが、もう手加減はせぬ！」

壁に突き刺さった剣を抜き、ドラゴニック・オーバーロードは再び攻撃する。

「ライド、バトルシスター　ここあー！」

ミサキはここあに変身し、軽やかな動きで剣を回避する。

「うふふふ、あなた、痛いのが好き？」

そのままドラゴニック・オーバーロードの懐に入り込み、服の下に隠し持っているたくさんのナイフを足に向かって投げる。

「ぬおおおおおっ！?!?!?」

足にたくさんのナイフが突き刺さり、ドラゴニック・オーバーロードは苦痛の叫び声を上げる。

「こ、小娘……許さん！　焼き尽くせ、黙示録の炎！」

ドラゴニック・オーバーロードは大人気なく、必殺技のドラゴンブレスを放とうとする。

「ライド、バトルシスター　しょーら」

ミサキはナイフの代わりに重機関銃が握られ、それをドラゴニック・オーバーロードの口に向かって構える。

「エターナル　」

「こっちくんなんっ！」

重機関銃から50口径弾を連射し、エターナルフレイムを放とうとするドラゴニック・オーバーロードの顎と口に弾丸を撃ち込む。

「　　っ!?!?!?」

幸い、ドラゴニック・オーバーロードの皮膚や肉が堅いために弾丸は弾かれたが、想像を絶する激痛が走る。

「ライド、バトルシスター　ばにら!」

ミサキは更に追い打ちをかけるため、二丁の銃剣を持つバトルシスターに変身する。

「うりゃあああっ!」

銃剣から弾丸を乱射し、ドラゴニック・オーバーロードの体全体に撃つ。

(そろそろだね……)

「ライド、バトルシスター　じんじゃー」

体中に様々な爆弾を備えた危険なバトルシスターに変身する。

そして、爆弾をドラゴニック・オーバーロードの周囲にばらまく。

「これで最後だ。ライド!　バトルシスター　もか!」

ミサキはバトルシスターのリーダー格である、もかに変身する。

ミサキは目を閉じて魔法陣を足元に展開する。

「あなたは私に蹴り飛ばされて爆炎に呑み込まれる」

「な、何を言っつて」

「予言者の蹴りは必ずヒットする」

ミサキは爆弾を踏まないようにかわして走り出し、そのままドラゴニック・オーバードの巨大をジャンプして登る。

「しまっ」

「喰らいな、プロフェシークラッシュ！」

ミサキの全力を込めた右足の蹴りはドラゴニック・オーバードの頬にヒットし、そのまま横に倒れる。

バトルシスター もかは高名な予言者であり、予知能力を絡めて放たれる蹴りは如何なる理由があっても確実に対象に叩き込まれるのだ。

そして、倒れたドラゴニック・オーバードの先にあるのはミサキが配置した爆弾。

つまり……。

ドカーン！ ドカーン！！ ドカーン！！！！

「グルブルアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！」

爆弾に衝撃が与えられたことにより、全ての爆弾が連鎖爆発で大爆発する。

ミサキの予言通り、ドラゴニック・オーバーロードは蹴り飛ばされて爆炎に呑み込まれた。

「ライド！ ソードダンサー・エンジェル！！」

ミサキは四枚の翼を背中に生えた剣の天使に変身して高く飛び、爆炎から逃れる。

それからアイチ達のところに戻り、ドラゴニック・オーバーロードを見て咳く。

「……フレイムドラゴンの丸焼き？」

今のドラゴニック・オーバーロードは美味しいかどうかは別として、体中が程よいキツネ色に焼かれている。

「アイチ、どうだった？ 私の戦いは？」

ミサキはアイチに満面の笑みで尋ねる。

「あ、は、はい！ ミサキさんらしい格好良くて、綺麗な戦いでした！」

「ありがとう、アイチ」

ミサキはアイチを抱き寄せてギュッと抱きしめる。

アイチは顔を真っ赤にしてそのままミサキにぬいぐるみのように可愛いがられる。

その光景を見て、櫛とカムイと三和の三人はそれぞれ思った。

（戸倉をアイチ絡みで怒らせない方が身のためだな……）

（羨ましいです、お兄さん。俺もいつかエミさんと……）

（災難だな、バーローのつつあん……）

ちなみに、ブラスター・ブレードとロゼンジ・メイガスは、

（あのドラゴニック・オーバーロードを一人で……ミサキ殿の強さは本物だな……）

（良いな……ミサキ様、私もブラスター・ブレード様とイチヤイチヤしたいな……）

全く別のことを考えていた。

「ふはははは！ ざまあみろなのじゃ、オーバーロードよ！」

「アマテラス……笑い過ぎよ」

（ババアって言われたのがそんなに腹が立ったの……？ まあ、私も似たようなもんだけど）

アマテラスは無様な姿のドラゴニック・オーバーロードを見て大笑いをし、ツクヨミは隣で苦笑を浮かべている。

そこに、タツタツタツと駆け足で走ってくる小さな影があった。

「オーバーロード！ 大変じゃー！」

それはドラゴニック・オーバーロードに仕えるサラマンダーの少年“希望の火 エルモ”である。

「どうした……？ エルモよ……」

ドラゴニック・オーバーロードはエルモの一声で復活した。

「大変じゃ。以前トシキとタイシを襲いに来た奴らが軍を引き連れて襲ってきたのじゃ。その数は約十万！」

「何だと！？ すぐに全てのかげろっの戦士達に伝える、臨戦態勢を取れと！」

「わかったのじゃー！」

エルモは頷くと、急いで別の場所へと走った。

そして、ドラゴニック・オーバーロードはアイチ達を見る。

「貴様等はここにいろ。手出しは無用、我らかげろっの戦いを見せつけてやるわ」

釘を刺すようにそう言い残すと、ドラゴニック・オーバーロードは剣を鞘に納めてその場を後にする。

一方、エルモは古城にある塔のてっぺんに登った。

「行くぞ……はあっ！」

エルモは体中から炎を放出し、空に花火を打ち上げ、火でかげろうに伝わる独特の文字で「緊急事態発生、臨戦態勢を取れ」と描いた。

その瞬間、かげろうの古城と広い城下町が騒ぎ始めた。

これから起きる戦争の準備を済ませるために、かげろうの戦士や竜たちが各自、自分に割り振られた役目をしていく。

そして、僅か一時間にも満たない時間で古城と城下町と城壁、そして空に兵を配備して、臨戦態勢の準備を整えた。

遂に、ヴァンガードを狙う謎の敵との初めての戦争が始まることとするのだった。

.

第18話 乙女(阿修羅)VS暴竜(後書き)

次回はかなり難しくなりそうです。

時間をかけて書いていきます。

第19話 かげろふの勇士達(前書き)

久々の更新です。

最近忙しくて全く更新できませんでした？

ドラゴン・エンパイヤが生み出した脅威の戦闘狂“フレアウィップ・ドラゴン”が暴れていた。

「脈打て灼熱の魔鋼、ビリオンフレアウィップ！」

炎を吸収する超鋼鉄“魔炎鋼”を使用した蛇原剣で魔物を薙払っていた。

他にも、超硬質の装甲を鱗として重ねて纏う重量級のフレイムドラゴンの“ボーテックス・ドラゴン”。

「戦場を渦巻く地獄の業火、バーニング・ヘル！」

高密度の魔力を秘めた灼熱のドラゴンブレスで魔物を焼き尽くす。

竜鱗の鎧を纏うドラゴンナイトの“ドラゴンアーマード・ナイト”。

「ファイヤーデザイヤー！」

ドラゴンの如き力で魔物を葬り、彼のドラゴンの鎧を纏ったその力はドラゴンと同等と言われている。

まだ子供らしさが抜けない竜騎士の少年“ドラゴンナイト アリフ”が剣を振り回しながら魔物を切り裂く。

「行くぜえっ！ ター、バー、俺に続け！！！」

アリフの後を禍々しい気を放つ魔神の鎧“鎧の化身 バー”と、禍々しい眼を持つ魔神の槍“槍の化身 ター”が後に続く。

更に、巨大な二挺拳銃で早撃ちを得意とする竜騎士“連撃のサザールランド”がありったけの魔力を込めた弾丸で敵を撃ち抜く。

「へっ、オレ様の連撃の弾丸に酔いしれな！」

「もうっ！ サザールランド！！」

「は、はいっ！？」

カッコ良く決めるサザールランドだが、怒りを含んだ可愛らしい声に反応しては背筋を伸ばして立つ。

その声の主は戦場に似合わない可愛らしい少女の“従者 レアス”。

サザールランドの幼なじみで、彼の二挺拳銃の弾丸を作っているのは魔導士兼従者のレアスである。

一つ一つ丹念に作り上げる弾丸は、芸術品と言われる程の一品であり、高密度かつ高純度の魔力を内包している。

「サザールランド、少し無駄撃ちが多いよ！ もっと正確に敵を狙ってよー！」

「こ、これでも狙って撃っているんだぞ！」

「言い訳しない！ 全く、サザールランドは戦いになると夢中になるんだから……」

そして、戦闘の度に無駄撃ちをするサザールランドにレアスが説教を

する姿が度々目撃されている。

「おっ！？ レアス、危ねえ！」

「えっ？ キャツ！？」

「喰らいな！」

サザールランドはレアスを抱き寄せてレアスに襲いかかろうとした魔物を撃つ。

「大丈夫か？ レアス」

「う、うん……ありがとう、サザールランド」

サザールランドに抱き寄せられたレアスは頬を赤く染めながらコクコクと頷く。

「よし。それじゃあ、行くぜ！」

「うん！ 魔力圧縮、弾丸精製！」

サザールランドはレアスを守りながら魔物を再び二挺拳銃で撃ち続ける。

対するレアスはサザールランドに守られながら弾丸を作り続ける。

サザールランドとレアスはかげろつで最高にして最強のコンビである。

「迎え撃て!!!」

かげろうの対空迎撃大隊の指揮官“剣帝 ドラゴニック・ヴァルブレイド”が超重大剣“デストラクション・ブレイド”を掲げて命令する。

先陣を切るのは、竜の背に乗って戦う竜騎士“ドラゴンナイト ネハレン”と戦士と竜が融合したハイブリッドワイバーン“ワイバーンストライク プラジュリー”である。

「我らドラゴンナイトの力を貴様等に見せてやる!」

「人竜一心の極意を今ここに! ヴァーティカルダイブ!」

それに続くのは縦横無尽に空を翔ける暴走僧兵“ドラゴンモンクゴクウ”である。

「斉天大聖の力を見よ! 伸びろ、如意金箍棒!」

伸縮自在の武器“如意金箍棒”で魔物を貫く。

そして、彼らを補佐するのが“グレイプショット・ワイバーン”のワイバーン部隊である。

かげろうの怒涛の攻めに魔物の軍団は次々とやられていく。

その光景を古城にいるアイチ達は映像で見ていた。

「これがかげろうの力……」

「流石は世界最強の軍隊の一つと言われるだけはあるな……」

カムイとゴールド・ルチルはかげろうの戦いに少々圧倒されていた。

しかし、アイチは腑に落ちない表情を浮かべていた。

「アイチ、どうした？」

權がアイチの表情に気づいて尋ねた。

「うん……どうしてだか分からないけど、あの魔物の軍団が何か変な感じがするんだ」

「変な感じだと？」

「魔物は攻めているんだけど全然気迫を感じられないんだ。まるで、ワザとやられているみたいなのがするんだ……」

「……確かに」

言われてみれば魔物達はただやられているように見える。

かげろうの竜と戦士は確かに強い。

だが、それでも兵の数は明らかに向こうの方が上。

何らかの作戦を立てて攻めればかげろうも苦勞するはずだが、魔物達はただ向かってきて攻撃するだけ。

「まさか……」

權はハツと何かに気づき、その場から走り出した。

「權君!？」

「ドラゴニック・オーバーロードのところに行ってくる! この戦は畏だ!！」

「えっ!?!? 畏!?!?」

「ライド! ドラゴンナイト ネハーレン!」

權はドラゴンナイト ネハーレンに変身し、現れた竜の背中に乗ってドラゴニック・オーバーロードの元へ向かった。

「そろそろか……」

ドラゴニック・オーバーロードは戦況を見て呟いた。

(だが、この妙な感じは何だ……?)

「オーバーロード!!」

ドラゴンナイト ネハーレンの姿に変身した權をドラゴニック・オーバーロードはすぐに気付いた。

「トシキか……どうした?」

「オーバーロード、この戦は畏だ!」

「何だと……?」

その時、戦場に複数の紫色の閃光の柱が天を貫くように立ち上り、巨大な幾つもの魔法陣が展開された。

魔法陣は戦場に散った魔物の魂と屍を全て吸収し、その不気味な輝きを増した。

そして、無数の魔法陣から何かが召喚された。

「オーバーロード……あれは……」

「大量の死者の魂と屍を対価に創られる禁忌の邪悪竜……“ダークネス・ヘル・ドラゴン”……」

それは黒と紫色が混じった闇の気を纏った不気味なドラゴンだった。

それが数百体も降り立っており、かげろうの古城を見つめていた。

(くっ……十万の魔物兵はこちらの戦力の体力を削り、ダークネス・ヘル・ドラゴンを呼ぶための生贄と言うわけか……何とむごいことを……)

冷酷な作戦を実現するかげろうの指揮官のドラゴニック・オーバードでさえ僅かな怒りを覚える。

数百体のダークネス・ヘル・ドラゴンは空に向かって闇と毒を含んだドラゴンブレスを放出した。

それは、この戦争の第二幕が開始される合図でもあった。

第19話 かげろうの勇士達（後書き）

次回、かげろうがピンチになります！

その時、アイチが取る決断とは……？

お楽しみに！

番外編 聖夜の宴（ユニット編）（前書き）

クリスマスなので急遽執筆しました。

今回はユニットを中心としてユニット編で、明日にヴァンガードを中心としたヴァンガード編を更新します。

若干本編のネタバレがあるのでご注意ください。

番外編 聖夜の宴（ユニット編）

ユナイテッド・サンクチュアリにて一年に一度の大切なイベントが始まるうとしてている。

「……………聖竜祭？」

惑星クレイに選ばれたヴァンガードのアイチ、ミサキ、櫛、カムイ、三和、エミが首を傾げてアルフレッドの話を聞く。

「ああ。聖竜祭はソウルセイバー・ドラゴン様を始めとする多くのユナイテッド・サンクチュアリの守護竜の誕生したと言われる日に行われる祭りなんだ」

「何だか、僕たちの世界の神様の生誕を祝うクリスマスみたいだね」

「まあ、似たようなものだな。最初に儀式を行って、後はわいわいやるパーティーだからな」

アイチが例えを言い、アルフレッドは苦笑を浮かべると、背後に魔法陣が現れる。

「アルフレッド〜！」

魔法陣からアマテラスが現れて恋人のアルフレッドを後ろから抱きつく。

「……………アマテラス、仕事はどうした……………？」

「そんなのはとつと片付けて来たのじゃ！ ノルマは達成したから追加の仕事なぞ知らん！」

「まあ、それなら良いけど……今みんなに聖竜祭の話をしていただけだ」

「おお、聖竜祭か！ それなら……ミサキ、エミ！」

「何？」

「はい？」

「今から聖竜祭当日に着る服を選びに行くぞ！」

アマテラスはアルフレッドから離れてミサキとエミの手を掴む。

「レッツゴー、なのじゃ！」

「えっ、ちよっ、きゃああああ！？」

「ふにゃああああ！？」

物凄いスピードでアマテラスは走り、ミサキとエミはそのままショッピングに連れ去られた。

残された男達は啞然とし、アルフレッドは咳払いをして気を取り直す。

「ゴホン！ まあ、とにかく……最近戦いが続いていたから、聖竜祭を楽しんでくれ」

「うん。わかったよ、アルフレッド」

「よっしゃあ！ 聖竜祭でエミさんと距離を縮めるぞ！」

エミに絶賛片思い中のカムイは色々と燃えている。

「權、お前もちゃんと参加しろよ。逃げようとしたら無理やりでも連れてくるからな」

「……仕方ないな」

三和に釘を差され、權はため息をつく。

そして、数日後の聖竜祭当日。

ユナイテッド・サンクチュアリはお祭りムードでどこもかしこも明るくて楽しい雰囲気にもまれていた。

儀式が始まるのは夜で、儀式を執り行うロイヤルパラディンとオラクルシンクタンクは朝から大忙しで準備を行う。

アイチ達も準備を手伝い、儀式が始まる数時間前に準備が完了した。

そして、日が落ち、夜になると聖竜祭の儀式が始まる。

聖竜祭は守護竜神殿の前で行われ、果物などの作物を貢ぎ物として捧げ、全員で空に向かって聖歌を歌う。

聖歌を歌い終わると、これで儀式が終わり、みんなが楽しみにして

いたパーティーが始まる。

アルフレッドが代表で乾杯の言葉を言う。

「では、みんな。本日は無礼講だが、ソウルセイバー・ドラゴン様達に感謝しながら楽しもう。乾杯！」

『乾杯!!!』

グラスを掲げて聖竜祭の参加者は飲み物を飲んでパーティーを始める。

ブラスター・ブレードは同期の騎士であるギャラティンとゴードンと一緒に果実酒を飲んで話をする。

「そう言えば、ブラスター・ブレード。最近オラクルシンクタンクのエルフの可愛い子ちゃんと付き合ってるらしいじゃないか」

ゴードンは肘で突きながらニヤニヤとして茶化す。

「まあな……運命で決まっていた恋人らしいが」

ブラスター・ブレードは頬を指で掻きながら答える。

「くうっっ！羨ましいじゃねえか！なあ、ギャラティン！」

「んっ……そうだな」

ギャラティンはゆっくり頷く。

すると、ギャラティンの体を後ろからガシツと掴まれる。

「何者!?!」

「見つけたぞ、ギャラティン!」

「もう逃がさないわよ」

「あうっつ! ギャラティン様!」

それはバトルシスターズのもか、ここあ、しよこらの三人だった。

「ちょっと私たちにつき合いなさいよ」

「答えは聞いてないけどね」

「い、行きましょう!」

「ま………待て! 二人共、助け」

ビュウン!…!!

ギャラティンはその場から一瞬でバトルシスターズに連れてかれて
跡形もなく消えている。

「………モテモテだな、ギャラティン」

「そうだな………ブラスター・ブレードも彼女さんの元へ行ったらど
うだ?」

「いいのか？」

「何だか一人で飲みたくなってな。俺のことは気にせずに行けよ」

「わかった。行ってくる」

「おっ」

ブラスター・ブレードはロゼンジ・メイガスを探しに行き、ゴードンは大きく息を吐いてグラスに入った果実酒を一気に喉に注ぐ。

(全く……ブラスター・ブレードとギャラティンに女がいるのに居ないのは俺だけか……寂しいねえ……)

独り者でそんな事を心の中で呟いていると……。

「何暗そうな顔をしているんだ？ 騎士様」

「君は……バトル、シスター……？」

ゴードンに話しかけたのは、四つの銃剣を携えたバトルシスターの、ばにらだった。

「もしかして、今は一人？ 何なら私がお付き合いしようか？」

ばにらがニツと笑みを浮かべると、ゴードンは少し恥ずかしくて頭を掻きながら答える。

「えっと……是非頼む。俺は真理の騎士 ゴードンだ」

「私はバトルシスター ばいら。よろしくな、ゴードン様」

何だかんだで、ゴードンにもお相手が見つかったようで、二人はグラスに果実酒を注いで乾杯した。

一方、アルフレッドとアマテラスは……。

「にゃはは〜 アルフレッドオ〜」

「アマテラス、まるで猫みたいだな……」

酒に強いアマテラスだが、何故か今日は酔いがすぐに回ってアルフレッドに猫のように甘えてくる。

その光景を見たアマテラスの執事のフェイスフル・エンジェルは遠くからアルフレッドに殺気を放っていていく。

「アルフレッド……殺ス殺ス殺ス殺ス殺ス……」

「いい加減にしないで、フェイスフル。少しは社長の幸せを願いなさ〜」

セレクター・エンジェルがため息をつきながら持ち前のスカーフでフェイスフルの体を縛って動けなくする。

アルフレッドは猫化しているアマテラスの頭を撫でる。

「さーて、俺の猫ちゃん。どうして欲しいのかな？」

「うふふ〜……早くアルフレッドとの赤ちゃんが欲しいにや〜」

『『『ハアアアアアアアアアアツ?!?!?!?』』』

アマテラスの超弩級爆弾発言に近くにいたロイヤルパラディンの騎士達とオラクルシンクタンクの社員達は吹き出した。

それを聞いたそして、フェイスフル・エンジェルが遂にブチ切れた。

「アルフレッドオオオオオオオオオオ!!」

セレクター・エンジェルのスカーフを無理やり千切ってナイフとフォークを構えて襲いかかる。

「お、お逃げください！ 社長！ 騎士王様!!」

セレクター・エンジェルが慌てて叫んだ。

しかし、アマテラスはアルフレッドの首に腕を回すとそのままアルフレッドの唇にキスをする。

「んう……ちゅっ……アルフ、レッドオ……」

「んくっ……はむっ……アマ、テラス……」

そのまま二人は激しいディープキスをし、それを目の当たりにしたフェイスフル・エンジェルは石のように固まって撃沈した。

（心配なんて最初いらなかったわね……）

セレクター・エンジェルは撃沈したフェイスフル・エンジェルを回収した。

アルフレッドとアマテラスはディープキスを止めて唇を離す。

そして、アルフレッドはアマテラスの耳元で優しく囁いた。

「今日も寝かせないからな、俺の可愛い子猫ちゃん」

「にゃあ……嬉しいにゃあ〜」

アマテラスは再びアルフレッドに抱きついた。

そして、ブラスター・ブレードとロゼンジ・メイガスはアルフレッドとアマテラスのラブラブっぷりに苦笑を浮かべる。

「全く、バカップルだな。あの二人は……」

「でも、ちょっとアマテラス様が羨ましいです。あんなに大胆に騎士王様に迫って……」

ロゼンジ・メイガスは果実酒をジッと見つめてそのままグイッと飲み干した。

「ロ、ロゼンジ!? そんなに急に飲んじゃ……」

「……おい、ブラスター・ブレード!!」

「はいい!?!」

急にロゼンジ・メイガスの口調が一変し、ブラスター・ブレードは驚愕する。

ロゼンジ・メイガスはブラスター・ブレードを抱き寄せて顔を胸に押し付ける。

「えへへ……さーて、どうしようかな……?」

一気に果実酒を飲んでロゼンジ・メイガスも酔ったらしく、性格が変わり果ててしまったようだ。

「今から部屋に戻って……今夜は私が攻めようかな」

寧ろミサキに近い性格になってしまった方が正しいかもしれない。

「あ、あの……ロゼンジさん？」

「と言うわけだ。今から愛を育みに行くぞ、ブラスター・ブレード！」

「えっ、ま、待ってください！ ロゼンジさん!？」

そして、ブラスター・ブレードはアイチみたいになり、ロゼンジ・メイガスはブラスター・ブレードを抱き上げてそのまま自分の部屋にお持ち帰りをした。

翌朝、二日酔いで目覚めたロゼンジ・メイガスは何をしたのか全く覚えておらず、仕返しにブラスター・ブレードが襲い返したのでした

番外編 聖夜の宴（ユニット編）（後書き）

ロゼンジ・メイガスは酔うと性格がミサキみたいになりました（笑）

今回はアイチ×ミサキさん中心のヴァンガードを書きます。

番外編 聖夜の宴（ヴァンガード編）（前書き）

ちょっと忙しかったので短めになってしまいました。

申し訳ありません。

今回はヴァンガード中心です。

番外編 聖夜の宴（ヴァンガード編）

聖竜祭にてアイチとカムイはミサキとエミのドレスアップを待っていた。

「ミサキさん、まだかな……」

「エミさん、どんな服を着るのかな……」

すると、向こうからミサキとエミがやってくる。

ミサキは少し拒むようにして、エミが手を引っ張っている。

「ア、アイチ……」

「二人共、お待たせ〜！」

アイチとカムイはやって来たミサキとエミの姿に一瞬固まった。

ミサキはピンク色の大人っぽいスリットが入ったロングドレスで、エミは水色の可愛いらしいショートドレスだった。

ちなみにこの二人のドレスはアマテラスが選んだ物であり、ミサキとエミのイメージによく似合っている。

「え、えつと……どうかな……？」

「アマテラスさんを選んでもらったんだよ。可愛いでしょう？」

ミサキは恥ずかしそうにし、エミは満面の笑みでドレスを見せる。

「う、うん……とっても綺麗ですよ、ミサキさん！」

「エミさん！ ま、まじで可愛いです！」

アイチとカムイはミサキとエミのドレス姿に見とれてすぐに褒めた。

「あ、ありがとう、アイチ」

「うん。ありがとう、カムイ君！」

褒められたミサキとエミは頬を赤く染めながら礼を言う。

すると、会場に緩やかな美しい音楽が流れる。

会場の中央でダンスパーティーが始まり、何故か音楽を聞いたアイチ達の体が勝手に動いてそのままダンスパーティーに向かう。

「えっ？ な、何ですか!？」

「わわっ？ か、体が勝手に!？」

「ちょ、ちょ、ちよっとおおお!？」

「ええっ？ な、何で？」

アイチはミサキの、カムイはエミの手を取ってダンスを始める。

流れる音楽にはユナイテッド・サンクチュアリの古の魔法が付加さ

れており、聞いたカップルは自然に体が動いてダンスを始めるのである。

アイチとミサキ、カムイとエミは魔法の音楽によりそれぞれ見事なダンスを繰り広げる。

「ミサキさん、本当に綺麗……女神みたいです……」

「ほ、褒めすぎだよ……アイチ……」

そしてアイチはミサキの耳元で優しく、甘く囁いた。

「惚れ直しましたよ。大好きです、ミサキさん」

「あう……」

ミサキは顔から耳まで真っ赤にして、顔を隠すようにアイチに密着しながらダンスを続けた。

一方、カムイはずっと想い続けているエミと素敵なダンスを出来てもはや感無量だった。

（ああ、もう最高だよ！ エミさんところろして手を繋いで一緒にダンスが出来るなんて！！）

「あ、あの、エミさん！」

「ん？ なーに？ カムイ君」

「お、俺はとっても嬉しいです！ エミさんとダンスが出来て！」

「え、そ、そうかな？　ありがとう、カムイ君。私もとっても嬉しいよー！」

エミは少し頬を赤く染めながらカムイに可愛い笑顔を見せる。

こうしてアイチとミサキとカムイとエミは初めてのダンスパーティーを楽しんだのだった。

そして、遠くからアイチ達のダンスを見ていた權と三和はジュースと食事を味わいながら楽しんでいる。

「楽しんでるな、アイチとカムイ……」

「そうだな。全く、羨ましいぜ。ミサキちゃんとエミちゃんとああやってダンスが出来るなんてよ」

三和は權の肩に腕を乗せてぼやくように言う。

「別に……俺はそう思わないな」

「おいおい。權は可愛い女の子の彼女とか欲しくないのか？」

「要らないとは言わないが、俺みたいな男を好きになる物好きがいると思うか？」

無愛想でヴァンガード馬鹿なのを自覚しているのか、權がそんな事を言つが三和は頭に手を添えてため息をつく。

(全く……高校でお前にファンクラブが出来ているほどの人気者だと言つのを知らないな……)

「この鈍感野郎が……」

「ん？ 何のことだ……？」

權は首を傾げると、三和は軽く手を振つて応える。

「良しさ。多分お前に合う女の子がきつと見つかるぞ」

「ん？ ああ……」

「とにかく飲もうぜ！ 酒とかもあるんだからよ！」

三和は果実酒を權のグラスに注ぎ、權はそのまま無言で飲んだ。

ちなみに、權は酒に強くて全く酔わなかったらしく、三和は翌日一日酔いに陥って苦しんだのだった。

パーティーが終わり、部屋に戻ったアイチとミサキはベッドに横たわっている。

「楽しかったですね、聖竜祭……」

「うん。私はアイチとダンスが出来てとっても嬉しかったよ……」

「ミサキさん……」

アイチはミサキを抱き寄せてギュッと抱き締める。

「大好きです……愛しています、ミサキ……」

ミサキにすりすりと頬ずりをするアイチ。

「もしかして、アイチ……酔ってる?」

明らかに様子が変なアイチにミサキは啞然とする。

「そうかもしれないね……お酒をちょっと飲んだから……」

「じゃあ……良いよ、来ても」

ミサキは妖艶の笑みを浮かべてアイチを受け入れる。

「ミサキ……ありがとう……」

アイチはミサキに甘いキスをしてそのまま押し倒した……。

アイチとミサキは聖なる夜に二人の愛が深まったのだった。

番外編 聖夜の宴（ヴァンガード編）（後書き）

次回はかげろつ編の続きです。

年が明ける前にかげろつ編を終わらせたい！！

第20話 聖域の援軍（前書き）

体調不良でぶっ倒れて更新がなかなか出来ませんでした。何とか更新できました。

年明けまであと数日、これが最後の更新になるかわかりませんががんばります！

第20話 聖域の援軍

十万の魔物兵の魂と屍を対価に創り出された禁忌の邪悪竜、ダークネス・ヘル・ドラゴン。

数百体のダークネス・ヘル・ドラゴンはドラゴンブレスを吐き終えると、かげろうの竜と戦士達を睨みつける。

「……！！」

そして、獲物を見つけたように牙を剥き出しにして襲いかかる。

「エターナル・フレイム！！！」

その時、地獄の業火が数体のダークネス・ヘル・ドラゴンを呑み込んで焼き尽くした。

「怯むな！ 我らがけるうの力を見せつけるのだ！！」

指揮官であるドラゴニック・オーバード自ら戦場に赴いた事によって戦士達の志気が高まった。

「バラバラに別れて戦え！ 纏まっていたら奴の餌食になる！ 攻撃を脚と翼を重点的に狙って動きを極限まで削れ！」

そして、的確な指示を出してダークネス・ヘル・ドラゴンと戦いを開始する。

その頃、權は一度アイチ達のところに戻ってこれからどうするか相談していた。

そして、アマテラスはダークネス・ヘル・ドラゴンの事を知っており、その説明をする。

「ダークネス・ヘル・ドラゴンは大昔の馬鹿な魔術師と錬金術師が考え出した禁断の術で、大量の死者の魂と屍を必要とする。だが、使える奴は殆どいないはずじゃ……」

「アマテラスさん、あの竜の弱点は無いんですか？」

アイチが尋ねるとアマテラスは腕を組んで言う。

「あるにはある。だが、かげろふの奴らでは無理じゃ」

「それはどういうことだ？」

權は不機嫌な表情を浮かべる。

「邪悪竜は聖なる光……つまり、光の力に弱いのだじゃ」

「と言っことは……」

「うむ。ロイヤルパラディンの存在が邪悪竜にとっての最大の弱点じゃ」

「それなら！ アルフレッド、応答して！」

アイチは指輪の通信機能でアルフレッドと連絡を取るが……。

「アルフレッド！？ 返事をして！」

どうやら執務室には居ないらしく、連絡を取る事ができない。

「だったら……！」

アイチは突然走り出してどこかに向かおうとする。

「待て、アイチ！」

權がアイチの腕を掴んでアイチを止める。

「どこに行くつもりだ！？」

「決まっているよ。僕がロイヤルパラディンの騎士に変身して邪悪竜を倒す……！」

「やっぱりな……だったら、俺も行く！」

「私も行くよ、アイチ！ 私もアイチと一緒に戦うよ！」

「お兄さん、俺も行きます！」

「權君、ミサキさん、カムイ君……」

權とミサキとカムイも共に戦うと意志がアイチの心に響いた。

「みんな……うん、行こう！」

「待て、アイチ。ロイヤルパラディンの光剣を忘れるなんて酷いじゃないか」

ブラスター・ブレードはアイチの肩を軽く叩いて言う。

「ブラスター・ブレード様、私も同行します」

「ミサキを守るために私も行くー！」

「カムイの護衛の私も当然参るぞ」

ロゼンジ・メイガス、ツクヨミ、ゴールド・ルチルも共に行く意志を見せる。

「ちよつと待ったあー！ これは俺も行かなきゃならない空気じゃないの！？ 俺も行くぜ！」

遅れて三和も共に行く。

そして、最後にアマテラスは……。

「すまぬが、先に行っていてくれ。やる事が出来たからの」

アマテラスは八咫鏡を取り出すと、部屋中に広がるほどの巨大な魔法陣を展開する。

「アマテラス様、この魔術は……?」

「なーに、ちょっと援軍を呼ぶだけじゃ。少し時間がかかるから早よ行くのじゃ」

アイチ達は頷き、ヴァンガードの古城を飛び出して変身する。

「ライド！ 騎士王 アルフレッド!!」

アイチはアルフレッドに変身して現れたライオンメイン・スタリオンの背に乗る。

「ライド！ ドラゴニック・オーバーロード!!」

權はドラゴニック・オーバーロードに変身して空を飛ぶ。

「ライド！ CEO アマテラス!!」

ミサキはアマテラスに変身する。

「ミサキさん!!」

「アイチ!!」

アイチはミサキの手を掴んでそのまま引っ張り上げてライオンメイン・スタリオンに乗せる。

「ライド！ アシユラ・カイザー！！」

カムイはアシユラ・ガイザーに変身してアイチ達の後を追う。

「ライド！ ドラゴニック・ウォーターフォウル！！」

三和は四大元素の一つ、水を司る水神の一柱であり、帝国の守護竜
“ドラゴニック・ウォーターフォウル”に変身して權と平行して飛
ぶ。

ドラゴニック・オーバーロードはかげろうの戦士達に指示を送りな
がら戦っていたが、何時の間にか数十体のダークネス・ヘル・ドラ
ゴンに囲まれていた。

「これは少し骨が折れそうだな……」

ドラゴニック・オーバーロードは剣を構えて相手の動きを伺う。

「グレートソードアタック！！！！」

「エターナル・フレイム！！！！」

突然、光の斬撃と地獄の業火がドラゴニック・オーバーロードを囲んだ半分のダークネス・ヘル・ドラゴンを倒した。

「何……！？」

「とつつあん！ 無事か！？」

三和がドラゴニック・ウォーターフォウルを使い、水の壁を作り出してダークネス・ヘル・ドラゴンを弾き飛ばす。

「貴様等、どうしてここに！？」

「あなた達を助けにきたんです。ダークネス・ヘル・ドラゴンは聖なる光の力に弱いから……」

「ちっ、余計な世話だ！ ロイヤルパラディンのヴァンガード、貴様の力などいらんわ！！」

「オーバーロード、そんな事を言っている場合じゃないだろ！？」

權が反抗的なドラゴニック・オーバーロードに口論するが、聞く耳すら持っていなかった。

「所詮、我らかけろつとロイヤルパラディンはいまみえぬ存在。邪魔するなら先に貴様を排除してくれるわ！！」

相変わらずロイヤルパラディンに対して敵意を剥き出しにするドラゴニック・オーバーロードに遂にアイチの堪忍袋の緒が切れた。

「……いつまであなたはそんな下らないことを口に行っているんです

か!！」

「なっ!?!? 下らないだ?!?!?」

「ええ、そうですね。ここまで来てそう言う態度を取るあなたにうんざりです!! 僕達は……この世界を、惑星クレイを守るためにここに呼ばれて来たんだ!! あなたも惑星クレイの住人の一人なら、少しはこの世界を守ろうという意志を見せてください!!!」

普段のアイチからは想像出来ない大声と強気の発言にミサキ達は呆然とする。

「もう、あなたの意志や言葉なんて関係ない! 僕は僕自身の意志でかけるうのみんなと仲間達を守ります!!」

剣を構え、揺るぎない自分の意志を示したアイチ。

その時、指輪が輝きを放ち、声が響いた。

「アイチ。それでこそ俺達のヴァンガードだ!」

指輪から発動された巨大な魔法陣が展開され、中からライオンメイ・スタリオンに跨ったアルフレッドが召喚される。

「アルフレッド!」

「すまない、アイチ。遅くなってしまった。だが、指輪を通してお前の声は俺達に届いた。そのお陰で……」

アルフレッドは笑みを浮かべると、魔法陣から複数の影が現れた。

「あれは……!?!」

アイチが驚くのも無理は無かった。

何故なら魔法陣からロイヤルパラディンの勇敢なる騎士達が勢揃いしていたからである。

「さあて、暴れまくるか!!」

仲間達の兄貴分の巨漢の重騎士“斬魔の騎士 ローエン格林”。

「我が誇り、この剣に込めて!」

蒼き炎の闘気を纏う誇り高き騎士“蒼炎の騎士 デイナス”。

「罪深き竜よ……死より重い罪を償え!」

司法書を手放さず「裁判官」の資格を持つ騎士“断罪の騎士 ボールス”。

「我が剛剣で敵を粉碎する!」

重厚な鎧を身に包む重騎士“剛剣の騎士 カラドック”。

「行くぞ、友よ……」

エルフと人間の血を受け継ぎ、美しきペガサスに跨る騎士“孤高の騎士 ガンスロット”。

「参る……」

「行くぜ、ギャラティン！」

沈黙の騎士　ギャラティンの側にいるのは、真理を追い求める光の騎士“真理の騎士　ゴードン”。

「真紅の炎で闇を浄化する！」

「我が灼熱の爆炎で邪悪なる闇を焼き尽くす！」

「僕が力を貸して上げるんだから、この戦は勝って当たり前さ！」

燃える真紅の翼を持つサラマンダーの“紅蓮の蝶　ブリジット”と、炎を剣に宿して戦うサラマンダーの戦士“焔の剣士　バロミデス”とその側にいるのが雲のようにモコモコした毛皮をしたハイドック“といぶがる”。

「私の閃光の盾でみんなを守護します！」

ロイヤルパラディンで数少ない守備を担当する女性騎士“閃光の盾　イゾルデ”。

「行きますよ、セイラン先輩！」

「気を抜くなよ、アカネ！」

ハイドックブリーダー　アカネと一緒にいるのは国内トップクラスの優秀なブリーダーである“ハイドックブリーダー　セイラン”。

「ハイドック部隊、勇敢なる騎士達を援護しろ！」

「待たせたな、ブラスター・ブレード！」

「私達が来たからにはもう大丈夫よ！」

「ウォオオオー！ー！」

兵器武装を施されたサイボーグ犬にしてハイドック部隊のエース“
ぱーくがる”を筆頭についんがる、ふろうがる、ぱーんがるが側に
いる。

「友よ、共に参るぞ！」

獣達と深い絆で結ばれ、獣の力を宿した騎士“獣騎士 ガルモール”
は白き雪のような獣“すのうがる”と蒼空のように蒼き獣“ぶる
うがる”を従えている。

「中央突破で我らの道を切り開く！」

「私も共に道を切り開くぞ！」

長杖を携えた最強の切り込み隊長のジャイアント“ギガンテック・
チャージャー”とロボットのような外見をしたジャイアントの“ギ
ガンテック・ドージャー”。

「俺の聖なる雷で騎士王を……仲間達を守ってみせる！」

そして、騎士王直下親衛隊の一員にして「聖竜騎士」と呼ばれる巨
大な白き竜“ホーリーディザスター・ドラゴン”。

「最初はかげろつを助けに行くのを渋っていたが、アイチの決意ある言葉でみんなの心が突き動かされたんだ。ありがとう、アイチ」

アルフレッドはアイチの肩を叩き、勇気と決意の心を讃えた。

「アルフレッド！」

そこにブラスター・ブレード達が追いついてきた。

「おお、ブラスター・ブレード。待たせたな。最高の援軍を連れてきたぞ」

「流石だよ、アルフレッド」

ブラスター・ブレードとアルフレッドは固い握手を交わす。

その直後だった。

「アルフレッド……!……!」

「ア、アマテラス!?!」

古城からアマテラスが物凄いスピードで飛んで来た。

しかし、アマテラスだけではなかった。

そこには先ほどの魔法陣でアマテラスがユナイテッド・サンクチュアリから召喚したオラクルシンクタンクの社員達もいた。

「行くぞ、プロミスよ」

「はい、皇女様」

オラクルシンクタンクに所属するユナイテッド・サンクチュアリの皇女の一人“インペリアル・ドクター”と皇女に忠誠を誓った光の使者の異名を持つ懐刀の“プロミス・ドクター”。

「でんじゃー・でんじゃー！ 正体不明の敵発見、排除準備シマス
！」

男性のギリシャ彫刻の姿をした強力な兵器を内蔵した戦闘用ロボット“オラクルガーディアン アポロン”。

「ウィザード、久しぶりにあなたの豪快な魔法を見せてね」

「もちろんだ。お前の鮮やかな星の魔法を見せてくれよ」

星屑の光を操る若き天才魔女“スカーレットウィッチ ココ”と格闘線を好む魔術師“メテオブレイク・ウィザード”。

「私の剣舞で皆を守ります」

燃えるような緋色の髪と四枚の翼を持つ高位の天使“ソードダンサー・エンジェル”。

「戦闘教団バトルシスターの名の下に邪悪なる力を叩き潰します！」

「ふふふ……あの巨大をどうやって倒そうかしら？」

「ふわわわ！？ 怖い敵がいっぱいですっ！」

「おつきいな……でも、小さいからって、甘く見ないでよね！」

「うん、今日はやり過ぎてもいいな」

「さあ、スカッと行くよ！」

バトルシスターのもか、ここあ、しよこらに加えて怪力とバトルアックスを持つ“めーぷる”、四丁の銃剣を携える“ばにら”、体中に爆弾を携えた“じんじゃー”。

ロイヤルパラディンに引き続いてオラクルシンクタンクの精鋭達がドラゴン・エンパイヤに集うのだった。

第20話 聖域の援軍（後書き）

いかがでしたか？

ロイヤルパラディン&オラクルシンクタンクの精鋭の援軍は？

今回は……ドラゴンが暴れまくるかもしれません。

ヒント、何気なくいた“ぽーんがる”。

簡単過ぎますね（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5913y/>

カードファイト！！ ヴァンガード ~次元と未来を繋ぐ永久の絆~

2011年12月29日13時50分発行